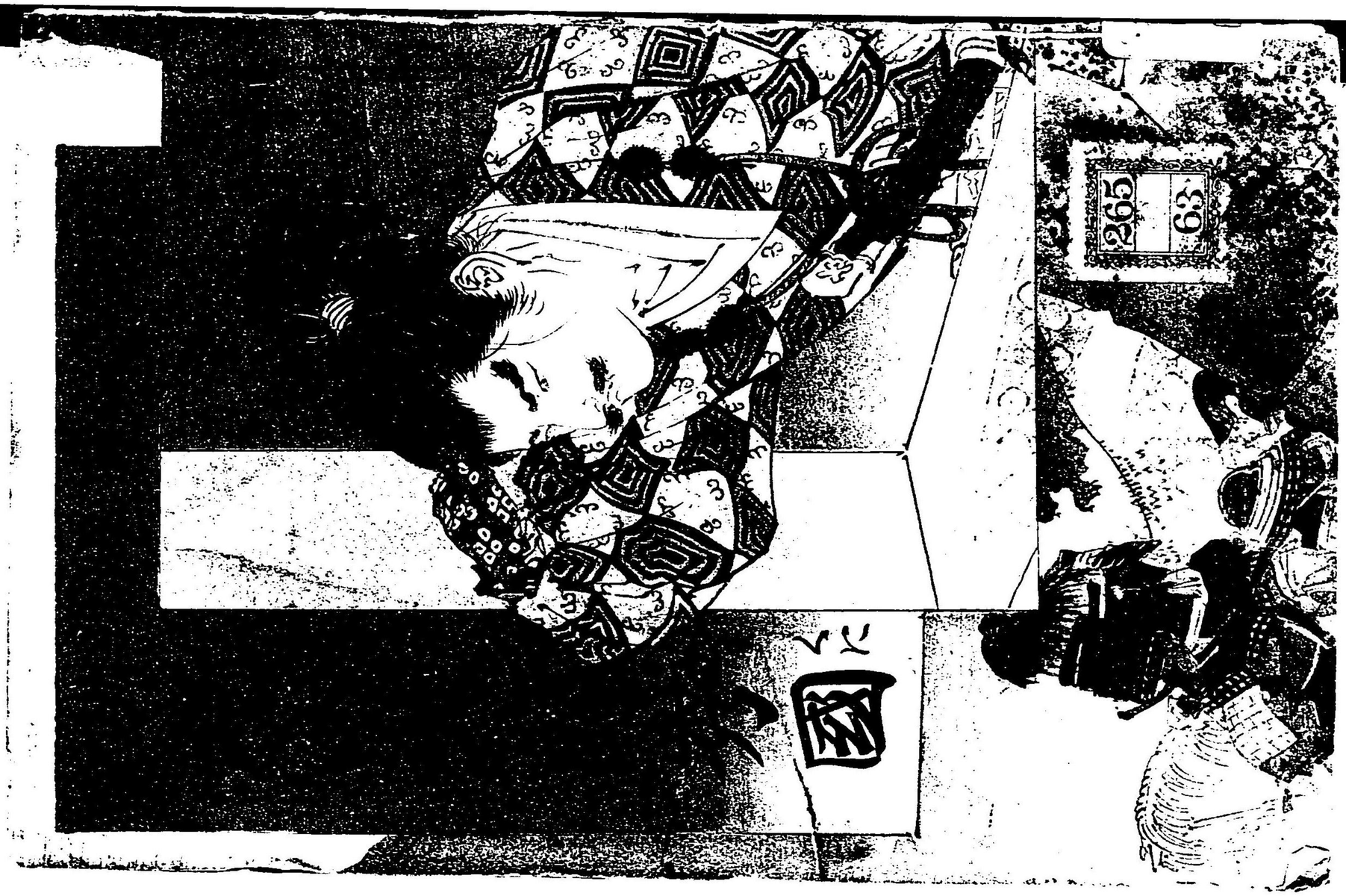
265
63

此村欽英堂發行小說書目

桃井琴玉講演 片山幸三郎速記
水戸黄門 東國漫遊記 竹葉散人著

氏原春山講演 河合源三郎速記
水戸黄門 北國漫遊記 竹葉散人著

氏原春山講演 河合源三郎速記
水戸黄門 四國漫遊記 多田省軒著

氏原春山講演 河合源三郎速記
水戸黄門 中國漫遊記 多田省軒著

氏原春山講演 河合源三郎速記
水戸黄門 九州漫遊記 多田田省軒

氏原春山講演 河合源三郎速記
水戸黄門 九州漫遊記後編 多田省軒著

神田伯龍講演 丸山平次郎速記
大岡政談 小間物屋彦兵衛 多田省軒著

神田伯龍講演 丸山平次郎速記
大岡政談 越後傳吉 巻水亭四龍講演 片山幸三郎速記

神田伯龍講演 丸山平次郎速記
大岡政談 貞女於仙 旭堂小南陵講演 宮本松三郎速記

神田伯龍講演 丸山平次郎速記
大岡政談 緻原檢校 旭堂小南陵講演 宮本松三郎速記

神田伯龍講演 丸山平次郎速記
大岡政談 村井長庵 氏原春生講演 河合源三郎速記

神田伯龍講演 丸山平次郎速記
大岡政談 藤掛道十郎 松林伯圓講演 加藤由太郎速記

伊藤馬谷講演 加藤由太郎速記
實説奥談 鈴木主水 石川一口講演 丸山平次郎速記

松林亭梅朝講演 丸山彦一速記
筑紫講談 博多小女郎 松林亭梅朝講演 丸山彦一速記

探偵奇談 桔梗屋梅吉 竹葉散人著

探偵奇談 喜久井敏三 巻水亭四龍講演 片山幸三郎速記

探偵奇談 毒婦人命犯 多田省軒著

探偵奇談 戀の慘殺 多田省軒著

探偵奇談 原田特務 多田田省軒

探偵奇談 鬼世界 多田省軒著

探偵奇談 電信線 多田省軒著

毒婦毘沙門お辰 巻水亭四龍講演 片山幸三郎速記

毒婦生首お藤 旭堂小南陵講演 宮本松三郎速記

生首後綱 九條の小政 旭堂小南陵講演 宮本松三郎速記

金兎羅御利生 田宮の仇討 氏原春生講演 河合源三郎速記

座光寺源三郎 松林伯圓講演 加藤由太郎速記

石川五右衛門 石川一口講演 丸山平次郎速記

大内十杉傳 松林亭梅朝講演 丸山彦一速記

此村欽英堂發行小說書目

豪傑鬼景清	廣澤虎吉講演 井下士青速記	吉田奈良丸講演 山平次郎速記
貞婦阿古屋	廣澤虎吉講演 井下士青速記	吉田奈良丸講演 山平次郎速記
後の景清	桃井琴玉講演 片山幸三郎速記	吉田奈良丸講演 山平次郎速記
常盤常五郎	桃井琴玉講演 片山幸三郎速記	玉田玉秀齋講演 山田玉秀齋速記
女俠元祿お蝶	桃井琴玉講演 片山幸三郎速記	玉田玉秀齋講演 山田玉秀齋速記
鬼小島彌太郎	西尾鱗愛講演 須上義三郎速記	玉田玉秀齋講演 山田玉秀齋速記
鬼小島武勇傳	石川一口講演 丸山平次郎速記	玉田玉秀齋講演 山田玉秀齋速記
仇討横谷權之助	岡本鉉治講演 河合源三郎速記	神田伯龍講演 山平次郎速記
山家清兵衛	岡本鉉治講演 河合源三郎速記	神田伯龍講演 丸山平次郎速記
松竹梅譽の仇討	松林亭梅朝講演 丸山彦一速記	松林亭梅朝講演 丸山彦一速記
松竹梅後日の仇討	貞龍齋貞水講演 片山幸三郎速記	長井琴玉講演 片山幸三郎速記
豪傑金森源太郎	桃川燕林講演 須上義三郎速記	吉田奈良丸講演 井下士青速記
後の金森源太郎	松林亭梅朝講演 丸山彦一速記	吉田奈良丸講演 井下士青速記
女豪傑金森芳枝	松林亭梅朝講演 丸山彦一速記	吉田奈良丸講演 山平次郎速記
俠客博多五郎	廣澤虎吉講演 井下士青速記	吉田奈良丸講演 山平次郎速記
俠客後の博多五郎	廣澤虎吉講演 井下士青速記	吉田奈良丸講演 山平次郎速記
豪傑於小姓菊之丞	桃井琴玉講演 片山幸三郎速記	桃井琴玉講演 片山幸三郎速記
磯部金之助	桃井琴玉講演 片山幸三郎速記	玉田玉秀齋講演 山田玉秀齋速記
豪傑俵星玄蕃	桃井琴玉講演 片山幸三郎速記	玉田玉秀齋講演 山田玉秀齋速記
一刀流武勇の譽	西尾鱗愛講演 須上義三郎速記	玉田玉秀齋講演 山田玉秀齋速記
女俠美人の於松	石川一口講演 丸山平次郎速記	玉田玉秀齋講演 山田玉秀齋速記
天正三勇婦	岡本鉉治講演 河合源三郎速記	神田伯龍講演 山平次郎速記
後の天正三勇婦	岡本鉉治講演 河合源三郎速記	宇和島龍講演 馬場助
赤穗四十七士傳	松林亭梅朝講演 丸山彦一速記	松林亭梅朝講演 丸山彦一速記
荒木又右衛門	貞龍齋貞水講演 片山幸三郎速記	長井琴玉講演 片山幸三郎速記
岩見重太郎	桃川燕林講演 須上義三郎速記	吉田奈良丸講演 井下士青速記
野狐三次	松林亭梅朝講演 丸山彦一速記	吉田奈良丸講演 井下士青速記
肥後の駒下駄	松林亭梅朝講演 丸山彦一速記	吉田奈良丸講演 山平次郎速記

特9
692

明智の殘黨、丸山太郎秀國

月の舍美華口演
講談研究會員速記

第一席

偖かゝります講演の儀は、既に刊行になりました齋藤利本助の紀綱、明智光秀の遺臣にいたし、所謂三羽烏の一人丸山太郎秀國の傳記でございます。サテ前編に於きましては、齋藤利之助、丸山太郎の再會より、安田作兵衛の隱れ家に於いて、意外にも羽柴秀吉の家臣、福島市松正則に取り圍れ、死地に陷いッて居る所にてお別れいたして置ました、尤とも前編にて御案内の通り、齋藤利之助は其の隱れ家を、福島の郎黨、菊川熊次、市川左源太外二名の者に眼着かれ、こは一剣の猶豫も

明治
43. 5. 25
内務

ならじと、早々幼君光若丸、妻千鶴を伴ない、宇治を出て伏見に隠れ、自分は泉州堺の町人、油屋常喜が閑園と名付けし、數寄屋の内に庇を養ふ安田作兵衛のところへまゐり、此處に御座あつては危険々々、一刻も早くお身を隠し候らへと、頂度談合して居る處を、福島市松の同勢に取り圍まれたのでございます

當今ならば「御用ッ」と云ふ聲が聞りましても、撿事の令狀がない以上は、拘引される筈はないの覺へはないのと申しまするが、昔時は一切そんなことはない、御用と叫けんだからには、イヤが應でも縄打つて引き立てねば治まりません、殊に無鐵砲の福島市松「丹波の名槍と名乘り上げ、右大臣信長公に槍を着けたる安田作兵衛、まつた今一人は秀吉公へ、種子が島を差し向けた利之助、搦め取つて手柄にせんと、家來五十人を引き連れ、御用だ、御用ッと叫けびかゝつたのでございます、此方は足腰不自由の作兵衛なれども、腕に覺への來國俊、切れるぞ、

切れるぞ、桶屋の小伜是れへ出おらふ、作兵衛が相手になるわと、三尺二寸稀代の業物、左手にグッと引き寄せました、殊に齋藤利之助、樣側に突ッ立ち上がり、カラ〳〵と打ち笑ひ、利イヤ珍らしや福島市松、戰場ならば兎も角も、かの猿冠者の指揮も待ず、扳け駈けの出來し立て、恩賞に迷ふたか笑止の至り其の殊勝なる汝を賞し、煙硝彈丸を見舞て呉れるワ、受けられるものなら受けて見よと、懷中より取り出だしたる種子ヶ島、福島目掛て狙ひを着ける、夫れ打たしては大變と、ワッと叫んで樣側近かく、おとり込む市松が同勢、早や此れまでと利之助引き金引くや一發ズドン……夫れ打つたるぞ油斷すな、油斷あるなと渦まく烟り、むせび返ッて騒ぐ間に、利之助は作兵衛を抱き上げ、かねて作へありし床の間の、掛軸で隠してあつた扳け穴に、やッとばかりに飛込んで何處に遁たか分りません、福島は床踏み鳴らして口惜しがり、其處よ此處よと搜索ましたが

晴夜に烏蘇張り行衛が分りません、此の上は此の扱け穴の詮議の種子は、當家の主人油屋常喜、奴に縄打ち御前に引けと、熊川、市川の兩人に差圖して主人の常喜に縄打たし、殘念ながら引き揚げました、既に其の夜も更けましたので、夜明を待つて縄付きの常喜を引き立て、秀吉公の御前へ出仕し右の趣むきを逐一言上いたしました、大度の秀吉大口開けて打ち笑ひ

「普天の下率土の濱、王土に非る所なし、今ま禁裏守護の職たるこの秀吉を、仇と狙へば朝敵同然、其の威を恐れず我を仇敵と狙ふ程の利之助、汝等の手に合ふや、しかし不敵の曲者、安田作兵衛を取り逃したとは殘念なりしぞ、無念と云ふも更に益なし匿いし常喜とやらんを召し連れしはまだしもの事、予が直接に調べる間、庭前に引立て來たれ、鶴の一聲鶴の間に、響き渡る程の音聲でございます、ハッと答えて近習の一人、早々縄付きの常喜を庭前に引き据へました、秀吉公眼下に見下し

「油屋

常喜面を上げッ……サテ〳〵町人には惜しい面魂いちやワイ、其の面搏へと云ひ魂いと云ひ、男の中の男を立てる心算であらふが、常喜、其りや其の方の心得違ひぢやぞよ、宜く考へて見たら分かる筈ぢやが、しかも其方が身命を抛うつて匿ふ安田作兵衛とは何者ぢや、恐れ多くも禁裏守護の職を任られ御身は抑も右大臣の位ある、織田信長公に槍を着けたる大罪宥すべからざる反逆人にあらずや、其れと知て匿ふからは、其方も免れぬ大罪なるも、昔日の情交をもつて一旦は匿はねば義が立たぬであらふ、其の罪を問にあらず、なれども斯く縄打つて引き立てしも、あまりに念の入り過ぎたる其方の働らき、床の扱け穴何處に通ふか、其れが聞きたい……なに云はぬと申すか、サテサラ澁太い奴ぢや、よし云はぬとあらば云はぬでもよい、必ず云ふなよ蠅虫同然の其方共に、馬鹿にせらるゝ予でないぞ……と明鏡の如き猿眼を光して、ハッタとばかりに白眼つくれば、恐

れ入るかと思ひきや、常喜一膝乘り出し、秀吉の顔を穴の明く程と打ち眺め「蠅虫同然と仰ッしやいまするが、蠅虫ほど身分の高下を差別へぬものはございませんぞ、尾籠なお話じやが糞に止つた其の足で、御前のお頭を汚しまするやら、其處が蠅虫恁う申しては如何なれども、安田奴の裘肚胸かと存じまする、作兵衛をお憎しみ遊ばす御前のお心、あまり器が小くて、この常喜には腑に落兼ねまする……サ、ア何故と仰ッしやれ、成程右大臣家に槍を付けましたは作兵衛に相違ございません、陪臣の身をもつて御歴々に對し奉まつり、槍を向ることの不敵の振舞い、八裂きの刑にも當たりませうが、是れ作兵衛が主命を受けてこそ、戰場に立ちもすれ槍も着けたものでございませう、さすれば御前樣の當の敵は桔梗の主人一人にて事は足るかと存じます、殊に「明智光秀こそ叛逆の大罪人たれども、家の子郎黨又たは雜兵の者共は、雜れ主命に依て働きし可憐の者なれば

前非を悔いて我れに降らば、吾れ其の罪を問はず、又降らすとも仔細なし」と仰しやつた程の御前さま、同じ桔梗の旗下ながら、作兵衛のみ其の御恩澤に浴することの出來ぬとは、あまり依怙の御裁決と存じまする、しかし彼れを生し置ては枕を高ふ寢られぬとの思召しなら兎も角も、左なくば足腰立たぬ不具の作兵衛、このまゝに御助命の儀を只管ら願い上げまする……と當時飛ぶ鳥も落す程の秀吉の威光も恐れず、言いたいまゝに吐き出した常喜の魂しい、此奴一と筋縄では往かぬ老獪、捻り殺すは安けれど、其の肚胸の面白さに、秀吉莞爾と打ち笑ひ、無口と思へば思ひのまゝなる出放題、イヤ舌長し其方が辯口、鳥も色では憎まれぬ、其の口からと言ふではないが、其方も其の舌の動かしやうで憎まれる、一層の事舌を切つて無言で暮せヤア〳〵誰かある、彼奴が舌の根切り割けッ、ハッと答えて福島市松、昨夜からのむしやくしや腹を癒さんと、小柄片手に庭

に居り常喜が側に下り立ちて、　市「ほざいたり其舌の根、今市松が割て呉れるぞ　常「口は災難の門とやら、舌を割るとは常喜奴に餘命を安樂に送れとの御宿けか、たゞし桔梗の殘黨のことを云ふなとの、ことか、其れが聞かして頂きとう存んじまする　秀「またしても無用の腮いかに桔梗の殘黨が、此の秀吉を狙へばとて、それに擊るゝ秀吉ならず、先づ當分は六十餘州に放し飼ひ笠も無用、頭巾も無用白昼大道を濶歩するとも、誰か指一本指すものか、なれども妙に動くと廣ひ日本に、五尺の軀体が置けぬ程狹くなるのぢや、立ち歸へッて安田に申せ　常「安田に申せと仰しやいまするが、舌は割れる安田は居らず、なんとこれが語られませう、恩にも付かぬ御前のお言葉、もう耳にするだに五月蠅くなつた　秀「何に其の一言が癪に障つた、市松舌ばかりでは腹が癒ぬぞ、序でに其の兩耳を削でとれ、憎くい奴ぢや……ハッと答えた顱島は、後ろより常喜が顱髮を引ッ掴み、口を開

かせ小柄突き込み、無慘にも舌の中央より兩つに掻き割き兩耳を削ぎ落し、其のまゝ御本陣の御門から外へ突きだしました、隨分慘酷な話しぢやございませんか、是れが普通の男なら其の場で悶絶する奴なれども、當時の秀吉を以前の草履掴みと思ふてか、憎まれ口を吐く程との常喜ですから、其のまゝ其處を駈け出して、其の頃名醫と噂の、三宅杏庵先生に治療をたのみ、十日間では全快するが、耳は早や此のまゝの不具となる外治療の仕方がないとの事、まア舌さへ治療が叶へば生命一ッの拾ひ者、これからが秀吉との此の常喜が、智惠と肚胸の出し比べ面白くなつて來たと、雀踊りしたのは町人ながら、天晴れな男ではございませんか、サテお話がこゝで變つて此方は北國柴田の一族でございます、京洛紫の大德寺に於て、散々の恥辱を蒙むり、無念骨髓に徹して我が所傾に引き揚げましたが、とうも此のまゝ泣き寢入にしては居られません、殊に佐久間玄蕃盛政

は、思慮分別のない猪武者の強がり者で、なんでも北國の軍勢を狩り催し、羽柴を討ち取ねば腹の虫が勘辨が出來なくなつたし、其れに就けても御工夫もございませうが、一應承たまはりとう存じまする。

盛政「まア待て〳〵、什麼に狼狽ることはない、尤も工夫無きにも非ず、其の討つ可き手段もないではないが、何にを云ふにも、彼奴當時禁庭守護の職たり、また右近衛少將従四位の官位もあれば、今ま迂濶に兵を向くれば、恐れ多くも天朝を奉じて朝敵呼はりするであらふ、さすれば我れに於て八分の損あり、先づ時機を待つて事を計らねば相成らぬ。

勝政「でもございませうが、か〻る恥辱を受けながら、此のまゝ時機を待つなどは決して當を得たるの策でない、智謀姦計に企みなる猿面冠者奴、必ず其の裏を掻に相違ない、喃瀧川殿、先んずれば人を制す、後れては制せらる、宜しく今まの機に乗じ、兵を擧

るに如かずと思ふ、左は思召はぬか。

一益「左樣々〳〵、如何にも佐久間どの仰せの通り、時機を待つとは氣が永すぎる、途は遊し日は暮れる、賴もしくない柴田どのゝお言葉、吾々一同不同意でござる、なんとか一工夫ありたいものでござると、頻りに羽柴征伐を勸誘たてゝ居りまする、然るにどふ云ふものか鬼柴田も云はるゝ勝家が、この羽柴征伐に乗り氣になりません、慾して小田原評定の所へさして、中國小早川の家來進藤左衛門と名乘て、勝家公に御面談申し上げたいと觸れ込んで參つたものがございます、見れば小早川の重役とも思はるゝ程の立派さ忍びと見へて供人兩三名、駕籠でまゐりました樣子でございます此の旨評定の席で披露いたしまする、勝家は不審の顏色。

勝「ナニ中國小早川家の臣進藤左衛門とな、姓名は聞いたやうでもあるが何にしにまゐつた、主人の使ひと申すか。

取次「御意にございます。

勝「ナニ心得ぬ小早川の使者ではあるが、なんにもせよ

之れへお通し申せ　取次ハッ、心得ました……と取次は引き下るやがて案内に連れまして、此の評定の席に現はれまするは、果して小早川家の臣にして、進藤左衛門でございませうか、次席で申し上げませう。

第二席

思ひ懸けなき小早川隆景の家來、進藤左衛門がまゐりましたとの事で、不審に思ふた勝家は、面會て宜いやら悪いやら、どうも決斷が着ません、然るに强かり者の佐久間盛政「小早川の使ひとは面白い、彼の猿面に煽動られ、戰爭の催促にまゐつたか、左はなくして我れに心を寄せ、東西氣脈を通じて猿を討んの心底か、何れにも致せ此の座に於いて、面會するこそ面白けれ、瀧川氏には如何でござる　一益「夫れが宜しい、兎も角もこれへお通し申さうではござらぬか」　勝「然らば此の座で……と、いよ〳〵この評定の席で面會することに致しました、間なく取次の案内で静々とやつて參りますのは中國の大々名、小早川隆景公の家臣、進藤左衛門とは眞赤な僞はり、眞は明智光秀の殘黨しかも三羽烏の一人たる丸山太郎秀國が化の皮の贋者でございます、然るに其んなことゝは御存知がない、飽くまでも小早川家の使ひと思ひ込んで居るから　勝「コレは〳〵　進藤どの、拙者が織田家の元老柴田勝家、これなるは勢州桑名の城主瀧川左近將監一益どの、また彼れは拙者が甥にして、加州大聖寺の城主佐久間玄蕃盛政、是れは誰れ、彼れは誰れと一々紹介てくれますが是方は丸山太郎の贋進藤、そんなこと聞かなくとも、百も承知二百も合點で居ります、しかし其樣ことは色にも出さず

進藤　これは〳〵　元老始め各將のお揃ひ、拜謁を蒙むるは身の大慶、以來お見知り置き下されませう……サテ今日態々まゐりましたは、主人小早川隆景の内意を蒙り、隆景に代つて御相談に

まゐりました、尤も委細のことはこれなる書面、篤斗御披見の上、御回答こそ願はしう存んじまする、と、懐中にみ込みました腹帶の中より、取り出しました一封の書狀、敬々しく勝家の前に差し出だしまする、勝家は手に取り上げ　見ナニ小早川どのゝ御書翰とな、遠路の所御苦勞でござる、勝家此れにて披見いたすでござらふ……と、件んの書狀の宛名、裏書、封目まで改ためまして封押し切つてサラ〳〵と、披いて見ると流石中國の名將たる、小早川隆景の書面程あつて、筆蹟の見事さに感じ入り、讀み下す文章は、サテも意外こりや如何ぢや、御存知の通り、吾等秀吉に和親を結び、味方らしくは見せ掛けては居るものゝ心の中は左樣でない、叶はぬ戰に身を失ない、家を亡ぼすも無念さに、心外にも和親を結びたるなり、然るに北國北之莊とのには、此の際羽柴征伐のお心なるよし、是れ願うてもなき時節到來、貴殿北國の勢をもつて進み玉はゝ、吾れは毛利、

吉川の一族と共に、兵を中國路に催うし、京洛路に攻め寄せんには、如何に秀吉智あり計略あるといへども、腹背に敵を受けては叶うまじ、また三河德川との始め、御同意あるは必定なら ん、とうか我が意の存する所を推察あつて、御贊同下さるべし……との文意でございます、此れを讀んだ柴田勝家、今まで沈んで居た顏色がいつの間にやら浮々となつてまゐりました　盛政「伯父上にはお獨りでお悅びの樣子でござるが、何んぞ宜きお音信でもございまするか　勝宜いとも〳〵　上々吉、瀧川どのも御覽候らへと差し出しまする件の書狀　盛政「とれ拜見仕まつらふ、瀧川どのも御覽あれと一同顏面突き出して讀んで喜びました、中にも盛政の如きは膝を叩いて打ち喜び　盛政「こりや恁うなくちやならぬ處、流石は名將小早川殿の御卓見伯父上にも御同意あつて然るべし、たゞ此の上は北國勢と、瀧川どのゝ東國勢と、小早川どのゝ中國勢をもつて京洛に攻め寄せんには、彼の猿冠

者の首級を見るのは朝飯前、ちや、あはゝゝゝ喃ふ瀧川との左樣ちやどさらぬか、一奮左樣々々、これに對して思案も工夫もない筈、サア元老御同意あつて然るべし……勸誘られんでも、殺うに於て異議はない、何にかの手筈は緩々と御相談いたすことにして、先づ遠路の珍客、進藤殿に御酒まゐらふ、今宵は當清洲に御泊り下さい……勝家等の贊同を得た丸山の進藤は、これぞいよ〳〵柴田と秀吉の喧嘩になるぞ、兩雄鬪へば何にか疵つき何づれか倒るゝ、面白くなつて來たと、腹の裡では笑つて居ても、表面は小早川の使者であるから「進藤」早速の御承引、定めて主人も滿足でがなございませう、此の上は一味同体の神文誓紙を御尊覽に供れまする……と、再び腹卷の中より取り出しました一通、勝家の前に差し出しまするとと、勝家は大恐悦で「勝」ナニ、これが小早川との〻一味同意の誓紙となる、此れはまた御念

のいつたことでござる……成程々々神文でござるか、此の上は拙者もお土産に差し上げるでござらふ……と、こゝで一同がいよ〳〵一味の誓紙を認めまして、之れを進藤に渡す、進藤は押し戴いて歸ると云ふを無理に引き止め、まア〳〵何にはなくとも一献差し上げたい、かく神文を取り交したる上は親族一家も同然でござれば、是非に今夜は當清洲にお泊り下さいと、寄つて集つて止まするのを、丸山の進藤も、其れでも歸ると云ふ譯にはまゐりません「進藤」然らばお言葉に甘へ、御厄介に相成りませう……と、是れから酒宴となりましたが、酒と來た日にや一升より二升宜しの丸山太郎、强がり者の佐久間を相手にサア飲む程に〳〵お銚子の代りが間に合ぬと云ふ有樣でございます早や其の日も暮れまして、銀燭の光りを杯きに晃めかし、差しつ酌れつ飲で居りましたが、丸山の進藤は勝を進めて「進藤」サテ元老柴田公には、相手たる、羽柴方の内情を宜く御存知でござ

いませうか　時イヤ、其れが充分でないから、つい〳〵心ならずも兵を動かす決斷が着ないでなア　遣藤「デモ御座いませう、實は秀吉、大德寺一件に就いても貴殿方に對して、あれだけの無禮を働きましたる上は、歸國早々兵を向けられるは必定なれば當方でも此れに對いする準備を廻らさねばならぬ、しかし其れには第一軍用金でござる、これには流石の秀吉も殆ど當惑、かの信長公御法營に就きましても莫大の費用にて其の金子も本願寺の坊主から〆め上げたもので、彼れの懷中の乏しさもお分りになりませう、就いては今回貴殿方の軍勢を引き受るに其れだけ軍用金がないとの始末、一昨夜、龍々主人の陣屋にまゐり、軍用金を貸て呉れぬか、さすれば北國柴田の所領の一部を差し上げるからと虫の宜い交渉い、サテは秀吉軍用金の缺乏となる、今まぞ北國と心を協せ、秀吉を亡すは手裡にありと、かゝる御相談にまゐッた者でござる、此の上は一刻も早やく御仕度あつて然るべしと、今にも秀吉の首が落さうに持ち掛けたから堪りません、たゞさえ油の乘つて居る勝家、佐久間の連中、膝を叩いて打ち喜び　時左樣でござるか軍用金の缺乏とは宜く〳〵運の盡たる所、シテ小早川どの〻御返事は、どうでござッた　遣藤「それは申すまでもなく、和睦以來味方らしくして居る上は、何條嫌と申しませう、北國勢今まにもまゐらば、軍用金は御入用だけ御融通申さんと彼れに安心いたさせ置きましたが、彼れの難儀が思ひやらるゝではございませんか　盛政「いよ〳〵面白くなつて來た、伯父上お祝ひに一献差し上げませう　時こうなると酒の味は格別ぢや晴、しかし盛政、其許は相變らずの貧乏で、軍用金の貯へも有るまいが、予の手許から廻すことにいたさうか　盛政「サレバでございます、伯父上の御存知の通り、例の貧乏で貯へとて之れ無く、また有つたところで拾萬兩そこ〳〵、俗にも申すが金子のないのは首の無いより苦痛とか、素破となる

と何うしても先きに立つのが金子でござる、とうか少し御融通が願はしく候らふ　勝「よし〳〵拾萬あるとすれば最う五萬兩もあつたら充分ぢや、これを渡して置かう使ひを差し立てたら宜らふと、止は宜い」のに勝家は、酔て居るので氣が自然と大きく成つて居るのと、小早川の家來進藤に金子のあるのを知せん爲めに、五萬兩を此の證引き換へに渡すべしと云ふ書付を認め て渡しました、盛政は元來豪傑肌で、云はゞ金子には少し迂と ひ方てございます、まして此方も酔て居るから　盛政「これは近頃辱けなく存じまする何れ歸國次第、御融通を願うことにいたしませうが、サテ伯父上には御有福でござるが瀧川はどのはまた別でござらふあはゝゝゝ　瀧川「イヤ拙者とても御貴殿同樣、お話しいたすだけの貯へもござるまいが、先づ五萬の兵を二ケ年や三ケ年は充分に養うことは出來ませう、御入用の時は何時なりと御申越下されい、なに貸の借るのと云へば他人向き、憎き秀吉

を亡ぼす爲めの軍用金、融通するはお互ひの義務でござる　進藤「左樣でございます、佐久間どのには瀧川公より御融通をお願ひあらば、柴田公にも御安心かと存じられます　盛政「成程と〳〵、伯父上の脛ばかりも噛られませんまづ瀧川公より五萬兩借り受けて置きませう　一益「サア〳〵何時なりともお渡し申さう、これを使者に持せてまゐられよ、すぐにお渡し申すであらふと、瀧川も五萬兩の引換證を書て渡しました　盛政「イヤ、最う此れさへあらば、思ひ切つた戰爭が出來ませう、伯父上と云ひ瀧川どのゝお志し、玄蕃有り難う存じまするぞと、二通の證文を紙入の中に仕舞ひ懐中いたしました　盛政「イヤ最う飲めません、まア進藤どのお重ね下さい　進藤「イヤ拙者も此の上は頂けません、然らば此れで納盃といたしませう……これで酒も濟だ夜も更けて來たので、今宵は進藤も清洲に泊ることにいたしました、其處で小姓の案内で、各自に寢間に導かれ、酔て居るから其のまゝ床に

這入て寢ることにいたしました、サテ夜も次第々々に更け渡り當今の時間で云ふ午前二時、川の流がれも暫しは淀み家の棟木も三寸下ると云ふ丑の時、進藤が寢間の障子をコツ〳〵叩き、

△丸山氏、お寢入り玉ふか……と聲を懸たる黑裝束に目ばかり頭巾の忍びの者がございます、丸山は起き直りこれも小聲で

丸山「おう、石川どのか、待つて居たところでござる、サア靜かにお這入り下さい　石川「何しろ始めての城内、何れにお寢みあるやら其れが分らず、殆ど當惑仕かまつゝたが、やッと此の間と見當が着いたので、少し遲くなつたが漸々只今、シテ首尾は如何でござるか　丸山「壁に耳あり高うは云はれぬ、是れ〳〵でござると、何が私語〳〵口から耳に……　石川「シテ見ると彼の佐久間奴が五萬兩宛の證文を持て居るか、引き出せと云はるゝか、何でもないことシテ其の證文は……これ〳〵でと口から耳……　石川「成程、其の證文で五萬兩を、引出すと云はるゝか、面白い〳〵

然らば盗んで置きませう、吉左右は明日歸宅の上で……　丸山「宜い返事をお待ち申すぞ　石川「御心配ある丸山どの、我が忍術をもつて奪ひ取つて御覽に入れる、御免とばかり忍びの者は、廊下に出たかと思ふと、最う姿は暗に消ました、サテ此の忍びの者を丸山は石川々々と申しまするが、何者でございませう、一寸一息入れまして……

第三席

丸山が石川と呼だのは、これぞ後世盗賊の元祖の樣に申しまする石川五右衛門にございます、成程盗賊には相違ございません、盗賊も盗賊、普通大低の泥棒ではない、たゞ何かなしに國主大名の屋敷ばかりを荒すと云ふ大變な男でございます、然らばなんの爲めに大名と相手にしたかと申すに全たく大金に有り附からでございます、然らば其の大金をなにゝするかと云ふに

理由はこれから本編が佳境に入るに從がふで分るのですから、別段こゝでは申し上げません、しかし此の丸山太郎と同時に此の柴田の清洲の城には忍び込んだものか、此の道筋を概略申上げませう、サテも此の石川五右衛門と丸山太郎の關係は、既に前編で申し上げて置きましたので、こゝで管々しく申さなくとも御承知でございませうが、其の當時五右衛門は京都南禪寺の邊りに屋敷を構へ、表面は武藝の指南道場らしく見せかけて居りまするが、内部は決して左樣でない、先づ明智の殘黨丸山太郎を始め佐野左衛門、まつた小山田源次なんと云ふ一癖ある連中と、諸國の浪人幾百人を養ひまして、自ら石川組と稱して何にをするかと云ふに、たゞ何にかなしに秀吉公の寢首を掻て、天下を再び戰國の世となして、己れ等先づ國主大々名にも成らふと云ふ野心ばかりで、始終什麼ことばかしに、工夫して居るので、丸山や佐野の爲めには願うてもなき味方を得たものでご

ざいます、然るに近頃に至つて此の石川組には、珍客が二人突然とやつて來た、一人は丹波の名槍と世に唄はれし安田作兵衛今また一人は明智の飛燕冠者と、音にも名代の齋藤利之助光政泉州堺北の莊、油屋常喜が閑園の隱れ家も、哀れ福島市松の爲めに踏み荒され、一發の種子ケ島の煙りと共もに姿を隱し、今まはこの石川組に身を寄せて、剛勇我武者の作兵衛も、惜からぬ命を棄もせず、暫し石川に養はるゝ果敢ない境遇になつたのでございます、然るに齋藤、安田の兩人を迎へ入れた石川組は宜き軍師を得た喜びで、いよ〳〵此れから大仕掛の仕事をせんと先づ重なる連中は利之助を上座に協議を開きました、其の時利之助は、太郎を中國の大名、小早川隆景の臣、進藤左衛門と化けさせ、計略は斯樣云々、また石川組のは進藤のお供と姿を扮し、まづ清洲の城に乘り込んで、細工は丸山に任しておいて勝家か一益か、何れか書くに相違ない軍用金引き換へ證を奪ひ

取り、今度は佐久間の家來となつて軍用金を引き出も妙でござらふ、先づ拙者の考へでは五萬兩は動かぬところ、石川どの五萬兩の大仕事、やつて御覽なさい屹度取れる間違ひなしぢや……と利之助の智謀には、一座の者も感じ入り

○「大將、やつたら五萬兩だ、豪氣ぢやございませんか

□「五萬兩とは耳寄りだ、しかし我々では叶はぬことだ、どうでも例の忍術でなくちや出來ない、何にしろ相手が佐久間と云ふ強がりだからな

△「さうだ〳〵迂濶りは手が出せねへ、しかし、丸山の先生と、大將の仕事なりや、なアに、佐久間が鬼でも柴田が蛇でも、恐いことはないぢやねへか、大將確かり腹みまするぞ……ワイ〳〵云つて居ります、五右衛門は篤斗思案し

五「成程齋藤先生の策略には恐れ入つた、五萬兩確かに石川が受け取つたも同然、善は急げと申すから、思ひ立つたが吉日で、これから直に丸山先生乘込みませう、駕籠で急げば明日の正午までには清洲までまゐ

りませう、

太何時でもお伴いたさう、と、これから小早川隆景の偽筆を振ひ、美事に認めましたは外ならぬ、且つて大德寺の燒香の場に於て、秀吉公に手裏劍を打ち掛けた三羽がらすの一人たる、坊主の觀念と化け込んだ佐野義明でございます、元來此の義明は、文武兩道に秀でたるお方で、取り分け筆を取つては明智の家で右に出る人もない程の弘法で、佐野の書として中々評判物でございます、この人が書たので、なか〳〵立派で柴田も疑がひを入れることは無らふと云ふ、其處で萬事の要意を備へ、丸山は進藤と化け込み、五右衛門は進藤の下郎となつた、しかし二人では淋しいからと云つて今ま一人は小山田源次がこれも下郎となつて三人は駕籠を飛してこの清洲に乘り込んだのでございます、ところが、案に違はず、柴田が五萬兩、滝川が五萬兩の引き換へ證を書て渡したので、五右衛門は其の事を丸山に聞き〻た占たと雀躍りして、奥の間深かく忍びいりました

サテ此方は佐久間玄蕃でございます、何にしろ丸山の進藤を相手にいたし、充分に呑んで居るから醉たの醉ないので、例の強がりを振り廻し　繁政　吾儕に限ッて宿直は無用、酒は呑んでも性根を奪はれる程の玄蕃にあらず、この大廣間で寢るから夜具を持てと、先づ宿直の武士を遠ざけまして、其の身は其處に倒れたまゝで大鼾、玄蕃程の勇士でも、酒と油斷に大の字で、グウ〳〵と叫けぶが如き鼾をかいて、前後も知ず寢入つて居ると、忍術を以つて忍び入つたる石川五右衛門　五「恐ろしい酒臭いなまるで熟柿ぢや、おッと有る〳〵、此の紙入の中にか……おやこれが柴田の五萬兩、おッと此れが瀧川の五萬兩、合して拾萬兩か、それにしても齋藤先生の智謀には恐れ入つたな、やれ〳〵有り難い〳〵、と例の引き換へ證を懷中に押し込み、廊下に出るかと思へば姿は消へて跡白浪、たゞ玄蕃の雷の如き鼾の聲のみでございます、然るに小山田源次は五右衛門が出た跡

で、旨く往くか知らんと、今更ら云はゝ敵地ですから、心配いたして居りまする、戻ッて來た五右衛門が　五「小山田さん、旨く往きましたよ、何しろ慾張りの佐久間玄蕃奴、拾萬兩の書き付けを貰つて居たが、彼奴も柴田も、あの瀧川の親仁も慌くことでござらふ、慌くと云へば佐久間氣付かぬ間に物にせんと大變ですから、明日は早々歸りませう　源「夫れは近頃面白い仕事でござる、よし玄蕃が氣着たところで、此方が先きに廻ッて取り出すのだから、大丈夫物になる、なに心配は及ばぬ事だ、しかし早く夜が明けて呉れると宜いがな　五「こうして見ると馬鹿に夜が長いやうだと、豪傑揃ひでございますから、枕に就いたが早いか、もう他愛もなく夢現つでございます、やれ〳〵宜う寢ましたと、兩人が眼を覺した時は、旭が窓を照して居るのです、其處で顏を洗ひ、朝の御飯も馳走になつて、先づ一服と云ふところへ、早やお客樣お歸りッ……と觸れ出した　○「モシモ

シ進藤さまの御家來衆、はやお歸りでございまするとお待への知せでございますから、石川と小山田の兩人は、式臺お玄關に草履を揃へて待つて居りまする、ところへさして丸山の進藤は佐久間玄蕃に送られて玄關に出てまゐり、進藤「然らば佐久間どの何かの事は最前も申した通り、よく御相談の上、内々で御家臣を手前主人の陣屋まで」盛政「承知いたしてござる」進藤「これにてお暇まを仕まつる」盛政「御使者御苦勞でござつた……と、互ひに目禮にて別れましたが、丸山は用意の駕籠に打ち乘りまして、當清洲の城を後にして、いよ〳〵城下を離るゝと、待せて置いた用意の早籠に石川も小山田も乘り込みまして、大急ぎに急がせ駈けさせ、無事に南禪寺の我が住居に立ち歸へりました、利之助は三人を出で迎へ、利「御苦勞に存ずるして首尾は如何でござるしましたか、」石「イヤもう先生の智謀と丸山さんのお働きには殆ど敬服いたこれどらん下さい柴田の分が五萬兩、お負けに瀧川

の分が五萬兩、なんと大した仕事でござる、利「夫れは御手柄々々、して丸山氏、柴田始め瀧川、佐久間の連中、定めて羽柴征伐をいたすでござらふな、太「仰せまでもない、散々油を掛けて置ましたがいよ〳〵喧嘩になりませう、利「それでよし〳〵、しかし喧嘩は來春の事でござれば、一時も早く此の書付けを現金に換ぬと面白くない、先づ北國北之莊には丸山氏、桑名には小山田を佐久間の家來と化けられ、此の狀をもつてお乘り込み下さい、石「承知いたしてござると、こゝで石川組の連中を二十五人宛、二組の供廻りを作へ、いよ〳〵夜を日に續で、北之莊と勢州桑名に乘り込むことに相成りました、尤とも策略は利之助の智惠袋から絞り出したので大丈夫、各自門出の盃を酌交し明日早朝より出發と云ふので仕度でございます、○「おい〳〵お前は北國行きか、口「お前は桑名へ往くことに當つた、口「桑名か夫りや宜いな、俺も往たことは無へが燒蛤が名物と云ふ

ぢやねいか　○「左樣だ、まア名物は蛤だね　□「蛤も宜いが生てる奴に足を取れちや大變だよ　○「馬鹿云へ、お前こそ確かり仕ねへと北國の女郎は手管が旨へと云ふぢやねへか　△「おう、手管もあるが第一雪の國だけあつて色が白くて肌が馬鹿に奇麗だと云ふよ　甲「おや〳〵お前はイヤに北國の女郎に肩を持つが馴染でもあると云ふのか　△「馴染どころか、年月焦れる女房が居るよ　□「なに其奴ア初耳だが北國はどこに居るんだ　△「北國ぢやねえか、あの橋下に　甲「橋下ぢやあるまい土手下か　△「何處でも宜いぢやねへか何にしろ足掛け二年から通ふて居るからまるで嬶アだ　乙「おい〳〵惚けなんザア置いて呉れ　△「イヤ惚氣ぢやねへが、今度この大仕事で割附が出りやアなあ、まづ一番彼奴と世帶でも持つとせうかい、やれ〳〵有り難山のほとゝぎす、姿見たくはないかいな……　乙「喧ましい唄なんか歌ひあがつて、大將に聞えたら、また叱言だぞ　△「なんでも可はねへ、

お前の知たことぢやあるまいし、いらざる世話の燒豆腐、戀に焦れて居るものを……　甲「喧ましいワイ、早く寢ないか　乙「仕度が出來たら寢て仕舞へッ、ワイ〳〵騷いで居りましたが、何時の間にやら寢入つたものか、寂と靜まつてまゐります、まだ寢もやらぬ利之助、伏見の里に隱しまゐらせし若君、光若丸とのゝ身の上を、どうかなして今ま少し安全な地に移したい、氣丈な奴と云つても高が女の腕ですから、嘸ぞ心細く暮して居るであらふ、一層の事石川に打ち明けて相談せんか、頼み難きは人心、何日何時變心いたすやも知れざれば、迂濶には明かされず、いよ〳〵此れには當惑し、よく分別も盡き兼ねて、其の夜も雞音と明け離れ、頼みとする丸山は北國へ、小山田は桑名に行かねばならず、此處では安田、伏見には若君、これを一人で守らねばならぬので、其の苦心も一通りではない、彼れ是れと思案中、丸山も、小山田も出立して了ゐました、其處で兎も角

一應堺の町人、常喜が宅へ訪れ見んと、早々身仕度をいたして堺に下ることに相成りましたが、いよ〳〵三十石での一と騒動利之助の大力を現はすと云ふお話し、一寸一息入れまして……

第四席

サテも齋藤利之助光政は、岳父安田作兵衛を危難の場より助け出し、只今の所では石川五右衛門の屋敷に身を隠し、先づは當分安心と、ヤ、安堵とは思ひましたが、何んと云つても先き立つものは軍用金でございます、殊に石川組も益々繁盛で殆んと二百人からの同士を養はねばならぬので、五右衛門は例の忍術をもつて大名の屋敷に乗り込み、盗賊の首領となつて盛んに金銀を集めにかゝつて居るので、京都滞在の大名方は何づれも盗難にかゝらぬ者はない、其處で秀吉公も小首を捻り、此の泥棒奴なか〳〵一と筋縄では往かぬ曲者、此の詮議探索には、粗

暴の福島では覺束ない、誰れぞ無いかと御思案の末、加藤清正片桐且元の兩人を、京都市中嚴固の役を仰せ付けに相成りました、是れが當今ならば東京の警視廳のやうなもので加藤虎之助清正が差し詰め警視總監の役廻り、尤も片桐は其の副役でございますが一日交代で洛中洛外を嚴重に警固いたすことに相成りました、かくと聞き出したる利之助の驚きは如何ばかり、餘人ならば兎も角も、虎之助と來ては油斷がならぬ、今のうちに安田とのを安全の地に移さねば何日何時手の廻らぬとも云へぬ我々、危險至極と一と目も癒ねず、工夫を凝したが情けなや、日本六十餘州の其の中に、六尺不足の安田作兵衛一人を入れる所がないのです、世が世であらば猿面を白眼返して遣べきに、木にも竹にも、心置く落人の哀れ身の上、殊に伏見の里の茅屋に、人目を忍び世を忍び、憂き年月を過し玉ふ幼君の御身の上、嘸ぞや心細くもお在らん、是れとても油斷がならぬ、はて何ん

とせん兎やせんと流石剛氣の光政も、幼君の御身の上、且つは岳父の身の上を、妹背の縁も西東、別れ〳〵て味氣なく、世を送る妻の身を、思ひ廻して兩眼に、溢れて出る血の涙　利「あゝ我れながら不覺の涙、斯くてはならじと氣を厲まして、兎も角く堺北之莊、油屋常喜を訪れて、なんとか此の後の所置を探が分別、萬一彼れにも手が廻り、油斷がならぬと云へば最う其れ迄でぢや、よし其の時は其の時として又工夫もあらふ、左樣だ〳〵と打ち首肯き、五右衛門にも作兵衛にも、一寸其處まで遊びにまゐる、しかし今宵は歸らぬかも知ぬから、安田どのお身の上、宜しくお賴み申す　五「然らばお早くお歸宅下さいませ、たゞ幾重にも御要愼、一歩踏み出だせば敵の中、イヤ最う御油斷はなりませぬぞ　利「御心配下さるな、近頃腕が鳴つて居ますではあはゝゝ、深編笠に面体隱し、ブラリと出掛た南禪寺、當今ならば辭はない、七條から大阪へ一時間餘りで着く滊車の

便利もあるが、三百年も昔の話し、利之助は伏見に出でゝ、こゝから三十石で淀川下り、大阪は八軒家に着ねばならぬ、伏見と云へば幼君にも妻の千鶴にも逢たいが、其れも叶はぬ今の身の上、たゞ餘所ながら稲荷の社へ、武運長久を祈り上げ、頂度出船は夜を幸いに、直樣船に乘り込まんと、先づ船宿に着くとサア大變な客人でございます　○「おい〳〵夜船ぢやねへか　男「貴下方、お下りさんぢやなく夜船だから寢て行けるぢやねへか　男「貴下方お下りさんぢやおまへんか、モシ　○「なんだと氣味の惡いこと云つて居やがる、お下りおまへんか　○「なんだと　男「そやおまへんがな、大阪下りと此の頃不便て困つてるんだ　男「別に御定宿がおまへんなら、私共もへお泊りを願ひます、の方へ御下りさんではおまへんとすか　○「其んなら其樣と早やく云へ、おまへん〳〵と何んのこッたぞ、大阪まで行んだぞ、またお船なら三十石最う程なう出ますさかいに、なにかに附け

て御便利でございます　□「おい若い衆さん、折角だが京都の戎屋で頼まれて來たには、伏見に行つたら寺田屋へ寄つてやつて呉れと頼まれたから、何所へ寄るのも同じだが、頼まれたから其の寺田屋に往かなくちや氣が濟ねへからな　男「有り難う存んじます、私家がお尋ねの寺田屋で……　○「何軒手前へだ　男「手前と申しますのは私のことで　□「おう、お前の宅が寺田屋か、其れぢや厄介にならうかを……　○「此れッ切りだ持ッて呉れ……　男「お連れさんはお何人さまで　□「しじう二人で……　男「有り難うございます……お洗ぎの盥を用意してや、四十い〳〵　仰山なお客様だすせ……　二人さまで、ナニ桶がない、無い筈はありまへんがな、早う持つて來たらどうやな、何にをそないにゴテクサして居るやらふなこの船でお下りやさかいに、お急きやがな……エ、一寸お尋ね申しますが　○「なんだえ　男「只今のところ、ではお二人さまで、

跡から四十人様來やはりますか何ないになりますので……　□「誰れも來るぢやねえ　男「そやけれども貴郎はん四十二人やといふてぢやおまへんか　□「馬鹿云へ、始終二人切りの旅ぢやといふんだ、間抜め　男「そうどすか、まるで貴郎はん、俄かやかなあほらしい……おういお梅どん、桶も盥も出さんで宜えな、お二人さん限りやさかい、早やく御案内せんかな、お客さんだすせ　お梅「お早いお着きさんで、お疲れさんどすえ　○「早くもねへな、もう日が暮れてから餘ッ程なるな　□「管らんことを云ふなッてことよ、お早いお着は宿屋の極り文句ぢやねへか　○「極り文句と云ッたッて、あんまり空々しいや、しかし姐さんお座敷は　梅「へい〳〵　御案内いたします、あの此方へこうお曲りやす突き當ッたら右へお曲りやす、左りにお曲りやす、又た此方から此方へ……　○「勝手にしろ、宜くまア仕廻に曲られたもんだ、何んだか物騒な家ぢやねえか、兄哥歸り道が分るか此うと知つ

たら角々へ小便をして來りやア宜かッた　口「まア/默ッて居ねへか……おい姐さん此所かい　梅「へい左樣でございます、チョッと御免やす　甲「ハイ何にやなる方どす、船待の間お座敷のお合ひを願ひます、貴郎此方にお入りやす　口「ヘエ御免なさいまし……おい人の前を通るんだ、挨拶をしろ　○「おッ、眞平御免ねえ　口「なんだ、まるで喧嘩だなア、お前の口の利やうは……姐さん包みは何處へやつた　梅「あのお風呂敷は床の上に……　口「おッと宜し〳〵、サア御武家さまの前に往きなア……空席てるから頂度宜いや、ヘエ御免下さいまし、どうも大變にお客樣で……　武士「遠慮なしに此處へお出でなさい、なにかお身達も大阪へ下るのぢやなア　口「へい〳〵大阪見物でございます　武士「其れは宜い連れが出來て喜ばしい　口「あの旦那さまも大阪までお下りでございまするか、其れではお伴いたしませう　梅「ナアもし旦那はん　○「乃公のことか　梅「イ

エ向うの旦那はん、貴郎はんの草鞋が切れて居りまするがな結んで置きまほうか　○「馬鹿にするない面ア見て物をいへ、憚かりながら名古屋種子だぞ些とでも突き掛けた草鞋を又履くやうな兄哥ぢやねえや、打捨ッて置きねえ　梅「あのお脚胖と足袋に泥が附着て居りまするが……　○「面倒だねへ、さう一々聞なくッても、名古屋だ、泥の附着た脚胖や足袋なんぞ、パッパッと……仕舞ッて置きな……女中のお梅どんは引きさがる、入れ換ッて帳場の番頭　番頭「へい御免やす、今日はお勞れさんとすえ、ヘエこれは〳〵御武家樣、お二人のお方、只今は又仰山にお茶代を頂きまして、有り難うさんで、一寸お禮に、へい何方からお越になりましたとすへ……ハア京から、イヤ其れは〳〵、此處は三里の帳場どすえ、何ぞ途中で御見物遊ばしましたか、あのお稲荷さまに、まア結構でございます……まだ宇治は御見物にはなりまへんどすか、はア、全體は宇治を御見物になると名

所番頭も仰山にありまするのでへい、此の前が宇治川どす、向うの堤を真直ぐに左りにお越になりますと、宇治橋の傍へ出ます、縣さん、平等院、小島ケ崎、扇が芝、狼谷、六地藏、このあたりは羽柴様と、光秀どのと、大合戰で血の雨を降らしたところどすえ、また黄檗山だけは御見物遊ばしましても話の種子にもなるどすえ、又お上りの節は御案内いたしまするどすえ、エ、其處で近頃急に其の六かしうなりましたは宿と船のことでございまする、なんだか知りまへんが一寸その物騒のことがありますので、貴郎はん方のお住所と、お名前を伺ひそれを御番所に差し上げませんと船が出されぬ始末でございますから、お邪魔さんどすが、一寸お聞せを願ひます、へい一寸お名前とお住所をお聞せを願ひます　甲「おッと來た〳〵、番頭こゝに來て呉れ、宜いかい、所は相州鎌倉……御道方でございます　乙「相州鎌倉……御道

甲「雪の下の住人……　丙「へい雪の下の住人、

五郎入道正宗　丙「へい五郎入道……笑談ぢや困ります　乙「おい番頭宜いかい書で呉れ少し長いぞ、山陽道西海道節度使探題京都禁裏守護職を兼ね、播州姫路の城主羽柴從四位下右近衛少將筑前之守平の秀吉公の御領分、百姓太郎兵衛……分つたか　丙「驚きましたな、へい……太郎兵衛さん　丙「俺は杢兵衛と云ふ大工だ　工「おれは阪田の金時　丙「へい阪田の金時……金時にしちや色が小豆色だ　工「長い旅で日にやけてから赤いところに黒味がついて小豆色だ　丙「お所は　工「其處で小豆島の醤油屋金助、

丙「へい〳〵もうお二人さん、どうかお住所とお名前を……、

○「おッと住所かな、產地は尾州愛智郡中村……

丙「へい〳〵尾州愛智郡中村だ　丙「へい〳〵尾州愛智郡中村……するとなんでおますな、秀吉様の御誕生の地で　○「そうだよ秀吉様の御誕生地だ　丙「お名前は　○「お名前は羽柴秀吉様ぢや　丙「それは最前も長々と太郎兵衛さまから承たまはりました　○「さうか、そんなら名古屋本町孫助と書いて呉

「へい承知いたしました」

「其の隣りの糸屋長兵衛と書て呉れ」

「へい〳〵糸屋長兵衛さま……もし御武家さま、どうかお名前をお聞せを願ひます」

「武士」「拙者は……あの拙者は、中國吉川の藩にして齋藤、おう齋藤太郎右衛門」

「へい〳〵有難とう存じまする、やがて番頭が帳面を丁つて下へ降ります、どうも名前程かくされぬものはございません、最前から此の多くの待合い客の中に、変つて居た齋藤利之助、身に寸分の隙はないが名前を聞れて、吉川の藩士は宜う出來たが、思はず齋藤と云つてしまうた、ハッと思ふたがもう引き込む譯には參りません、其處で仕方がないので太郎左衛門と云はうとしたが、其れではまる切り偽名すると思はるゝも心苦しく太郎右衛門と逃げては置たが、心中どうも穏やかでございません、何故なれば、自分は天下のお尋ね者、殊に最前から秀吉公のお名が一度ならず二度三度と出てるのでこの中に秀吉の幕下の家來が居るかも知ぬ

中にも名古屋だと云ふ二人連れの奴の面体、甚だしい馬鹿を盛して居るが馬鹿でない、殊に町人を裝へども、面体には面摺れの跡もあり、其の指先きを見るに正しく竹刀を持たる手に相違ない、此奴油斷をすると福島か、たゞし加藤の手の者には非ざるか、なんにもせよ油斷がならぬと、利之助も充分に身を固め要慎いたして居りまする、はや其の内に船の支度が出來ましたサテ利之助の船中の働きは、いよ〳〵此れからでございます、一寸一服御免を蒙むりまして……。

第五　齋藤

身に寸分の隙もない、齋藤利之助ほどの豪傑でも、桔梗の紋の時とは違ひ、今まは木にも萱にも心置かねばならぬ身の上、殊に天下のお尋ねもの丶事なれば、思はず口走つた齋藤の二字怪しい二人の旅人が、其れと氣着きはせざりしか、藥いこと言

つて仕舞ッたと、心中甚だ穏やかならず不安の念を抱きながらも、今更ら逃げかくれも成りません、まゝよ其れと知られたら其れまでの事、一人や二人どうともなると、固く決心して船の出るのを待つて居ります、ところがいよ〳〵船が出ると云ふので乗客の一同は我れ先きにと乗り場に駈け着けまするが、利之助も遅れては大變と、別に手荷物があるでなし、ほんの軀幹一ッでございますから

利「イヤ、どうも厄介であつた……と、立ち出でますると、宿の番頭も茶代の功能で飛んで出で

番「どうもお粗末でございます、お静かに……と船まで送ッてまゐります

男「ヘエ何方もお静かに、ヘサア船は大變な乗客でございます

エ「何方さまもお静かに……ヘエ、モシ貴郎、草鞋を履んでも宜うございます、家の下駄をお履下さいお荷物は皆船に積込ませました、お忘れ物はございませんか、有り難う存じます、お女中

女「はんは向う側の方が宜ございます、お危なうさんで……お

い次助どん、今ま一枚橋を架けてんか、お女中がお危ない、もし〳〵只今橋を架けさせまする……御武家さま、屋根が何分低うございまするで、どうぞ御用心下さいませう、へエ〳〵どうぞお明りは御勘辨を願ひます、船頭が楫が取りにくいと申しますので、今まのうちは大事おまへんが出船になりましたら、お明りだけば御勘辨を願ひます、へエ、御枕と布團を八軒屋にお着きになつたら、船へお迎ひに出て參じますから、其れへお渡しを願ひます、大きにお粗末をいたしました、おい船頭頼んだよ……何方はんにも、有り難うさんにございます

船頭「おうい、作い、揚げてんか、橋を、荷はもう不可、屋根を見い屋根を、まア仰山な荷物やなア、そう積めるか阿呆め……おい作い、向うの船は何處の船ぢや、アヽ、左様か、彼奴が乗つてるか……オイ……コラ聞えたか、聞えたら返事せんかい……ヤア御機嫌さん、久しゆ逓ないなア、どうした、なに山田屋の船に乗て居

る、其りや宜からふ……なに客商れだと、宜いちやないか山田屋は後家と云ふから引き掛けるが出世の基だらふ……まア御機嫌克う、又遇ませう……サア小樽の所に手を出すと危ないなア向うのお客さま、頭を引き込ましてお呉んなさいませ、船がカチ合ふた時にワヤになるがな、お前さんの頭だから構やへんけれど、無かッたら些と不都合ぢやらうから引き込んでお呉んなさい……サア出ますぞ……と、三軒柄の櫂を投り込む、船の向がギイ、ッと艪つて淀川へ入ります、淀へ入いるとモウ船頭も樂になります、櫂が櫓に艪ると此處で船頭が「目出度々々の若松さまよ、枝も榮へる葉も繁る……」これは出船の唄でございます、其れから跡は淀の大橋手前、其の先きが牧方、曉近かい頃に櫻の宮、御茶内の造幣局のある附近から唄を唄ひ出しまするが、なんでも四ケ所で唄うたさうでございます、其の時代は眞の上り下りの三十石でございましたが、其の後元祿時代に

なりますと、なか〳〵三十石も風流に傾むいて、中將島の女郎屋から出て招ねく、船頭がこれに相手になる、少し行くと喰はんか船が出るなんか、隨分面白い話の種子になつて居たものでございます、旅は憂いもの辛いもの、可愛子には旅をさせとか宜う申しますが、此の乘り合ひ船の面白さは別でございます

○「こう見たところで、諸國の人の乘り合ひだね」□「成程ど……モシ〳〵お前さんは何所だねへ」甲「京とすえ」□「京はどこだねえ」甲「三條下る先斗町どすえ」○「危ねへ所ろに居るのだねえ、」□「何にを云つてるんだ」○「ダッテ三度下ワてポンと落ちると云つたぢやねへか」□「馬鹿だなアお前は、三條下る先斗町といふんだ……お前さんは何處だねへ」乙「私えは大阪で……」○「喰ひ附くやうな聲を出しやがる」乙「貴郎はん方は……」○「名古屋だよ……」乙「嘘や〳〵、名古屋はんの言葉やないがな、私え生れが名古屋だすさかい、宜う知てまんがな、隱しなはんな」□

名古屋だから詮方がねえよ……　乙「まア名古屋なら名古屋はんにして置かう……あれが貴郎はん牧方だすせえ　口「そうか、これが牧方……今夜は月でなんとも云へぬ宜い景色ぢやなア……となんでも話を外して居るは、サテこそ我が推慮に違はず、名古屋の町人と身を扮し、狙ひに來たに相違ない、よし〳〵何づれ船中では名乘りもすまい、たゞ油斷のならぬは八軒屋の揚場であると、最前からの一部始終を、居殿りの体に裝ほひ、二人の奴の擧動を窺がふは利之助　口「御武家樣はお一人でお淋しい御樣子、どうでございませう、お睡氣ざましに謎でも遣ましては……おや〳〵遲々と近か寄つて來たなと、心の中では利之助　己れと思へどまだ〳〵正体の知ないうちに、迂濶と此方から名乘りあげる譯にはまゐりません、殊に毛を吹いて疵を求める謎ざもあり、思ふ心を色にも出さず　利「夫りや一段と面白からう　拙者も仲間いりを致さう　口「サア謎の初まり〳〵、まづ御武家

さまから出して頂きませうかと、鶴龜と掛けて……　口「奇麗な題ぢや、流石は御武家さまは別ぢやなア、サテ上げませう　利「これを貰ふて親船の帆柱とはどうだ　口「鶴龜とかけて親船の帆柱……シテ其の心は　利「心は長いき（長い木）をするとは何だねえ　○「却々旨い、恐れ入りましたねへ……今度は私が一ツ出しませう、サテ一の字と掛けて……　甲「上げませう　口「これを貰うて寺の小僧さん　甲「シテ其の心は　口「辛棒すれば十字（住寺）になる　○「成程ゞ兄哥旨いな、今度は乃公がやる、二の字だよ　口「止せ〳〵止せと云ふのに　○「可いぢやねへか、二の字と掛けた　乙「上げませう　○「おツと貰つて御寺の横着小僧だ　乙「心は……　○「心か、辛棒して も十字になれぬ　口「まるで無茶苦茶だ　乙「いろはにはへと、とかけて　丙「上げませう　乙「花の眞ッ盛かりと解く　丙「心は……　乙「ちりぬる前ぢや　丙「旨いな、乃公も一ッやりませう、紛れ

た絹糸とかけて　□「奇麗に出たな、上げませう　丙「之れを貰ひまする、と、絹糸が紛れたと解く　□「はてな、紛つれた絹糸と掛けて絹糸の紛れと解く、シテ其の心は　丙「なか〳〵解けかぬる方で　△「やれ〳〵喧ましいことなア、左様お前がたの様に騒いで貰つちや、なか〳〵睡入るゝことぢやねえ、最う彼れ是れと夜中過ぎ、あゝ五月蠅なア……と起き上がり、脊伸する田舍の百姓、身には粗末の木綿の着物、大陽にやけて色黑く、筋骨逞ましくして眼に人を射るの光りがある、利之の助を見て見ぬ振りでまた横になる、是れぞ何人でございませう、神ならぬ利之の助この田舍者には氣が着かない様子、其りや其の筈でございませう、名は聞いて居ても顏見たことはございません、是の田舍百姓こそ、智仁勇兼備の豪傑、羽柴秀吉に無くて叶はぬ股肱の忠臣、加藤虎之助清正の臣にして、力量拔群の木村又藏でございます、何うして此の船に乘り込んだかと云ふに、元來洛中洛外を荒す曲者こそ、正しく身を京都に置かず、伏見か鳥羽か、また字治、それとも大阪あたりに巢を構へ、群集に紛ぎれ、京都に夜な〳〵入り込むに相違ないと、流石の虎之助清正も、南禪寺には氣が着かず伏見に番所を構へ、上ぼり下りの旅客を其れとなく取り調べることに相成り、木村又藏は土民に姿を扮しこの伏見を徘徊て居るのです、所が今宵の下り船にて大阪まで往くと云ふ立派な武士、實は斯樣云々であつたと豫てお觸が出て居るので、寺田屋の番頭が番所に訴人いたしました、其れこそ桔梗の殘黨齋藤利之助に相違ない、搦め捕んと支度の所へ百姓に化けて居る木村又藏がやつて來たので、實は斯樣でござる、これが抑々大德寺門前にて、御前を狙ひし利之の助であらふと思ふ、兎も角搦め取つた上人違ひならば放免するまで、如何でござると逸るのを、木村又藏押し止め　又「お騒ぎあるな各々方、

確と確かめて捕へんと、人違ひであつた時、たゞ放免すれば可いやうではござるが、萬一浪人でなく他藩の武士であつたなら、どんな難題を持ち掛けんやも測られず、當時御前には北國の柴田一族、桑原の滝川、または岐阜の織田の一族と心よからず、今までも兵火を交へねばならぬ御準備最中、それに僅かな事より一國一城の主人に敵を求めては大變でござる、また利之助であつたなら、これぞ天網疎にして洩さゞる所、なれども今ま彼れを搦め捕んには、なか〳〵十人や二十人で取り卷いて見たところで、光秀の遣子、または安田作兵衛の先途を見屆けねばならぬ身であるから、たとへ骨身を舍利にするとも、搦め捕るゝ奴ぢやない、よしまた搦め捕たところで利之助一人では面白からず、それよりは拙者彼れと同船いたし、後を追ひ行く先きを突き止めませう、さすれば、彼れの行く先きこそ、光若丸の隠れ家か、但し安田が隠れ居るのか、二ッに一ッに相違なし、さすれば此處を突き止め置かば、利之助を出し抜いて、安田なり光若丸なり搦め取り、其の上へで利之助を討ち取ることこそ妙であらふ、こゝは拙者にお任せあれと、其の身は其のまゝ一番先きに、人知れず船に乘り込んだものでございます、されば、こんな豪傑が我れより先きに乘り込んで居らうとは氣が付きません、たゞ最前から油斷のならぬ奴と思ふて居るのは名古屋の町人と云ふ二人の若者でございます、これも利之助の眼が素早いのでございます、元來この二人の旅人こそ、町人らしい身の扮へはいたして居りますが、決して町人ではございません、賊は片桐助作且元の家來にいたして、水野爲助、爲次郎の兄弟でございます、今回主人の且元とのが、加藤清正と一日交りに京都警固の役を仰せ付けられたので、何んでも清正を出し抜いて、强賊を搦め取らんと、兄弟で町人と化け込み、洛中を徘徊し、今日は三十石で大阪まで下ッて見んと、伏見まで急ぐ途中で利之助

を不審がり、同じ船宿に入つて見ると、どうやら齋藤利之助らしい、此奴豪い奴を見付け出したと、こゝで兄弟申し合して兎角八軒屋の揚がり場で、搦め捕んと、其のまゝ一所に乗り込んだものでございます、されば齋藤利之助に於きましては、前面には水野兄弟に狙はれ、背面には木村又藏に付き纏はれ、いよ〳〵身の危難は近づくばかりでございます、然かるに船はだん〳〵と下りに下り、櫻の宮まで來ると、夜はほの〳〵と明方の早や曉の頃でございます、船頭の船唄で一同は眠りをさまし、

○「やア夜が明けたか、有り難い〳〵」

□「宜く寢たもんだ、なんにも知らなかつた、サア船はどうやら着らしいと噂の中に船は無事八軒屋に着きました」

船頭「さあ〳〵静かに上つてお呉れ、危険へな、何しろ我れ先きにとあせるので却つて上陸のに困難で其の混雜は一通りぢやない、船頭は荷物を揚る、客はだん〳〵と減て來て殘るは名古屋の町人と、利之助と、例の寢て居る百姓の木村又藏の四人でございます」

利「どうぢや旅の衆、まだまゐらぬな……」

油斷いたしません、此方もなか〳〵分別して居る

○「へい、まア御武家さま、お上りなされませ」

利「さう云はず、とお身から上がつたら宜からう」

○「左樣ならば御武家さま、眞平御免くださいませと、弟の爲次郎は一と足先きに板橋を渡つて陸に上つた、利之助は、今ま小縁から板にかゝつて、二た足ばかりを踏み出だすと、船の中より水野爲助、陸よりは爲次郎利之助を眞中に兩人「御用だッ……」と叫けんだり、サテ此の場の騒動如何なりませう一寸一息入れまして……。

第六　席

利「理不盡なり御用呼はり、繩打たるゝ覺へなし人違ひならナンとする爲助「覺へないとは卑怯であらふ、誠と汝は桔梗の殘黨齋藤利之助であらふがな」

利「なにが何んと」爲次「まだ此の上へに

も爭さふか、斯く申す我々は、京都警固の役を蒙むる、片桐助作が臣にして水野爲助、同苗爲次郎の兄弟なるぞ、サア此の上は尋常に縄にかゝるや、たゞし腕を捻て縄掛けふや、返答せよと前後より詰め掛けました、黙いたのは隅で寢て居た木村又藏

「おやッ、大變なことになつたな、なんだ片桐どの家來で水野兄弟、サテは兄弟で跡を追て來たのだなア、こりや可かん、また取り遁がした、あゝ〳〵切角乃公が旨いことを仕やうと思ふて來たに、とれ、水野の兄弟に加勢でもせずばなるまい、困つた事を仕出來したと、起き上がつた木村又藏

又「ヤイ水野、貴樣兄弟ぢや叶うまい、乃公が加勢するから確かり遣れよ

爲助「危險〳〵貴樣達の出る場でないぞ、第一水野とはなんだから水野と云ふんだ、おい其處に居なさる御武家さん、お前も今ま此處で縄にかゝるのは嫌だらふ、岳父の安田どのは別として、光若丸と云ふ故主の筐の先途も見なくちやなるまいし、其

處はお察し申すが乃公が出たので運の盡き、尋常に縄を受けたが桔梗の爲めぢや、それとも嫌ならお前さんの御勝手に

利「お、斯く身の上を知れた上は、今まは何にをか隱さんや、吾れこそ明智の殘黨齋藤利之助に相違ない、しかし、今ま其方が云ふ通り、我れには主の殿よりお預けの若君あり、且つは秀吉が仇と狙ふ安田作兵衛どのあり、なか〳〵此處で縄にかゝる俺でない、ナニ齋藤一人ならば卑怯未練に逃げ隱れもいたすまい、我れから名乘ッて秀吉に一と挨拶も致すであらふ、しかし今ま云ふ通りの始末である、から、其の縄ばかりは受けられぬ、まア左樣思ふて其の手を退けッ

爲次「此の期に及んで吐すな齋藤、たとへ此の場は逃がれても、日本六十餘州に身を入れるの處があらふや

利「たとへ無くとも此の場では受けられぬ

爲次「ナニをと云ひさま爲次郎、早縄たゞやッて打ちかけるを、かい潛ッて飛鳥の如くに身を躍らして、陸に飜りと飛び上がる、得たりと組み

付く爲次郎、振り解ひて帶際とつて、川にザンブと投げ込む早業、パッと云ふまもございません、續いてかゝる爲助の、襟首掴んで投げ飛ばせば、これも川へ落ち込みまして、暫時は浮きも上がりません、かくと見て取る木村又藏、又「加藤が郎黨、木村又藏扣へたり、導常に腕を廻せと三間柄の槍を水車の如く振り廻し、船の小綠から打ッてかゝるを、木村と聞ては油斷がならぬ、利之助は揚げ板を川の中に突き落し、利「命が惜い、木村又た會ふ、今日はこのまゝ、左樣なら……と其のまゝドン〳〵と駈け出して了つた、流石豪氣の又藏も、橋板を水に落されて陸に揚がることが出來なくなつて、見す〳〵敵を逃がしてしまつた殘念ではあるが仕方がない、とうと物別かれになつてしまい、岸に泳着いだ水野の兄弟に打ち向かひ、又「あんまり逸まるから失策るのだ、ジッと何處まで行くか附いて行て、行く先きを確かめてやれば宜いのに、切角網にかゝッたやつを逃がして仕舞た

爲助「イヤ面目もなき今日の始末、まア取り逃がした罪は我々兄弟、木村と名乘まで知なかつたので失禮いたした、又「まア宜いワイ、彼奴の出入口だけは略相分ッた、此の上は伏見を嚴重に固めさへすれば、滅太に入り込む筈はない、兎も角くも引き返さうが、其のまゝでは困まるから、先づ着物から乾かさねばなるまい、其處で八軒屋の船宿で着物を乾かし、三人一所で歸りは駕籠で大急ぎ、各自分かれて主人の宿所に立ち戻り、木村は清正に其の由を物語り、水野兄弟は此の由を主人且元に披露した、其處で清正且元の兩人は、此の旨を秀吉公に言上すると、元來大腹の秀吉公、膝を叩いて打ち笑ひ、秀「捨て置け〳〵、今ま彼れ等を生し置のもこの秀吉が一ッの計略、また捕へて殺さんと思はゝ何時でも出來る、先づ其れよりは北國ぢや、柴田、瀧川、神戸の輩を、自滅させる法もがなぢや、心配するな高が霜枯れの野に一輪の桔梗ぢやないか、なに程のことがあらふか

あはあはゝゝ、加藤片桐の兩人も、今更ら返す言葉もなく其のまゝ御前をお退りになりました、サテ兩人を歸して於いて、何にか御思案中であつた秀吉公は、御小姓に命じて大谷平馬をお呼び寄せに相成り

秀「平馬、些と相談があるのぢや

平「何事にて候らふ

秀「餘の儀でない、今ま清洲の城に滯在する柴田瀧川の輩を驚かしてやらふと思ふが、其の方は此れより清洲に參り、何時にても相手になるから、戰爭の仕度をして乘り出して來いと云つて來て呉れ、また、毛利吉川中にも小早川の一族が秀吉の爲めに軍用金の調達より軍勢までも催促する樣流言をして貰ひたい、さすれば狼狽者の柴田一族、早々本國に引き取るに相違ない、さすれば長濱に居る柴田勝豐の臣、山路將監を金銀にて釣り出だし、いよ〳〵此方から喧嘩を仕掛に乘り込むの筈に工夫した、どうぢや

平「如何にも承知いたして候らふ

然らば此れより直樣支度いたしませうと、元來智略に長けた大

谷平馬、腹臣の家來に其の意を含ませ、姿を扮裝せ清洲の城下に乘り込ませ、今度の秀吉公の勢ひは大したものだ、何しろ中國の大々名、毛利吉川小早川の一族が味方して、軍用金まで小早川の手で調達するので、今にも柴田と一戰爭に乘り出すであらふ、其の爲め京都は大變の賑ひだと、流言したから堪りません、此れが柴田、佐久間、瀧川の耳に入る、すると柴田等の考へでは、毛利一族が秀吉に味方するの軍用金を出すのと、そんな筈はない、何にかの間違ひであらふ、まア狼狽るにも及ぶまいと、飽までも明智の殘黨丸山太郎に欺瞞されてることに氣が着かず、殊に佐久間盛政は例の軍用金引き換の證を石川五右衛門に盜まれて居ることにも氣が着ず、たゞ京都の動靜に氣を奪れて居りまする、かゝる油斷の隙に乘じて、丸山太郎の一行は夜を日に繼いで北國北之莊に乘り込み、佐久間の家來田村主水と偽はり勝家の留守居役、野田五郎國景を欺むき、うま〳〵五

萬兩を引き出だし、京都に運び出しました、また一方小山田源次の一隊は勢州桑名に乗り出だし、これも瀧川の留守居を胡魔化し、五萬兩の大金を奪ひ取り、丸山とは一日違ひに石川組の南禪寺まで歸りました、其處で主領の五右衛門は、貳萬兩を配下の奴等に分配いたし、一家に集まつて居ては疑ひを招く恐れもあれば、散々になつて家を持ことにして、南禪寺は眞の道場と云ふことにして置きました、ところが茲に心配なのは、一寸出て來ると云つた齋藤利之助が一日たつても二日三日四日五日彼れ是れ二十日餘まりになつても歸り來ぬ、どうしたか知んと一同心配いたして居りまする、尤も同日に繰り出した丸山、小山田の兩人さへ歸つて來たに都合に依たら今夜は歸らぬとは云はれたが、もう二十四五日にもなるにお歸りがないとは、どうも心配で安閑としては居られぬと、石川始め小山田、丸山、佐野の輩が氣を揉みだした、然るに安田作兵衛のみは泰然自若、

必ず心配せらるゝな、凡人ならぬ利之助殿、病でも魔る人でない、殊に敵の白刃を見ては日頃の勇氣に百倍すると云ふから、何に心配には及ぶまい、歸りには屹度其れだけの手土産がある、箸と、人が心配する程と笑つて居る、一同も利之助の豪勇と智謀をよく知つて居るから、明日はたよりがあるであらふと、利之助の歸り來る日を待つて居ります、ところが此方は大谷平馬一秀吉公の使者として清洲に乗り込みました、戰々兢々の柴田一族、何事ならんと不安ながらも、客間に通して面會をいたします、平馬は勝家に打ち向ひ、平今回主人秀吉よりの口上餘の儀にも候らはず、先立つて紫野大德寺燒香以來、互ひに物別れと相成り殘念至極、此のまゝに打ち捨て置くも面白からず、殊に此方の考へに依つて柴田殿に遺恨の儀もこれあり、一戰に及ばんとあらば何時たりともお相手いたすでござる、御返答如何でござるとの事、本來ならば恥辱を受けた勝家の方から喧嘩を

吹き掛けねばならぬところへ、反對に來たので勝家の怒き、佐久間瀧川の猩猩いやはや言語同斷の有樣、己れ猿面、此の怨み今まどうする覺へて居らふッと、怒ッて見てもはじまらぬ、何しろ承知いたしたと云へば清洲と京都は目と鼻の間なり、今まにも押し寄せて來んにも限らず、よしまた早々本國に立ち歸ッたところで九月下旬からは雪で戰爭どころの騷ぎではない、其とに無念ではあるが勝家も、体よく大谷を歸して置いて、戰爭するにも一旦本國に歸ッた上へと、何にも拙者が秀吉公に異存のあらふ筈もなく、戰爭なき以ての外、どうかお歸りの上へ御主人に其の旨お傳え下さいと思召しがあつたら、何時にても苦しからず、お相手申す考へでござる、左樣ならと大谷平馬、長居は無用と其のまゝ引き取つて了ひました、跡には勝家最う堪えられない

勝家「さあ此の上

へは羽柴と一戰するの外なし、就ては小早川と萬事打ち合はして置いて本國に引き取ふと思ふ、此の儀如何でござるぞ　一筆「左樣〳〵各自本國に引き取からは、一應小早川とものと相談する必要もあるかと思ふ、喃、佐久間どの、左樣ではござらぬか　盛「如何にも左樣、伯父上には腹心の家臣を小早川家へお遣はしになるが宜しうござる、勝家「御同感とあらば、早速使ひを差し立てませうと、勝家は一封の書狀を認ため、腹心の家來井の上九平次なる者に其の意をふくませ、京都東福寺に滯留の小早川隆景の旅館に遣はしました、尤も齋藤利之助の策略で、丸山太郎に乘せられて居ることを知ないから、可愛想なは井の上九平次、東福寺に乘り込みまして　九「手前儀は北國北之莊柴田勝家の家來井の上九平次と申す者、御重役進藤左衛門とのに御面談申し度き儀有之、清洲よりも能り越たる者に候らふ、此の儀お取次ぎ下ださい……　取次「これは〳〵柴田樣の御使者とな、暫時お控へ

下さい……と立ち上がつた取次も、柴田がなんの爲めに使ひを寄越したか、どうも變だなア可怪なこともあればあると、重役の詰所にまゐり取次「申し上げます

左何事なるぞ

取次「只今北國北之莊柴田勝家様の御使者として井の上九平次と申され御乘り込みに相成り、進藤様に御面談いたしたいとの口上、如何とり計らいませうか

左「ナニ柴田どの使者がまゐつた、何事であらふか、兎も角くも客間にお通し申せ、面會いたすであらふ

取次「承知いたしました……と、取次は玄關に出でゝ九平次を案内して客間に通す、茶菓の饗應はあツたが待てども〳〵進藤が出て來ない、彼れ是れ一刻も經過と思ふに、ねッから音も沙汰もない筈こゝに一ッの騒動が起ッて居るのでございます、それと知ずに安閑として九平次が、秀吉公の面前に引き出され、どう云ふ事件を產だすか、一寸一息いたしまして……

第七席

茲に柴田勝家の家來井の上九平次は、東福寺の客間にて、進藤を待つこと早や二刻ばかり、其れに今まだに曠だも潰れたとも吒ともスウとも云つて來ぬ、サテ中國武士の氣の長いのにも驚くと、殆んど退屈して居りますが、進藤が出て來ぬ筈でございます、あまり可怪な使者を迎へて、不審に堪ませぬから、此の旨主人の小早川侯に言上したところが機智に長けた隆景侯、是りや面白い兎も角く秀吉との〻宜い慰み、一應秀吉との〻其の旨通じて見よ、また工夫もあるであらふ、成程と夫れは宜いところに御氣付かれましたと、進藤は裏門に駒を曳せて、ひらりと跨がり一鞭あて〻、紫野大德寺の御陣所へ駈け付け、秀吉公の御前に伺候し、斯々云々と柴田の家來がまゐつて居るが、何ぞ御用はないかと伺がひました、すると秀吉は大ゐに喜び、

「宜くぞ知してくれた、使者の口上を聞た上、この陣所に引き立て來たれ、予にまた一工夫があるであらふ

左「然らば左樣いたしませうと、御前を下つて駒に跨がり、取つて返した東福寺、早速客間の九平次に面會……これが逢ふたことのないから面白い、九平次は禮を正して

九「コレは〳〵進藤どのでござる

か、先立ッてお越の節には、頂度掛け違ひにて御面會申さず、殘念でござつた、サテ今日參上いたしますに就いても瀧川、佐久間の兩將よりも、宜しく傳え呉れとの御言葉でござる

左「ハアン……何んのことやら薩張り譯が分かりません、分らぬ筈なにも進藤が清洲に往た譯けぢやなし、丸山太郎が化て居て五右衛門と旨い事して歸つた跡ですもの、進藤にするとまるでトンチン漢でございます、たゞ、ハアン……ハアン……と返事をして居る、九平次はそれと知ぬから勝家の手紙を差し出し、なにかの事は此れにて御承知下さいと云ふ

左「成程ど、此のお手紙

……拜見いたしませうと、封押し切つて讀むと驚いた、今回羽柴秀吉より戰爭を挑まれしも一度本國に立ち歸り充分の仕度をいたさねば承知の旨答えられず、殘念ながら体よく和親と見せ掛け置き候らふ、就ては準備のため明早朝當城を出發いたす筈に候らへば、かねてお約束の通り、羽柴征伐の御準備有之べく歸國の通知を兼ね斯の通りと云ふ文意でございますから、進藤は一圓合點が行かず隆景と相談の上へ御返事申すでござる、暫時御猶豫と出て往つて了つた、また待せるかと思ふて居ると果して待たせる、何にをしてるか兼ねて約束の出來て居るのに、小早川と云ふ大將も隨分氣が長いなア、此な大將と組合ふて戰爭すると、なか〳〵面倒であるワイ、こう待せらるゝと、骨がメキ〳〵鳴つて來る

左「承知いたしてござる、何かの事は主人

聞ば進藤が清洲に來た時は、思ひ切つて馳走もして有る筈に、お茶一杯、干菓子のみとは驚いた、恐ろしい客嗇坊だなア……

色々心の裡では不平を鳴らして居るのです、此方は進藤柴田の手紙を主人隆景の手許に差し出し、使者の口上の譯の分らぬ事を申し上げると、明察機敏の小早川どの、是れこそ當家を名乘て思ひ切り惡戯した奴が居るに相違ない、しかし宜い手紙が手に入つた、予は秀吉どの陣所にまゐり、委細く述て居るから其の九平次なる者に細を打ち、大德寺に連れまゐれと、此れから秀吉公の陣所にお出駈になりました、跡で進藤は屈強の若武士を次の間に伏さしまして再たび客間に取て返して

左「ヤアヤ井の上九平次とやら、其の方何者に頼まれ、柴田の使者となつて入り込みしぞ、今彼の書狀を見るに、似たりと雖ども正しく僞筆、サア何者の間者として當家を瞞着にはまゐりしぞ、僞はり陳ずるに於いては細を打つて拷問にかけて云はするぞ、サア其直に白狀いたせ……と詰め掛けました、黙いたは九平次

左「まだ〳〵空々しいで

九「何に故へあつて其のお疑がひ……

ことを申し居るのか、サア〳〵方々、怪しき僞使ひの九平次を搦め取つて引き据へられよ……ハッと答えて若武士ども、お次の間よりバラ〳〵、九平次とやら縄を受けよと前后左右より押ッ取り圍んで詰め寄るにぞ

九「コハ理不盡なり進藤どの、當小早川公の御使者をも勤められ、我が主人勝家へ欺を通じ、羽柴征伐の援助たることを約せられしに非ずや、然るに今ま我れを覆使者と云はるゝは、サテこそ小早川公には御變心なされしと覺へたり

左「默れ九平次、當家より柴田どのに欺を通ずる國表よりの謂れあらふや、また進藤左衛門とは我が事なるも、なにしに清州三界まで出駈けるの出府せしは一昨日の夜の事、なに程ぞ進藤左衛門は二三日前國許より此の京暇があらふや……成程ざいます、丸山太郎は宜く其處都に出て來た人で京都の見物さへ主用の多忙で出來ないのでこらの事を知て居るから國詰の重役の名を詐稱して柴田等を欺し込んだもので智謀に長けた齋藤

利之助は、なか〳〵抜目のない思慮を廻らしたものでございます、九平次は何んと言譯けしても探り上げられず、言譯けすればする程疑がひを増すのみで最う絶体絶命でございます、と云ふて武士たるものが無三〳〵と縄にかゝるも口惜しく、殊に藝心の小早川、とても無事では歸へしては呉れまいから、此の上は刀の目釘の續かん限り、切り死せんか……まて〳〵其れも益なし、兎も角く運を天に任して、此の命任して見やうと、流石は柴田の家臣にて、人にも知れた井の上九平次でございます　九「縄を受ける覚へはないが、こゝで爭そへば血の雨を降さねば相成らぬ、井の上九平次其れ兼ひ、陣頭での手柄なら御貴殿方の十騎二十騎、物の數とも思はぬが、大切な使命を果さず、廣者と云はるが殘念さ、卑怯に似たれど縄を受ける、しかし生命が惜さに受けるにあらず、大將小早川どのに一言の御挨拶をいたすまで……サア縄打たれよと九平次は、覚悟の腕を後に廻す、

左「神妙〳〵、此の上は君の御裁斷を受けるため、大徳寺まで引き立てよ……烈しい下知でございます、九平次は大徳寺と聞いて驚きました　九「ナニ大徳寺となに如何にも羽柴公の御前に引くのぢや　九「サテは一杯食しおッたな、よし〳〵斯うなつた暁ぢや、どうでも勝手にしてくれッと、九平次も自暴自棄、冥途の土産に猿冠者の面に唾して呉れんと、引かるゝまゝに紫野大徳寺秀吉の假御陣までまゐりました、庭に先きへでも曳くかと思へばさうでない、玄關式臺にて堀尾茂助が出迎かひ　茂「これは〳〵進藤どのか、御苦勞に存ずる、ヤア御貴公が井の上と　進「のか、直様御前に御案内申す……と至極叮嚀でございます、されど井の上は殘念さに齒を喰ひ〴〵り、白眼まわして一言も發しません、進藤が引き立つるまゝ、長い廊下をグル〳〵廻わり、幾間かを通り抜け、引き据られましたが大廣間、正面には山陽西海兩道の節度使中國の探題、京都禁裏守護職右近衛少將從四

位下筑前守羽柴秀吉公着座あらせられ、左右には加藤虎之助清正、片桐助作且元、堀尾茂助吉晴、加藤左馬之助嘉明、福島市平野權平長泰、小西彌九郎行長、石田佐吉三成、脇坂甚内安治、少し間をおいて小早川隆景侯、若席せられなか〳〵威氣殿然たる有樣、井の上九平次も度胸を据へて、履掴みの成り上がり、白眼返して猿面に、青痰カッと吐き掛けて、笑つて呉れんと思ふて居たが、以前はたとへ下賤の身であつたにしろ、今まは六十餘洲に羽を伸さんとする大鵬の秀吉公殊に官位其の身に備りて、柴田勝家を見た眼で見ると、其の威光に打たれてしまつて、ハッと頭を下げたまゝ殘念ながら上られぬから九平次も、心の中で驚いて、あゝ天下はつまり此の人の物になるなと感心して控へました、秀吉遙かに見下し

秀「柴田勝家の家臣、井の上九平次とは其方の事か

九「如何にも御意

秀「よくぞ參られた、それ北國の勇士おや

縄解いて遣はせ……

左「アイヤ御前のお言葉ではございまするが……と進藤は心配顔、秀吉莞爾と打ち笑ひ

秀「聞き及ぶ柴田家の勇士ぢや、其の縄の十重二十重切らふと思へば切る九平次ぢや解て遣はせ、ナニを恐圖〳〵いたすのぢや……ハッと答えて進藤左衛門、九平次の縄を解ますると秀吉公は言葉を和げ、縄打つて引き立てよと申したは其方に面會したいからの事、イヤ縄でも掛けずば予が前に來る其方ではなからふ、其れと察した秀吉が計ひ、悪くは思ひ呉れるなよ、サテ井の上とやら、其方は今日主人の使命を帶て來たと云ふが確と左樣か

九「其れに相違ございません

秀「然らば問んが、其方は進藤左衛門とは相識の間であるか

九「今日會ひましたが初めてでございます、

秀「はゝゝ知ぬも道理……サテ其の詮儀を爲るではないが、勝家とのには既に此の秀吉征伐の意あるが故に、かゝる書翰を小早川家に寄越された物ぢや、此の文意をもつて察するに、全

たく小早川家の名を騙り、進藤左衛門と名乗てまゐつた者あると覺へたり、左は思もはぬか九平次どうぢやどざいませんが、なんだか妙な工合とは東福寺到着以來心に浮びまして候らふ　九別に心當りもなく、お〻今ぞ語らん、其の名を騙り柴田家との秀吉の仲に立ち、不和に不和を作へさするは、他ならぬ桔梗の殘黨、齋藤利之助の所爲であらふ、かゝる鼠輩に煽動され、一度ならず二度三度、此の秀吉に敵意を持とは、鬼と呼れし柴田勝家、どうやら老耄の氣味であるはいあはあはあはあはあはゝゝゝゝゝイカニ九平次勝家に敵意ある上は是非に及ばず、一戰にして勝家の白髮首、清洲に歸り、勝家に申さうには、秀吉既で兵備はれり、今まにも出陣するがどうぢや、來春の雪解を待も氣長き詮索、殊に表面に和親を結び、裏面で兵備をなさんなどゝは、柴田に似合ぬ卑怯の振る舞ひ、お年の加減か、どうやら馳みが見えたやう

だな、あはゝゝゝゝ……と傳えて呉れッ九平次は始終を聞いて仰天し、サテは明智の殘黨に騙されて、かゝる手筒を小早川どのに送ッたものか、こうなつたら秀吉が、兵を繰り出しても仕樣がない、豪い事になつて來た、我が柴田家の運命も早や盡きたり……と涙を流し　九委細承知いたして候らふ、此の上は主人勝家へ諫言いたし、賊實をもつて和親の儀を願ひ奉ります、どうか暫時くの間御見逃し下されませうと、無事に秀吉の御前を退り、虎口を脱した井之上は、早駕にて清洲に歸り、主人勝家に諫言より、遂には秀吉公に隨身し勝家の裏切りをすると云ふお話、一寸一息御免を蒙むりまして……

第八席

扨ても井の上九平次は、我が主柴田勝家が、明智の殘黨齋藤利之助に煽動され、中國の大々名小早川と欵を通じて、羽柴征

伐を思ひ立つたは、あまりに早計で分別が無さ過る、今ま戰爭したら如何なるものか、尤も秀吉には怨みもあり兩雄並び立すとすれば、晩かれ早かれとうせ免れぬ戰爭ではあらふけれども今この秀吉と戰ふたら、一戰にも及ばぬうちに、味方の敗北は分り切つた話である、早まつた事をした、しかし大事な番面が秀吉の手に入つて仕舞ふから詮方がない、此の上は一旦和睦する外に途はない、あゝ困つた事になつたものと、流石の九平次も途方に暮れて、只管ら秀吉に組り付き、自分儀清洲に立ち歸り、篤斗勝家の實意を探り、どうでも戰爭すると申せば其れまでとして抽者は不忠不義と云はれても仕方がない、秀吉公に御隨身申す考え、しかし前非を悔て我が諫言を用ひられなば、とうか勝家の罪を免し下さるやうにと、涙を流し頼みまするは、眞に累卵の柴田家を思ふからでございます、秀吉も打ち首肯、

「何事も其方に免じて忘れるまでぢや、早く歸ッて此のことを勝家とのへ通じて宜らふ」

「有り難き仕合せに祝じまする、然らばこれにてお暇申すでございますと、御前を引きとりました九平次は、逃騰の計らひで東福寺まで駕籠で歸ッてまゐりましたが、如何にせん供の奴らは井の上が縄を打たれて大德寺に引かれたと聞たので、サア大變と其處を脫出で、命あつての物種子よ、早く清洲に注進せんと、一生懸命に駈け出しました、何しろ清洲までの途距を、駈けに駈けて戻るのですから、なかなかの事ぢやございません、最う粟田口にかゝるとへド〳〵に成つて來る、日は暮れる腹は空く、

○「どうぢやな、作内、今日ぐらひ辛い目に逢されたことはないぞ、なんでも向ふは中國の大名、多分の御馳走に預かつて、其の上京都で綾り泊り、久しぶりに京の女郎の顏でも拜むのなんのと、當てにしたのはお國者、越中の褌とは恐れ入つたよ、まア〳〵此處まで來れば大丈夫、追手のかゝる氣遣ひもあるまい、幸ひの此の茶小屋、飯で

も食つて往こうぢやねえか　作内「おう八助か、お前とこゝまで一所に來たも氣が着かなかつた、やれ〳〵恐い目に逢された、さア〳〵此處まで追手の來る心配はあるまい、もう日は暮るし腹は空し、ぢや飯でも食つて往くとせう、しかし小早川と云ふ奴も譯の分らぬ奴ぢやねへか、自己の方から味方して置て、今更ら知ねへのイヤ秀吉の味方ぢやなんのと、隨分虫の宜いことを仕腐るな、お負けに井の上の旦那を踏しばつて、秀吉の前に引き出すのなんので、俺ア秀吉よりも彼の小早川の方が面憎いや濕いやらいま〳〵しいやらこゝまで來たも夢中だつたよ　作内「其りや俺だッて同じことサ、しかし八助、聞て見ると無理もないよ、此の間だ小早川の家來藤左衛門といつて來た奴ゝ、其れがお前え僞玉だッたと云ふからなれば柴田樣が擦がれたと云ふんだな　八助「ヘエン……左樣かい、そうたんだな、ところで先方ではなんにも知ねえと來たらふ、其

處で戰爭するなら何時でも來い、九平次を血祭りにすると云ふ騒ぎなんだ　八助「可愛想ぢやねえか、シテ勝家樣を擦ぐなんて太い野郎もあつたものだ、一体何處の何奴だい、其の騙しに來た奴と云ふのは　作内「夫れがお前桔梗の殘黨と云ふから恐ろしいもんサ　八助「ナニ桔梗だと、あの光秀方の生殘りかねえ　作内「左樣と聞いたが、油斷の出來ねへ世の中ぢやねえか　八助「全たくだ、此の分ぢやどうせ一戰爭になるであらふよ、しかし八助柴田方と羽柴方とは、どちらが勝利になるだらふ勝つ方につかなくちや一生の損だからな　八助「左樣だなア、此の勝負は一寸見當が俺にやアつかねへ、お、お前はどちらが勝つと思もふ　作内「俺にも分らねへ……おや〳〵茶店は行き過ぎて了つた、まア飯でも食て出來やうと、二人の仲間は小茶屋に這入てしまひました、然るに最前より此の仲間共の話を、後から追いて聞きとッた一人の武士がございます、此の世を忍ぶものか黑裝束に目ばかり頭巾

道路の松の根に腰打ち掛け　武士「ヤレ〳〵大分世の中が面白くなつて來た、今ま仲間の話に依ると、我が策略が圖に當り、柴田羽柴の喧嘩も程なく近まる樣子、やれ〳〵此の勝負を見定めた上、また宜い工夫もないではないか、兎も角此の勝負を早く着けて貰はねば相成らぬ其れに就けても、今一と思案せずばなるまい……と兩手を組で思案に沈むは、これ何人でございませうか、申すまでない且つて大阪八軒屋、三十石の上がり場で、片桐且元の家來、水野爲助兄弟を川中に投り込み、猶ほ加藤清正の臣、木村又藏に挑まれて、大事の前の小事なり、こゝは逃るが上策と、其の場から姿かくした、齋藤利之助にございます、尤も行衛をくらまして居るとは云へ、今まゝで何處をどうして居たかと云ふに八軒屋を飛び出した利之助は、其のまゝ南へ南へと駈け抜けまして、難波を離れ、ましてからは、最う大丈夫だしかし肝腎の梶笠を落したが一生の不覺でもつた、本街道は人

眼ありと、海岸傳ひに頂度住吉邊のやうに見せかけ、別に錢ことゝもないので、浪打際を傳ふて、プラ〳〵と歩む住吉濱邊京洛の方では今まにも柴田、羽柴の戰にもならふかと云つて騷いで居るに、此の邊は平氣なもので、數多の漁師は曳網で、其の掛聲も勇しく如何にも天下太平で海も風て浪風立たず、あゝ住吉とは宜く名付けたものと、利之助ほどの勇士でも、今まは却つて此の漁師等の身が羨しく感じられ、取るも憂し取ぬもつらし武士の、棄べきものは弓矢なりけり、宜う詠だものである わいと、弓矢取る身の利之助、今更ら棄る譯にも往かず、既往の榮華を偲び、今の身の上へを思ひ、サテ來るべき運命は凶か吉かと、案じながらに歩むともなく、また休むともなく、プラ〳〵と濱を傳ふてまゐりまするとと、小舟を濱に漕ぎ上げ、漁を仕舞て歸るのか、網を肩にして磯邊に上つた一人の老爺、利之助を不審さうに打ち眺がめ、おやと云ふかと思へば側へ駈けよ

り　漁師「もし〳〵お武家様、貴郎さまは齋藤の若様ぢやございませんか……つい齋藤と云はれて利之助、胸を貫ぬく二ッ丸、打たれし思ひでやッと身構へ、我が名を知れる汝こそ、そも何奴と云はぬばかりに立ち停り、宜く〳〵見れば汚ない漁師、それがどうやら見覺へのある老爺、漁師は、ア、矢張り齋藤の若様ぢや〳〵、お見忘れなさいましたか私は夫れ善六でございますがな善六で……　利「なにあの善六であつたのか、幼少にて別れたれば顔さへ宜くは覺へざりしが、どことなく見覺のある顔と思ふて居たが、宜く壯健で居て呉れた　善六「へい〳〵お有難う存じます、もう何にからお話しいたしませうやら、こうと指折り數へると頂度二十二三年前のこと、なんでもはア若様がお五才位ひの頃、お暇ま申しましたのでございますから御見忘れあそばすは御尤も、思ひ出すも涙の種子は、あの山崎の大戰、御迷惑なく殿様には御討死と聞きました

時は、この老爺も腰が扱て立ちも這いもならなかつたのでございます、ところが何んでも世間の噂で、安田の殿様始、貴方様にも御無事ぢやゲナ、これでは奴どもゝ枕高うは寐れまい、やれ〳〵若様は御無事かと、其れを力に今日までこうして暮してまゐりました、兄の善五郎と云ひ私まで、御恩に御恩を受けた御恩の仕返し、せめては萬分の一と思ひました念願屆き、日頃念ずる住吉の、神さまのお引き合はせ、へい〳〵あの向うに見へるが我奴が城廓、前に海を扣へ後は山と云ふ要害堅固、たとへ六十餘州の兵を以て圍むとも、なか〳〵落ちる城ぢやございません、たゞ落るのは壁土と老爺の鼻水ばかり、今日に限つて眼から何んだか落ますさうな、あはゝゝゝ、やれ〳〵こゝでは委細いお話も成りますまいよ、やれ城内に御案内いたしませう　利「イヤ、兼々父上のお話にも承まはつて居たぞ、昔に變らぬ氣丈な言葉に、利之助も挨拶に困り入る、然らば城内に乘り込

んで、客間に通つて物語んかなあはゝゝゝ　善六「左樣ならば旦那さま、どれ御案内申うしませう、サアこうお出でなさいませ、」と漁師の善六老爺に連れられて、利之助は善六の住家にまゐりました、サテ來て見ると驚きましたな、城廓〳〵と云ふけれど、漁小屋の見るもいぶせき苫葺の壁は落ち壁は破れ、實に金殿玉堂の中に育ちし利之助、今こそ時と場合に臨んでは、野に寢たり草に伏たり、一夜を辻堂に明かすこともありますが、其れは其の場の事で濟む、住居としてはかくても暮されるものかと思はれました、然るに奥の一間に打ち通れば佛檀の上臺には、主人維任日向守光秀公始め、父齋藤内藏之助、兄伊豆守を始め、一家一門、歴々のお位牌を並べ、香花を手向てありますので利之助は大いに驚き、身には襤褸を纏へども、心は錦の善六が忠節、かね〳〵父の話にも、善五郎と云ひ善六と云ひ、世にもまれなる忠僕であつたが、善五郎は勢症とやらで我家に來公申に

逝去し殘る弟の善六は、兄と二人前の忠勤に、陰陽なく立働きり居たるも、善六には老たる父母もあり、宅に歸つて介抱せねばならぬ身の、是非なく我が家の暇を貰ひ、親里に歸つたとの事、サテは父の話に違はず、主從別れて暮す二十幾年、いまだ舊恩を忘れず、かくは朝夕御奉公申すのか我れは抑も御厚恩を蒙りながら、御靈前に供へる花もなく香もなし、いぶせの小屋の善六にも劣る身の上、嘸ぞや不甲斐なし、不忠不孝不義不仁頼むにたらぬ奴であつたと、嘸かしお怒り玉ふらん、あゝ恐れ多い次第であると、其のまゝ佛檀に向ひ禮拜し、唱名念佛たゝ懷舊の涙の外はございません、善六は澁茶を饗應し、一別以來の物語り、年は當年七十八歳、息子は善助と云つて此のお歴々の祭主、嫁はお春と云つて大の〳〵孝行者、孫はお秋と云つて今年十九、孫と嫁は婆が祥月命日で墓參り、息子は海に出て夕方でないと歸らぬ事まで委細く語り、こう廻ぐり合ふたる上は

もう何處へも遣ることぢやない自分の漁は氣散の道樂、あの住吉の松原に小いけれども隱居所もあること、其處にお扣もうすことにいたしますと、忠節面に現はしますれば、之れ屈强の忍び場所、安田どのを頼んで見んと　利「イヤ其の志しは過分至極其の志しの殊勝さに、利之助折り入つて頼みがあるが、なんと聽入れては呉れまいか　善六「呉れまいかとは水臭い、二十餘年前の恩義を忘れもし、麁心でもあらふかとのお疑ひでもございまするか　利「イヤ全くもつて左に非ず、なれども事少し重大なればいろ〳〵……　善六「イヤざる御遠慮、なんなりと頼まれて進せませう、

利「おう、然らば善六、安田作兵衛どのを匿まうて貰ひたい……サア善六の返事は如何に、いよ〳〵善六親子が安田を引き受けて茲に一ッの騒動が起ると云ふ、是れから益々本編が佳境に入るのでございます、一寸一服……

第九席

漁師でこそあれ、これも昔は我が家に仕えし忠僕、其の時の恩を忘れねばこそ、かく一家一門の靈を供養し、在すが如き奉公振りは、老たれども頼もしき彼れが心底、殊に住吉の松原に隱居所を持たるこそ幸ひ、吾よりも安田作兵衛どのを頼まん者と、實は斯々斯樣の始末、吾が爲めに岳父なり、主家の爲めに是非に存命は無くて叶はぬ亡君の御愛臣、また幼君のためにも是非に存命を願ねばならぬ大黑柱、今は南禪寺の邊りに忍ばせまゐられつるも、何時猿眼に入らんとも云れぬ所一日の安堵もならねば、どうか生命に代ても匿まひ呉れよ、利之助が一生の願ひぢやと兩手を支て頭を下る　善六「勿体ない、こと遊ばしますな、老たれども石川善六の昔に返り、一番匿ふて進せませう　利「ナニ承知と、其れは重疊、然らば此れより京都に歸り、安田どのをお連

中さん、どうか其の支度して置て貰ひたい、然るに今聞けば、其方も姓は石川とな、吾も今までは石川と云ふ人の宅に世を忍び居るのぢや、サテ〳〵出ても入ても石川に縁のあること……

善六「左様でございまする、實はお館をお暇いたしてこの住吉に歸るものでございまする、街道筋で赤兒の泣き聲、合點ゆかずと立ち寄り見ると、生れて間もない赤ん坊が棄てございます、やれ〳〵可愛想なと拾ひ上げ、宅に歸ッて調て見るに、これも臍の緒の書付けに大和五條の浪人石川五左衛門次男千代之助永祿元年正月元旦卯の刻生れとあつて側には貴郎様黄金作の短刀一口、それに養育料として二十兩、可愛の子を捨てるにも譯がある、つまりは子を捨る籔はあれども身を棄る籔はなく、愛情を絶て棄るからは、どうか養育を頼むとある手紙まで添てありました、石川が石川の子を拾ふもよく〳〵縁がる縁でございませう、ところが貴郎様

其の子を育てるにしても、母親がなくちや世話ならず、迎へましたが善助の母でございます、捨子どのは育てるは、善助は出來るわ、他人同士が親となり、また子となり兄となり、弟となり睦じく、兄の捨子どんが九才まで、家内も無事に浪風立す、面白く可笑しく暮しましたが、捨子どんは誰れから聞たか、捨子〳〵と人に笑はれ、泣て歸つて「阿父俺は阿父の子ぢやねえのか、捨子ぢや捨子の千代やいと笑ふのぢや、捨子ぢやねえな」なんの〳〵阿父が子ぢや、笑ふ奴こそ捨子ぢやと、始めは欺して置きましたが、どうやら本人も捨子らしいと氣が着ましたから最早かくして居る譯にも參りませんで、捨子であつたことやら臍の緒の書付や、短刀を出して見せましたところが、どふ氣が狂ひ出したものか、それとも武士の種子に生れたものか、漁師で一生送るのはイヤと思ふたか九歳の秋捨兒どのは飛び出しまして、音沙汰も無へ十六七年、氣も心も武士の種子、習ずして

文字を書くと云ふ發明者、死だか生てるか分りませんが、雨の日風の夜は何かにつけて、思ひ出されるのでございます、へい〳〵人の縁と云ふものは不思議なものぢやございませんかと、善六老爺の昔話、初めて聞いた捨子のこと、今ま石川組の五右衛門も確か大和の生れとか聞く、父の名を五左衛門と云ふからは、この善六が育て子ではあるまいか、歸ッた上で調べて見んと、思ひ付いたは付いたれど、まだ〳〵其れと云ふ譯にも往かず、初めて聞いた捨子の話、緣なればこそ親となり子となりたるもの、互ひに無事でさへあつたなら、また逢ふこともあるであらふ、まア案じることもあるまいのふ。

善六「御意にございますとも、お互ひに生命さへあつたら、また逢もいたしませう、もう當らぬ話に時まで忘れ、御飯も差し上げませいで、嘸ぞ御空腹でございませう、どれお支度でも差し上げませう、健固に善六立ち上がるところへ、善助の家内、娘を連れて歸りました

老爺は兩人の顏を見るなり、利之助のことを手短かに物語り、佛間に伴ない利之助に紹介せ、それから御飯の支度に急がしました、其處へ善助は漁から歸る、仔細を聞て喜びまして、お前の主人なら俺の爲めにも御主人、たとへ天下が秀吉樣にならふとまゝよ、此の家ばかりは明智樣の御領分にして置うぢやないか、まさか違へば死骨投げ出す分のこと、なア親仁とん左樣ぢやないか、爲宜く言つて呉れた其れでこそ俺が子だ、お主が其の氣なら俺も安堵ぢや、まア〳〵旦那樣にお目にかゝつたが宜からふと、親仁は善助を利之助へ紹介せ、其れよりいよ〳〵安田作兵衛を住吉の隱居所に匿ふことに相談がなり立ち、利之助は四五日も滯留し、親子の正直を見拔ましたから、これならば大丈夫と、善六親子に再會を約して此處を立ち出で、其れより堺の北之莊、油屋常喜を訪れ、秀吉に毒吐き舌を割れ耳を削れたことを聞き、其の男氣は感じながらも、我に思ふ仔細もあれ

ば、當分は此まゝ目を閉つて世の成り行きを見ざる聞かざる言はざるで居て貰ひたい、この利之助が眼の玉の黑いうちは、秀吉を枕高ふは寢せはせぬ、殊に岳父作兵衛どのゝ身に就いては住吉浦の漁師善六に賴んで來たが、これは忠實なる我家の下男であつたことから、不思議の再會から、石川と云ふ捨子のことまで物語、こゝでまた三四日滯留し、利之助は河内大和を遍歷し、前回で申上げて置きました粟田口に差しかゝり、こゝで柴田の仲間どもの話を聞取り、いよ〳〵柴田、羽柴の喧嘩も火の手が揚ると喜びました、イデ此の上へは合戰最中、秀吉奴を打ち取り呉れんと、一度は仲間共を殺して置いて、己れ代つて淸洲に乘り込まんかとも思ひましたが、深入りしては露現の元と其のまゝ急いで久し振りに石川方に立ち歸へりました、一同は心配して居るところですから、利之助の歸宅を迎へ、大喜びでございます、其處で利之助は八軒屋船の上り場の驛助から、今日までの事を物語り羽柴と柴田の喧嘩も何づれ近くに初まるであらふと喜び勇で物語り、サテ石川どのと我々は、離れることの出來ない因緣がございると云ひだした、五右衛門は不思議相に利之助を打ち眺め

五「因緣があればこそ、かく御一所を願ふた譯けではございませんか、それを今改めて仰在る齋藤どのゝ御心は……

利「さう改まつてお話をすることでもないが、お身の實父は石川五左衛門どのとは申さぬか……

五「夫れを貴殿は、どうして御存知あるや

利「イヤ御不審は御尤も、御實父が五左衛門どのとすれば、育ての親は石川善六とは申しませ

五「如何にも、よく御存知でござる、今は何をか隱しませうや拙者は父五左衛門とは名を知ばかり、實は住吉に捨られ、漁師善六なるものに拾ひ上げられ、九歳の秋まで養育せられたものでござる……

利「宜くぞお明し下さつた、貴殿の親たる善六こそ、以前は齋藤の宅になくてならぬ忠僕でござつた、計らずも

住吉浦にて廻ぐり合ひ、初めて聞いた昔語り、サテは貴殿の身の上と、思ひ當つてお尋ね申したのでござるが、相縁奇縁とは云ひながら、かゝるお世話に相成るも、離るゝことの出來ない宿世の縁でござらふがな」五右衛門も初めて聞いた善六の關係、

五「縁とは申しながら、チも不思議でござる、イヤ此の上は明智家のため、この石川が生命まで、差し出してお味方いたす、御心配下さるなと、是れより安田を住吉に送ること、幼君光若丸を堺の町人常喜が許に送ることを相談いたし、いよ〳〵秀吉と勝家の戰の折に、一同戰場の騒ぎに紛れ、秀吉を打ち取る協議に及びました、安田を始め佐野、小山田、丸山の一同も、其の奇縁に感じ入り、此の上石川組の後援がある上は、秀吉を打ち果し、桔梗の旗擧は朝飯前と勇み立ち、其の夜安田どのを伴ないまして住吉浦の善六方に送り届けました、また其の翌日には伏見に忍ぶ幼君光若丸を千鶴との諸共堺に送り、いよ〳〵一

同安心の上、大活動を初める段取と相成りました、話變つて淸洲の城では、京都の大變を例の仲間どもの注進にて初めて知て最う一刻も猶豫がならぬ、何時秀吉が軍勢を差し向けるやも測られずと、聞くとひとしく本國に引き取つたのが神戸瀧川、柴田佐久間の兩人も思圖して居ると大變と、いよ〳〵本國に引き取んと、馬に鞍かけイヤ何うせいと、ヤイ〳〵騒いで居るところへ、京都から立ち歸りました、

す、血祭にされたと云ふ九平次が歸城ッて來たので、幽靈ぢやないかと思ふた位ひでございます、

に平伏し、實は斯樣〳〵云々に候らふが、全たく小早川の臣にあらずして、當城に乘り込みましたは明智の殘黨齋藤利之助の一味なるよし、此の際お騒ぎに相成つては、お家のため宜しくない、どうか秀吉と御和睦の儀こそ願はしく候らふと、涙ながらに諫言いたしましたが、勝家は耳にもかけず

勝家「何にを馬鹿

な、明智の殘黨齋藤利之助とか云へる奴、どれ程の男か知ぬが此の柴田を騙しに來そうな筈がない、此れ全たく猿奴が策略、其の甘き言葉に乘られ、女々しく歸ッて來た汝も秀吉に騙されて來たのであらふが、大切なる手紙を秀吉の手に渡し、此の勝家を深いところに落し居つた不忠者、勘當ぢやイヤサ七世までの勘當ぢや、主でない家來でない、眼通りならぬ此處退れ、ヤア〳〵誰れかある、九平次を門外に叩き出せッと、大音聲に呼はりますので、ハッと答えて近習の誰れ彼れ、バラ〳〵と其れへ出で、九平次の手取り足とり、死でも柴田家のためを爭さうを寄つて集つて清洲の門前に突き出だし、門をバめ切つて仕舞ひました、九平次は殘念ながら、主從の縁は切られ身は放逐となつたので、我が二心なきを知しめん爲め、御門前にて切腹と脇差に手はかけながら、元來柴田家は譜代恩顧の君でなし、養はれたとは云へ僅か十年あまり、かゝる無道の人に仕へんより

は、秀吉公に隨身し、全じ死ぬるものなら、己れを知る君の爲め、こゝで死では大死にと、こゝで九平次が心を驕へし羽柴秀吉に隨身し、かの長濱の城に居る、山路將監を秀吉方に招き入れ、策畧を廻らして桑名城を陷入れると云ふことに相成ります

第十席

が一寸一服御免を蒙りまして……

神戸、瀧川の號は臆病風に誘はれて清洲を立ち退き本國に引き取りましたが、柴田、佐久間の北國方も、一剣の猶豫もならじと其の夜の裡に本國さして引き揚ました、其の混雜はまるで戰爭の落武者同樣でございます、其れと察して利之助、丸山太郎の兩人は、いつの間にやら清洲に乘り出し、雜兵の中に紛ぎれ込み、今までも秀吉の追手が來るの、イヤ粟田口まで乘り出したの、大津までの三井寺が本陣になつて瓢の馬印が見へて

居るのと、妙に言ひふらしたから堪りません、只ださへ混雜して居るところへ、追手が來るのと云ふのですから、もう柴田方は浮足立てゝ行列もなにもあつたものでない、吾れ先きにと夜を幸ひに、落ち失るものばかりでございます、此の体眺がめた勝家の憤怒は、いよ〳〵絶頂に達して來る、己れ憎くき猿面冠者奴、かゝる流言をもつて我れを惑はし、此の勝家に自滅せいとか、よし〳〵今に一と泡吹かして呉れるぞと、腕を叩いて呸々くうなり、どうやら恁やう我が本國に引き取りまして、ヤッと安堵の思ひで、腰を延して寢ることが出來ました、處が先達て佐久間様より金子五萬兩御催促に預かり、御親書引き換にお渡しいたしましたとの留守居からの口上、ナニ其様ことがあるものか、佐久間と一所に本國に引き取るまで、現に清洲に居たではないか、其れは間違ひであらふ、イヤ間違つたにしろ、既に金子を渡したと申すは心得ぬ、其の手紙を之れへ持參せいと不興

の顏色、留守居の者は件の引き換證を差し出だし　里これこそ御前の御親筆に相違ございますまい　乙「滿斗拜見いたしました上、御文面に依りお渡いたしましたが、尙ほ臣下の過失りでございませうや　勝家「なるほど、此れに依つて渡してあらば其れで宜い、此の度び羽柴征伐に就いての軍用金ぢや、宜く渡して呉れた、其れにしても可笑な奴ぢや、同じ清洲に居りながら、實は恁うして受取に道たら道たと、一言云ッても宜さゝうなものに、玄蕃も玄蕃ぢや、しかし其方どもは念の爲め、一應玄蕃に確に金子五萬兩は御家來にお渡し申したと云つて來い、早く〳〵と急き立てられて、重役お金奉行の一人は早馬にて夜を日に續いで加州大聖寺に乘り込み佐久間の重役に面會いたし、先達て御用立て申した金子五萬兩の儀につき罷り出でましたが、既に御披露下されしか如何でござると申し入れました、佐久間方では寢耳に水と申しませう、夢にも知ぬ五萬兩、御用立し

て貰つた覺へでございませんか、一應主人にお尋ね申しませう、イヤ、知ぬとは奇怪千萬、此方は確に御用立申した、なんと仰せられても借用した覺えでござらぬ、と、互ひに水掛論しても治まらぬ、其處で玄蕃に尋ねて見ると、成程と、五萬兩は借り入れる約束はして置いたが、其の書き付けは予が手許にある筈と調べて見ると、一通ならず、二通の引き換へ證は何時の間にやら紛失いたし、影も形もございません、これには玄蕃盛政も口アングリ、サテは何者にか盗まれたものか、何づれにしても不審であると、兎も角く伯父上に予がお逢もうして御返事いたすとその儘日大聖寺を出發いたし北之莊へ乘り込みました、然るに其の翌日柴田の家來を歸して置いて、玄蕃も氣が氣でないから柴田勝家は五萬兩を受取た覺えないと云ふ玄蕃方の言い分に、怒ッたの怒らないのと、烈火の如くに憤ほり、勝家已れ不埒千萬にも、現在かゝる証據を殘し置きながら、知ぬ存せぬとは何んたる事ぞ、此の上へは玄蕃を此處へ引き摺つて來い、秀吉を討つ血祭りにいたし呉れんと、ぷん〳〵云つて怒ッて居る、また玄蕃方では借用した覺えもなし、知ぬから知ぬと云つた、しかし五萬兩はお借り申しませう、おう貸うと云ふ約束はあつたが、其の書き付けが紛失して行衛不明であるから、是れも心配である、兎も角一應挨拶だけは爲て置んと、貸した借ぬで喧嘩をせねばならぬので、玄蕃は早々飛んでまゐりました、ところが勝家は火の如になつて居る 勝家「ヤイ玄蕃、其の方は不埒な奴ぢや、現に五萬兩と云ふ大金を受取りながら、知ぬ存せぬとは何に事なるぞ 盛「伯父上には何にを仰せられまするぞ、現に清洲に御同樣に滯在いたし、本國に引き取るも御同樣、どうして其のお金子を受取りに參ぬられませう 勝家「テも此れが証據であらふ、この引換證は汝に渡した予が自筆ぢや、覺へがあらふが……と差し付けましたは例の清洲で書て貰

つた引き換へ證でございますから、玄蕃はいよ〳〵恐れいり、

盛政「實は此の證ばかりではございません、瀧川どのに頂きましたのも何時の間にやら紛失いたし、御使者を受けて始めて心付きましたる始末、されば此の證何者かの手に渡り、伯父上や手前を出し扱き騙りに來たに相違ございません、當時六十餘州に鳴り響き、鬼柴田と云はれ玉ふ伯父上を騙る程の曲者、これとても猿奴の手かと存じまするが、なか〳〵御油斷はなりません

勝家「なるほど左樣云へば萬更ら理のないことでもないが、其方も玄蕃盛政とも云はる身でないか、懷中の者を盜まれるなどゝは、迂濶にも程があるわい

盛政「サア其處でございます、私の考へますには、全たく猿奴が使ふ間者が這込んで居るに相違ございません、どうか此の上ながら御油斷はなりませぬぞ

勝家「其方も油斷いたすな、俺さへ騙る程の曲者、瀧川も五萬兩してやられたに違ひない、慥くき奴は猿奴が手段、此の上は一時も早く

征伐の支度に及べ

盛政「承知いたして候らふと、其の日は玄蕃も滯在いたし、翌日大聖寺に引き取りました、然るに清洲引き揚げ以來、忍び込んで居る齋藤利之助、此の事を聞くや否なや、舌を出して打ち笑ひ、此の上へ最う一つ惡戯をして歸ッて遣ふと、一枚の白紙に墨くろ〳〵と、鬼柴田公に申し上げ候らふ、貴殿御不審の五萬兩は、拙者正に受け取り軍用金の中に計算致し候、此段御禮を兼ね御通知まで草々、天正十年十月八日故維任日向守光秀之臣、齋藤利之助光政と大書して大手の門に帖付けまして、其のまゝ間道を越えて京都に立ち歸りました、また佐久間玄蕃の同勢に紛れ込み、大聖寺城内にある丸山太郎は、之れも白紙に、柴田公の分五萬兩は拙者齋藤利之助の計略をもつて貴公に代り受取り置き候らふ、また瀧川公の分は一味の同士小山田源次なるもの、桑名城にて貴公の名代として正に受取申し候らふ、尙ほ此の上ながら貴公の首級も受け取り度存じ居

り候らへども、腦味噌の不足貴殿の頭、貰つて見ても仕方なく其のまゝ殘し置き候らへば秀吉に御遣はしの程見物致し居り候らふ、秀吉は貴殿なり勝家公の首級が見たいと申し居り候らふ右御禮をかね御通知まで敬白、桔梗の殘黨三羽烏の一人、丸山太郎と大書して、これも大手の門に張り付けまして、其のまゝ京都に韋駄天走り……此の書置きを見た勝家に玄蕃の驚き、しばしは開いた口が塞がらぬ、其りや其の筈でございませう、現に拾萬兩の大金を騙り取つたばかりで無く、城中に入り込んで居たと思ふと、まるで狐につまゝれたやうで驚いたに相違ございません、其れ計ッ手よ、追ひかけよと騒いで見たが、なんの甲斐もなく引き返へしてまゐりました、これも光秀の家來では あるまい、一猿奴の仕事に相違あるまい、何故ならば、吾等は桔梗に怨まれる覺へがない、怨まれるは猿奴でなくば理が合はぬ是れと云ふも畢竟猿奴が桔梗の名を騙つて居るに違ひない、い

まゝしは秀吉と、己が心に引きくらべ、秀吉ばかり怨んで居ります、秀吉こそ宜い災難、しかし是れが賤ヶ岳の戰爭の原因となるので、秀吉のためには災難が幸福になるのでございます、サテ此方は井の上九平次でございます、主人勝家に不興を蒙り勘當の身となり、一度は切腹とまで覺悟せし身も無道極まる柴田勝家のため死ぬるのが馬鹿臭く、遂に秀吉の大量を慕ひ士は己れを知る人の爲めに死す、同じことなら秀吉のために死んでこそ本懷なれと、京都東福寺に取つて返して、小早川どの へ寄り秀吉公の爲めには犬馬の勞を惜まずと降參……降參ぢやないがつまり隨身せんと願ひ出た、其處で小早川どのも氣の毒に感じられ、勘當の身と成つたとならば、秀吉公にお世話申さうと、遂に小早川どのゝ肝煎で、九平次は秀吉公の家來と云ふことに相成りました、然るに昨日まで柴田の家來であつたから何か一ッの功を立てゝ貰ひたい、そは外の事ではない、當時長

濱の城主柴田勝豊の重臣、山路將監正國を味方に引き入れて貰はねばならぬ、尤も彼れは慾心滿々たる奴であるから、秀吉が使者となり、京都に是非一度來て貰ひたい、いろ〳〵面白い話もあるからと煽動あげ、金子三百兩を手土産として置いて來るのちや、忠義の手初めこれ位ひのことは出來るであらふ、如何にも仰せに從がひ山路を京都に釣り出しませうと、いよ〳〵九平次の奉公初め、山路を引き出しにまゐります、尤も金子三百兩を頂戴いたし、其の日の内に當地を出發でございます九平次は奉公初め、なんでも甘く仕了せんと、道を急いで長濱城に到着いたし、山路正國に面會いたし

九「今日參上いたしたは你の儀ではござらぬ、實は御貴殿も御承知の通り、拙者は柴田公に御不興蒙むり、只今では秀吉公へ隨身いたし、重く用ゐられしも全たく羽柴公の大腹からでござる、就ては秀吉公貴下へ御相談申したき次第これあり、是非京都まで御出張下されますやう

主人より貴下へお土産の印として金子三百兩、尙ほ京都お乘り込みの上は尙ほ幾倍のお手當も有之よし、まア金錢のことは兎も角も、是非に一應御來駕を待つと申し入れ、金子を殘して引き取りました、慾一片の山路正國、イヤ喜んだの轉こんだの、どうも筑前の守は豪ひものちや、先月の御法營に就いても莫大の金子を費やし、少しは困り居るかと思へば、一寸手土産が三百兩、驚くほどの剛腹ちや、とても勝家どの〻及ぬところ、こゝは一番牛を馬に乘り換へて一と儲けして遣らふと云ふので、北國名代の豪傑と、人に云はる〻山路正國、慾に眼が眩んだので何づれ機を見て參上すると云ふ返事を送くり、いよ〳〵これから京都に乘り込み、羽柴秀吉に面會いたし、甘言に欺され柴田の内情を物語り、自分は秀吉に一味して主人柴田に弓を引くと云ふいよ〳〵賤ヶ岳の合戰の序の幕と相成り、續いて齋藤利之助を始めとして、丸山太郎、佐野、小山田の各勇士が、秀吉公

の本陣、賤ヶ岳に切り込むと云ふお話し、一寸一息入れまして伺ひます……

第十一席

サテも頼み難きは人心、山路將監正國ともあらふ武士も、慾に眼が眩んだか、秀吉の計略に陷ゐるとも心着かず、京都紫野の大德寺に乗り込み、秀吉公に御面會申し上げました、智謀にたけた秀吉公、山海の珍味で御馳走遊そばし、大變なお待遇でございますから、正國の喜び如何ばかり、イヤなんと云つても立寄れば大木の陰ぢや、主人勝家とは雲泥の相違、これでは何うしても秀吉に肩を入れねばなるまいと、慾からとは云へ不義な男もあればあるもの、秀吉に打ち向ひ

正「承まはりまするに御前には柴田公と御和親の由、これ事實にございませうか」秀「左様だ、予は柴田に異存さへなくば我れから好んで喧嘩は好ま

ぬ、其れを禍ねてなんとするのぢや、成程と大海の如き御前のお心では、柴田公を左様御信用でもございませう、しかし異存なしとは表面の事、先月清洲引き上げに就いても、全く戰ひの支度を急ぐためでございます、殊に私儀を長濱に殘しましたも、御前の追手を途中で防ぐためで、既に長濱では充分の要意が出來て居ります、しかしながら北國の事にございますれば、此の寒中に動く譯にまゐりません、其處で北國方は乘り出さぬにしても神戸殿、瀧川殿には、御油斷がなりません、御承知もございますまい、神戸殿には近頃諸國浪人を高祿をもつてお召抱へに相成り、只管ら戰ひの御準備に候らふ、また瀧川とのに於きましても北國北之莊と協議まとまり、南北聲に應じて起つと云ふ有樣、今ま御油斷あつては大變でございますと、ベラベラと饒舌てしまいましたが、此れ位ひの事は遠から知つて居る秀吉なれども、何にも初耳と云ふ体で

秀「左樣か、予は知らなか

つた、神戸殿は御連枝のこと、まさか三法師君に弓引かれることもあるまいと思ふて居たに、サテ〳〵淺間しい反逆の企て、此の上は是非に及ばぬ、神戸殿として棄て置澤にゆかぬ、よくぞ知らして呉れましたと、列座の諸侯をお招に相成り、秀「方々聞れよ、今ま山路正國申すには、柴田の和睦も表面のみで、却つて我れに油斷させん計略なる由、また、瀧川は神戸殿を援けて三法師君に弓を曳んと準備中とか、先んずれば人を制す、後れては制せらる、急ぎ出陣の要意に及ばれよ、先桑名の瀧川を征伐せんと、いよ〳〵其の手配りにございます、かくと聞いたる山路正國、えらひ事になつて來た、こう早くやると思ふたら云ふではなかつた、困つた事になつて來たと、心配ではございますが、一旦恁うだと云ひだしたものを、今更ら左樣でないとも云へず、自分も柴田家を脱して羽柴方へ隨身せねばならぬ事に相成りました、サテ秀吉公に於きましては山路正國を證人として

いよ〳〵三法師君に弓曳く神戸、瀧川の一族を征伐せんと、茲に大軍を起されました、先づ濃州岐阜の城に向ひまする勇士には、先陣として黒田勘兵衛孝高、小川土佐守、一柳監物、堀尾茂助吉晴、總勢一萬五千、後陣には蜂須賀正勝の同勢、堀久太郎、仙石權平、羽根田長門の銘々、五千有餘騎をもつて繰り出しに相成りました、又桑名に籠る瀧川には、秀吉自身に御出陣之れに從がふ諸將には、先陣としては中川清兵衛清秀を大將に大谷平馬、木村小隼人の八十有餘騎、秀吉は一萬餘の軍勢を率從がへ中堅と相成り、後陣には淺野彌兵衛長政、之れまた一萬餘騎と申します、然るに勢州桑名に在つては瀧川左近一益、明年になつたら、北國柴田の勢を併して、羽柴征伐をして呉れんと、秘密其の支度を致し居ります、ところへ秀吉の軍勢が雲霞の如く押し寄せて來たとのことでございますから、其りやこそ大變、防ぎの用意と大騒ぎ城下の混雜夫れは〳〵筆紙に盡され

ぬ云はゞ阿鼻叫喚の修羅場と變じてまゐりました、しかし何んと云つても滝川も東海道筋での幅利き、弱將弱卒ばかりではございません、其れと云ふ間に防戰の支度は出來る、殊に日置五郎左衛門、室山備中守、滝川彦次郎の勇士の面々、持場〳〵を堅めて秀吉の軍勢を迎へることに相成りました、ところが羽柴秀吉の先陣は追々と繰り込んでまゐりまして、桑名の大手より滝川勢も之れに

ドン〳〵と鐵砲の銃先揃へて打ちだしました、滝川勢は應じて打ち出す鐵砲、さながら百雷の一時に落るが如く、天に轟き地に響き黑烟は天に漲ぎり朦々として咫尺を辨せず、勇ましく又凄まじく、暫らくは双方砲戰でございます、尤も當今の鐵砲とは比べものにはなりません、火繩銃のことですから思ふやうにはまゐりません、そこで事が面倒となると弓矢と代り其れでも面倒となると双方入れ亂れの槍刀の混戰となるのでございます、こうなると強ひ者が縱横無盡に切り卷くると云ふ有樣

でございます、サテ羽柴方はどうしても攻勢を採て居るだけで籠城する滝川勢よりも勇氣が出るのでございます、殊に秀吉の先陣たる、中川清秀の如きは、鬼と呼るゝ程の豪傑ですから、自ら陣頭に立つて 遊ナアに高の知れたる木ッ葉城、イデ何程の事やある、者共進め一と揉に揉潰せッ……と、烈しき下知でございます、此の時滝川方で弓取りと聞えたる小林直次郎と云へる強者、大手の櫓より弓手に名のある者を選んで、近よる羽柴勢を目掛て差し詰め引き詰め、射掛けまする矢は宛然雨霰の如うで流石の羽柴勢も、これが爲め進み兼ねてぞ見えました、

清秀憤然として馬上に突立ち 遊滝川方のへロ〳〵矢、何程の事やあらん、へし折ッて薪にいたし、此の城を燒拂へ、者共來たれ、それ進めッ……と采配振つて進みに進み、早や城を眞近に押し寄せました、されども敵も少しも屈せず、矢を放つて堀、近くは寄せません、此の体ながめた秀吉の愛臣、平野權平長康

此の人なか〳〵の強弓引でございます、携えたる大弓に矢を掛ひ、滿月と引き絞り　樞「ヤア〳〵小林、平野權平が一矢を送る受けて見よやと叫びながらも、切つて放つ矢は狙ひ違はず、小林の胸板を射貫ぬき一矢にて之れを倒しました、この有樣に室山備中守はこは大變と、矢より鐵砲でなくば防がれぬ、萬一大手を破らるゝ如きことあつては、此の城一刻も支え難しと、烈しく下知を傳えて防戰でございます、此の時後陣にあつて、此の有樣を見て居られましたる秀吉公、何に思ひけん、俄かに引き鉦を打ち鳴らしたのでございます、今一時と云ふ場合に臨んで、引鉦とは心得ず、不思議とは思ひましたが、總大將の下知だから先陣も、追々と引き上げるのでございます、味方が不思議がる位ひですから、城内では不思議に堪えません、是れはいよ〳〵何にか計略があるに相違ない、討つて出たら大變と、城内から一歩も外へ出るものもございません、是れで日も暮れ近

くなりましたので、此の日の戰かひを終つて對陣と云ふことに相成りました、サテお話が變つて齋藤利之の助、丸山太郎の兩人は、かねて申し合せて置ましたものと見え、各自に五萬兩を頂戴いたし候らふと云ふ落書をして京都南禪寺に引き上げ、暫ら く天下の形勢を窺ふて居ります、と、築に違はず桑名、岐阜攻と相成り、秀吉は三萬騎を率ひて勢州に乘り出したと云ふ事が分りました、そこで此の戰ひの混雜に紛れ込み、秀吉を擊ち取ふと丸山太郎や小山田源次が逸りますのを、利之の助は押し止め、

利「イヤ〳〵まだ其の時機ではござらぬ、まづ猿どのを狙ふは北國柴田との喧嘩の折りぢや、なに高の知れたる桑名、岐阜を落すに、あの剛腹の羽柴秀吉、態々伊勢路まで下りませうや、彼奴は今ま尙ほ大德寺に畫廊の夢でござらふ、しかし之れに近寄ること思ひもよらず、兎も角も秀吉は第二といたして是れより石川どのゝ手を借て、桑名へ乘り出し、瀧川勢や、羽柴勢へ

惡戯をしてまゐらふか

太「惡戯とは、とう云ふ事でござるか、

利左「まづ我れ〳〵一同は混雜にまぎれ、貴殿と小山田と

のは瀧川の城内に乘り込み、隙を見て火をかけ候らへ、拙者は

秀吉の陣に……よし秀吉は居ないにしろ其の本陣に火を放ち、

双力に混雜いたさせてはどうでござる、徒然の折柄乘り出しま

せうか、また石川とのは佐野とのと美濃に乘り込み、神戸を痛

めて貰ひたい如何でござる

太「其りや面白い、桑名も羽柴の本

陣も、火になつたらどれ位ひ騷ぐか其の混雜が面白からふ、ま

ゐる〳〵善は急げぢや此れより直ぐに……と、いよ〳〵利之助

太郎源次の三人は勢州に、五右衛門は佐野の義明と手下の奴等を

從がへまして、右と左りに別れ〳〵に乘り出しました、サテ瀧

川方に於きましては、一と先づ軍勢をまとめ、夜に入つては奪り

火を燃き夜討ちを防ぐ用意をいたし、なか〳〵油斷がございま

せん然るに室山日置の兩名は、主人に今日の戰ひの有樣を物語

り、何分相手が秀吉の事ですから、どんな策略が廻ぐらしてあ

るやら、見當が着ぬので氣味の惡いことばかり、現に今ま戰ひ

の酣はならんとするに、早やくも引鉦を打ち鳴らして逃げるな

ごゝは、何にか深き計畧のあるに相違ない、まづ〳〵彼れの手

に乘なかつたは味方の運の強き所であるが扨て、なにを云ふに

も敵は大軍、これで不足ば中國の毛利の一族も後詰にあれば、

とても此の籠城は覺束ないことに候らふ、それとも外に援兵の

見込みもあらば兎も角くも、左なくば今まの内に當城を引き拂

ひ、柴田どのと合体するに若はなし、此の儀如何に思召すかと

賴みに思ふ室山、日置の兩將が弱腰になつたから堪りません、

瀧川一益もいよ〳〵當惑の一体でございます

一益「然らばどうあつ

ても籠城覺束なく相成つたと申すか是非に及ばぬことである、

秀吉の軍勢、今ま引きあげて居るを幸ひ、いまの内に當城を退

散いたし尾州蟹江の城に引き上げ、神戸どのと合併いたし、其

の上へで柴田とのと合体せんには、また此の恢復は容易であらふ、左は云へ當城を引き拂ふは、予は殘念に思ふぞよ　室山「御道理に存じ上げまする、しかし落城と云ふ譯ではなく、敵の鋒先をさける一時の手段にございますれば、君の御恥辱とは相成りますまい、たゞ早速かに御引き拂ひの御要意こそ願はしく候ら

一益「是非に及ばぬ名々にも要意あつて然るべしと、奥の間に入り瀧川は、泣き叫けぶ奥方や女中連を慰さめて、いよ〳〵引き拂ひの要意の騒ぎに、どうした過失か故意と放火たか、大手第一の櫓に火がついて、折柄の西風に煽り立てられ、炎々として燃へ上がるに、サア上方勢の押寄せたるぞ、はや當城も落城と、城内一時に騒ぎ立ち、搦手の門を開いて逃げ失る味方の有様、とても之れを引き纏めると云ふ譯にはまゐりません、かゝる混雑の中にも室山備中守、五十餘騎を引き從がへ、一應敵の寄せたるものか、たゞしは味方の過失かと、櫓に登つて撿分するに、敵の寄せたる様子も見えず、どうして此處に火を放たものであらふ、何れにもいたせ猶豫はならぬと、其の旨主人の一益に物語り一刻も早く御立ち退きの程を願ひ奉まつると、自己の殿となつて當桑名の城を引き拂ひ、尾州蟹江をさして落ち行きましたが、此の有様を櫓の上より眺めて居るのが、いつの間に紛れ込んだものか丸山太郎、小山田源次の兩名でございます丸山は落ち行く瀧川室山を眼下に見下し

太「ヤア〳〵瀧川一益承たまはれ、我れこそは故明智日向守光秀の臣、丸山太郎秀國なるぞ、只今小山田源次兩名にて當城を乗つ取つたり、殘念と思はゞ引き返して見參するか、返答せいと呼はりました、

第十二席

かくと聽くより驚いたは瀧川一益　一益「ナニ桔梗の殘黨丸山と、引き返して打ち取れと、馬引き戻せと逸りまするとと、室山

は押し止め　室山「御立腹は左ることながら、後には秀吉の大軍あり、殊に當城に忍び込む程どの丸山、如何なる手段をいたし居るやら分りませねば、たゞ何事もお忍びあつて、お引き上げこそ願はしく候らふと、慰さめながら落ち行く姿た、如何にも哀れなものでございます、　樽の上より丸山は、大口開けて打ち笑ひ　太「イヤ早や腰抜けの瀧川かな、我れかくてある裡に秀吉の首級も擧んに、さりとては笑止の落ち武者、何處まで逃げて行くのか、行く先き〳〵も敵の中ぢやあはゝゝゝと笑つて居たのは上出來でございましたが、いつの間にやら羽柴方での勇士の面々平野權平を眞先きに、當城さして乘り込んでまゐります、見附けられては大變と、こんどは丸山も小山田も、樽を駈け下り搦手の門から、狐鼠々〳〵と、逃げ失せんといたしましたが、なか〳〵世の中のことは左樣おもふ通りばかりにはまゐりません　秀「梧桐の殘黨丸山太郎秀國落武者の姿で逃げんとする後から

小山田源次の兩人呼び止めて、羽柴筑前守秀吉見參ッと、叫ばるますので丸山は驚きながら　太「ナニ、筑前どのとなサテも珍らし、對面なるが、腰秀吉には用はないのだ　秀「おう予を腰者と思ふて居るか、サテも笑止や、最前我が陣所に忍び込み、火を放たんとする曲者、引ッ捕へんと思ひしが、彼奴こそ正しく內藏之助が一子利之助に相違あるまじ、討ち取るは袋の鼠なれども今ま彼れを討取らんには明智の二葉、光若丸の養育は誰がする、不憫と思ひ見逃したるも、光秀にこそ怨みあれ、東西知ぬ光若に何んの怨みのある可きぞ、左は云へ光若我れを怨まばそは是非もなき次第ならずや、討ち討たるゝも運次第、何時たりとも相手にならふ、しかし今夜の惡戲笑止〳〵、たゞ何事も見ず聞かず、いそぎ京都に立ち歸り、光若の養育に心を盡せ、故主への忠義は其で濟む筈、如何に如何にとありますので、丸山も小山田も、秀吉の顏打ち眺め　太「おう殊勝なり羽柴秀吉、愚

を着せかけ理で責めるとも、我等が思ふ心の寝刃は、なか〳〵抜ずに濟されぬ、しかし今宵は汝の言葉に從がひ、無事に引き上げるとも折りを窺がひ、刃向ふからには油斷いたすな　秀「おう天運次第怨みも受けん　太「流石は秀吉宜く言つた、さらば再會まで首級を預ける、左らばぢやと小山田引き連れ、暗に姿を隠しましたが、秀吉は大した戰爭に及ばずして、桑名の城を乘り取つて、燃あがりし火を叩き消し、たゞ一ッの矢倉のみで消し止めました、サテ滝川は一旦桑名を引き上げました、とうやら恁やら蟹江の城に乘り込みまして、此の事を北之莊柴田家勝に注進に及びました、もう恁うなると、靜止て居る譯にはまゐりません、そこで來年雪解の時をまつて居りましたが、いよ〳〵天正十一年三月下旬、勝家は北國の軍勢を從がへ乘り出さんといふことでございます、此方は齋藤利之の助、秀吉の陣中に忍び込み、まさか秀吉がこの伊勢路には來て居るまい、かの大谷

平馬が其れらしく見せかけ、軍略を廻らして居ると思ふて居たに秀吉だから堪りません、雑兵の中より利之の助は見付け出され既に命と思ふところを、放逐せられ、危うき難を遁れましたが如何にも殘念に堪られません、しかし此の場合どうすることも出來ませんので、其のまゝスゴ〳〵京都に引き返し、南禪寺に歸宅てまゐりました然かるに石川佐野はまだ歸らず、丸山小山田もまた戻つてまゐりません、サテ兩方の首尾は如何にと、心配いたして居りまする、ところへ歸つて來たのが丸山小山田の兩名でございます　利「ヤアお手柄〳〵大手の矢倉に火を放けられたは近頃見物でございたが、よく秀吉に狙はれず無事にお引き上げが出來ました　太「イヤなか〳〵豪い奴は彼の秀吉、いつの間にやら城に乘り込み、兩人待てッと呼び止められて散々の体でございた　利「はゝゝゝ貴殿方にも秀吉奴に、これは〳〵、拙者もまさか出陣はいたし居るまいと高を括つたが失策の原因

彼の猿眼に白眼れたから堪りません、例の加藤、福島、片桐の張に取り圍まれ、何に切り卷ッて逃れる途はあると思へど、如何にせん本陣のたゞ眞中とても無事では濟まいと、果怯未練の下郎と見せ掛け縄にかゝッて秀吉の面前に突き出された時は、これぞ地獄の上の一足飛び、萬一首の生命のと云へば其れまで縄はね切つて躍り込み、秀吉奴を斃殺し呉れんと、差し扣へて居たと思はれよ、すると彼奴案外にも恩を着かけ放免すると門前より縄つきのまゝ放り出したので、縄ふり解いで惡口散々、大手を振つて出たものゝ、一時はこれでも心配でござつた、なんと云つても當代の豪傑、迂濶には手は出せませぬぞ、この上は石川の歸るを待つて、また一と協議いたさねば成りません、

太「左様でござる、この上は柴田との戰かひに、今一度近寄つて、どうでも討ち果さねば、この腹が癒ません　和まアまア時節を待つことにいたしませうと、其の夜は其のまゝ床に入り、疲れを休めて居りました、然るに石川五右衛門は佐野の義明と岐阜に乘り込みましたが、まてども〳〵戰にならず、思はしいこともなく、これはお土産なしで戻つて來た、サテ利之助は一同に向ひ、まづ當分はこのまゝで天下の形勢を見た上で、再擧を計る外はないと、其れよりはたゞ京都の動靜のみ探ッて爲すこともなく、其の年を送ッて了ひ、明れば天正十一年、花咲く四月に近づきました、サアこう世界が暖かくなると北國の雪も解たに違ひない、さすれば柴田が乘り出す、秀吉も繰り出す、其處で出合ところは、江州に相違なからふ、面白くなつて來た、此方も其れだけの要意もしなければなるまいと、いよいよ柴田、羽柴の合戰になるのを待つて居る、成程と利之の助の思案に違はず、北國の柴田は雪の解るを待ち兼ねて、先づ七ケ國の軍勢を從がへ、江州柳ケ瀬まで乘り出だし、其の附近の民家を燒拂ひ、此所に本陣を拵へました、然るに羽柴秀吉は、此

の注進に依つて莞爾と笑ひ、いよ〳〵勝家の白髪首を貰はねば相成らぬ、それにしては岐阜の神戸、蟹江の瀧川、これ等を籠城封じ籠て置きさへすれば、相手は北國の柴田一族、此奴さへ片付くれは、後は緩くり日長に出來ると、其の身は柴田に當るべく、京都を發足いたして江州安土の城まで繰り出しになりました、かくと聞いたる利之の助、京都に居ては仕事が出來ぬと、丸山、小山田、佐野の三人を引き連れて、今度は柴田方の人足になつて紛ぎれ込みましたが、石川は手下を引き連れ、佐久間玄蕃の軍勢に紛ぎれ込まんと乘り出しました、サテ秀吉に於きましては表面には織田三法師君の御用始め、これに對する羅は取り挫がんと云ふので、幕下の諸將を集つめ先づ防戰の要意には、賤ケ岳に七ケ所の砦を搆へ持口を定め軍勢を置くと云ふ手配でございます、かねて昨年の冬以來、幕下に隨身の山路將監には、相變らず安土に乘り出しては居りまするが彼れが根性の劣た

ないのに愛想を盡し、あまり宜き待遇がないのでございます、されば山路に於きましても、秀吉の愛想がないので心中少しは不平でございます、殊に北國方は案外の優勢で、油斷したら秀吉の敗戰になるやも分かりません、これならば秀吉に隨身では なかつた、しかし今更ら柴田方に味方する譯にも往かずと、左つ右つ思案して居るのでございます、秀吉の活眼、早くも其れと見てとられ、彼奴は油斷がならぬ、何時裏切りするかも知ぬと其れとなく呼び出だし 勢山路正國、其方には持口に就いて相談があるのぢや、知ての通り予は七ケ所に砦を搆へた、ところで其方は棄勇の聞えもあり、予は股肱と頼むからは堂木山の鼻大杉の砦を持て貰ひたい、彼處は至つて難所でもあるし、敵にも眞近ではあるし、普通〳〵では守れまい、其處で其方に持て貰ひたいと思ふが、承知であらふな、こりや面白い、なんと云つても敵には近いし、裏切りするにも、また手柄するにも何れ

にも跳らへ向の所と思ひ、山路も喜んで正「如何にも承知いたして候らふ、と御受した、其處で同勢七百餘名を從へて乘り出ました、尤も此の砦を第一として次は東野の山の菖蒲が谷、この砦に向ひましたは堀久太郎秀政を大將に二千餘人の同勢、次いては、蜂須賀の軍勢三千餘人、左手の尾崎山には木村小隼人の同勢千五百、中の砦は小川土佐守の軍勢凡そ八百餘人、中堅としては賤ヶ岳、此の要害には桑山修理之進、羽根田長門の三千人、大岩山の砦には中川清秀の三千人、岩崎山には高山右近太夫友房の軍勢二千餘人、立髮山には羽柴美濃守秀長の同勢五千人、相備へとしては筒井順慶の三千餘人、天神山には黑田勘兵衛の二千人、遊軍としては生駒甚助、此れに將たる羽柴筑前守秀吉には、安土の城に在陣し、前に北國を防ぎ、後に神戸、瀧川の勢を封じ籠て居られます、然るに目下尾州蟹江の城に居る瀧川一益、なんでも桑名の恥辱を雪ぐは此の時なりと、同勢

一萬人を引き具して岐阜城の神戸どのと合併いたしたとの事でございます、其處で池田勝入齋に略ぼ一萬の軍勢に將として、先づ岐阜を取り圍ましたが、なか〳〵瀧川神戸の勢ひも侮り難しと云ふ注進でございます、されども秀吉は爾莞と笑ひ秀、そりや其の邊のこともあらふが、しかし兩勢を合したところで、滅多に北國勢と同時に討つて出るものでない、池田の一萬でことは足る、たゞ一時押さへてさへ呉れれば其の内には北國勢を平ぐるので、ナニ心配に及ぶべき、たゞ池田に充分の手配をいたせとあつて更に瀧川や神戸は、眼中に措いてない、ともうも大した大將もあつたものでございます、サテ北國勢に於きましては、お馴染の佐久間玄蕃盛政、先陣として繰り出だし、まづ羽柴勢の備を見んと、小高き處に駈け登り、彼處は誰れ、此處は誰れの持場であると、一々眺めて居ると驚きました、第一手近の備へは誰れあらふ、江州長濱に殘し置たる山路正國で

ございますから、玄蕃が驚いたも無理ぢやない、彼れは柴田勝豊の附人として殘し置たに何時の間に秀吉に隨身したものか、己れ利慾に迷ひ、恩を忘れ義を忘れ、秀吉の甘き言葉に乘られたに相違ない、憎きは山路正國、彼奴の素ッ首引き抜ねば腹が癒ぬと、烈火の如く憤ほり、其の場で山路の砦に駈け向はんとするのを

△「あイや我が殿、暫くお待ち候らへと、呼び止めたものがございます、これ何人でございませう……

第十三席

サテも佐久間玄蕃盛政は、山路正國の變心を憤ほり、今までも駈け向ふて例の自慢の十八貫目の鐵棒を正國の頭上にお見舞申さんと逸り立つたを、我が殿暫時お止まりを願はしく候らふと、玄蕃の馬前に立ち出で、大地に兩手を支かへた者がございます、玄蕃は馬上より見下しながら

玄「止め立てするは何者ぢや、

や

△「御味方の者には候らへども名を申し上げる程の者ではございません

玄「ナニ名乘る程との者ではないと、玄蕃つく〳〵眺めて驚きの体でございますので、名乘る程でもないと云つたが無理はない、其りや其の筈見る陰もなき一卒でございますす、

玄「なんだ足輕かたゞし人足か、それは可いとして何故へ止た其の理由聞う……

△「お止め申しましたは外かでもございません、彼の山路と仰在るお方は、御存知の通り我慾一遍のお方にございますれば、利を興えて之れを招き、味方に引き入れんは容易かと心得まする、其の上敵の要害、また備を聞き取り、秀吉の意外に御乘出しになりますれば、御勝利疑ひなしと心得、失禮ながらお止め申したのでございます

玄「なるほど宜いところに氣が着いた、天晴れな奴足輕人足には惜い男ぢや、恩賞は追ての事、名を名乘れ名を……

△「有り難き仕合せに存んじます、私奴は足輕五助と申す者にございます

玄「して誰れの手

に屬するぞ　五「殿様のお馬附きにございます……　左「おう、左様であつたか面を上げよ　玄蕃の眼では五助でも、實は後日は四條磧で、天鉄維となる石川五右衛門でございます、これも齋藤利之助の計略で、なんでも秀吉の陣立を破るには、佐久間の如き猪武者を煽動あげ、再び山路を北國に味方させ、秀吉の裏切りさせねば相成らぬと、こゝに此の策略を五右衛門の手から用ゐたのが、案に違はず闘に當たり、玄蕃は早速く陣所に歸へり、家老の拜郷五左衛門と云るに右の次第を物語り、山路を味方に引き入れるやう取り計らへと申うし付け、足輕五助は三百石の士分に取り立て得させよとある、どうも大した出世でございます、足輕より一足飛の三百石、豪い奴もあるものと、一同其の五助を浦山しがつて居りました、五左衛門は早速五助を呼び出だし、右の次第を傳えんといたしましたが、何處へ往たやら薩張行衛が知れません、

知れぬも道理、何づれは知行の恩賞のと云はふに相違ない、すれば第一國訛から化の皮が露現せんにも限らない、迂濶り此處へも居られぬと、もうちやんと其處を抜け出て堂木山の墨が谷と云ふところに身を隠して了ひました、尤も此處は敵も味方も氣が着かぬ、よし氣が着いて居ても用がないから北國勢も羽柴勢も來るところおやどざいません、五右衛門は此處を本陣として手下を引き入れ、素破合戰と云ふときは、思ふ存分に分捕せんと、かねて柴田勢に紛れ込んで居る齋藤利之助、丸山太郎等と打ち合はして居りまする、其んな事とは知ぬが佛、五左衛門は五助の行衛を尋ねましたが分らぬから仕方がない、戻つた上と其れは其れにして置いて其の夜腹臣の者に申し付け、山路の陣所へ一通の矢文を射込ませました、ところが山路の家來が之れを見出して、主人の前に差し出しまするとと、山路は之れを披らひて讀むに、今度の戰爭の起りと云ふは、貴殿にも知ての

通り、秀吉の我意を挫くのみならず、信長公御兩公達の世となすにあり、然るに貴殿には此の趣意に御賛同あつて再び柴田家に御歸りをまつ、殊に伯父家勝は當座の御手當として金子三千兩を贈呈いたす筈、また戰功の儀に就いては何處たりとも貴殿のお望みの地を差上げん、御返事を待つと云ふ文意、矢文の主は佐久間内拜郷と認めてございます、我慾一片の山路、一も二もなく、早速承知の旨を又た矢文で送りました、拜郷は之の矢文を受取り、どうも山路と云ふ奴は薄情極まる痴漢であると今更ならから呆然て了ひました、しかし今度は味方の爲めであるから、なんでも宜いと山路が來るのを待つことにいたしましたところが此方は山路正國でございます、何んでも今度の戰爭では、乃公一人有卦に入いつたやうなものぢや秀吉からも大分と絞り上げて居るのに、また北國から三千兩とは有り難い、どれ出掛けて一と儲けをと内々腹臣の者に打ち明け、自分のみ先き

に陣所を忍び出で、伴ないました母や妻子は人知れと家來に頼み、暗にまぎれて陣所を立ち出で、佐久間の陣所に乘り込みました、其處で佐久間は大いに喜び、先づ三千兩を贈り秀吉の要害攻へ、砦々の手配りを尋ねまするとも三千兩と云ふ黄金に眼が眩み、羽柴勢の備へを仔細に打ち明けて了ひました、此奴は三千兩が五千兩でも安かつたと喜びまして、いよ〳〵中川清秀の要害から踏み潰す手筈を定めて置ました、然るに油斷せぬ羽柴秀吉、かねて山路に油斷するなと、賤ヶ岳の羽柴美濃守秀長に申し付けてございますので、秀長は油斷せず、始終山路の砦に間者を入れて其の動靜を探らして置きましたところ、果して右の始末なんですから、早速落ち行く先きに伏勢を置きましたが、殘念にも肝腎の山路を取り逃し、母や妻子を捕へました、よし軍神の血祭り、且つは味方の士氣を鼓舞するために、山路正國の老母、妻子を磔の刑に行なひました

翌日に至たつて此の事を聞いた山路の慌き、早や腰も抜さんばかりでございます　正國「最う恁うなつたら破れ被れ、拙者に先陣仰付け下さらば、秀吉の首級を擧げるか、但し正國が討死にか二ツに一は御覽に供る、是非とも拙者に先陣をと憤怒の涙は頬を傳うて餘所に見る目も氣の毒でございます、佐久間も之れには同情を寄せまして　盛「左もあらん、云はゞ秀吉は母の仇、妻子の敵と思へば先陣もいたしたいであらふ、諸、盛政が出陣の案内を頼む、先づ中川清秀の陣を一と揉に揉潰さん、イデ要意あれと陣中に下知をする、早や支度が出來たと云ふので佐久間は勝家に面會いたし　盛「御聞でもございませう、山路正國を味方に引き入れ彼れに逐一敵の要害を尋ね取り調べましたるところ、全たく大將秀吉は出陣いたさず、其の實舍弟美濃守の同勢でございます、秀吉程の者でも前後に敵を受けるは策の出る筈もなく、いまだ美濃押への用意中として、其の身は安土にありと

確聞いたして候らふ、殊に賤ヶ嶽を本陣に砦は僅か七ヶ所でございます、中にも中川清秀の大岩山の砦の如きは、是れいまだ普請中にいたして、砦の小屋の壁まへ乾かぬやらね、ほんの出來たと云ふは表面だけでございます、されば輕にも攻めるにも此の砦に向はねば相成りますまい、鬼と呼るゝ中川清秀、此奴さへ落して仕舞へば、味方の勝利疑ひなし、されば盛政先陣の攻口には、此の方から踏み破つて御覽に入れん……早や敵を破つたやうな勢ひで、口泡飛して申しまするとと考へて居りましたが　勝「さすがは智謀に長けた秀吉ぢや、成程、身は戰陣に臨ますとも賤ヶ嶽に七ヶ所の砦を搆へしとは恐るべし、イヤ血氣に逸る所でない、篤と思案せい　盛「なんぞと云ふと伯父上には秀吉を智謀だとか、イヤ軍師だとか仰せあるが、其れは伯父上の買ひ被りと申すもの、御心配あそばすな、秀吉着陣せぬを幸ひに中川の陣を揉み潰して御覽にいれる、何

分勇氣滿々たる盛政のことですから、勝家も危險だとは思ひながらも　敢別に止めるのではないが勝に乘じて深入りするな、必ず秀吉の策略の罠にかゝるぞ、心して戰をするが宜からふ、さあ許しを得て佐久間は喜び、我が陣に立ち歸り、いよ〳〵出陣と云ふことに相成りました、其處で勝家に於きましては盛政が中川の砦に駈け向ひ、戰ひを始めるに就いては、敵方も必ず左右の砦より加勢の兵を繰り出だすであらふ、其れを防ぐには先づ賤ヶ嶽を押えねば相成らぬと、勝家は柴田三左衛門、小原新七郎、安藤彌五右衛門等を大將に、三千餘騎の同勢を繰り出しまた、大杉山の蜂須賀正勝の押へとしては金森五郎兄弟の軍勢二千五百人、尾崎山の砦の大將、木村小隼人の押へとしては原彦次郎の同勢二千人、東野山の砦、小川土佐守の押へとしては清水三郎助の同勢二千五百人、尚ほ又東野山菖蒲ヶ谷の堀久太郎の押へとしては淺見但馬守の同勢一千人、岩崎山の砦、

高山右近太夫の押へとしては不破彦三の同勢、是等のものに下知を傳えて繰り出しました、茲に前席で申し上げました通り、齋藤利之助、丸山太郎、佐野義明の三人は、小山田源次と諸共に、雜兵となつて紛れ込み始終勝家の本陣に居て、どんな策略を廻らすのか、其ればかりを探つて居りまするに、勝家が股肱の軍師が面白い、いまだ明智光秀の世盛りに、明智に仕かへ重く用ゐられしが身の程をも知らず安田作兵衛の娘今まで利之助の妻千鶴に戀焦れ、戀の叶はぬ意趣晴し、利之助を不義者として繼を掛け、既で利之助に切腹せよ武士らしく、なぜ死ぬかと惡口し、主人光秀に事を訴へたへ却つて光秀のために恥辱を蒙むり其の腹癒に主家を飛び出し、柴田勝家に隨身し、光秀に反逆の意ありと信長に讒言し、主家の滅亡を高見で見物してると云ふ稻田左門にございます、斯と知つたる利之助、此處で逢ふのも正しく故主のおん引き合せ、主家幾萬の人の怨み、こゝで晴す

ばかりでなく、左門の言葉を眞に受けて、信長に申し出た柴田勝家皆殺しに仕て呉れんと、此の旨丸山、佐野、小山田に申し含めて、時機の來るを待つて居りました處が一方では佐久間盛政山路政國を案内にして、夜を冒して大岩山の砦中川清秀の陣に肉迫し。今合戰の最中と云ふ注進、勝家は本陣に在つたゞ注進を待つて居ります、本陣も充分に備へ立てありますが、此の本陣の固めが今ま云ふ稲田左門で、利之助はこの手の雜兵となつて居るから、狙まれた左門こそ、いよ〳〵暗劍殺に向つてるやうで生命も風前の燈でございます、何事も知ぬが佛、左門は勝家に打ち向ひ、いよ〳〵戰ひの勝利にございますれば、御老体のお疲れもございませう、とうか御寢所にお引き取りを願はしく候らふ「イヤ〳〵まだ充分の安心は出來ぬ、なせと云へ知ての通り盛政は勇猛一片の荒武者で、勝ば必ず深入りをする負れば討死にと云ふので心配

でならぬ、成程と戰は勝利でもあらふ、また勝利でなくば叶はぬが、まだ〳〵戰ひと云ふ程の事ではない、先づ秀吉の本陣賤ケ嶽に乘り込んだ上の話ぢや、しかし油斷のならぬは秀吉の智謀、盛政の深入りは敗軍の基ぢや、予が安心の出來るやう、左門これより予が命を盛政に傳えては呉れまいか「イヤ御尤もの仰せ、然らば勝利の上は御引上げあるやう、君命として傳へます、然らば御免と立ち上がり、佐久間に對面せんと立ち出でたが運の盡き、利之助に狙はれると云ふ一段、一寸一服御免を蒙りまして……

第十四席

主家の怨みを、片時も忘れたことのない稲田左門が、現在柴田勝家の軍門に居やうとは流石の利之助も知なかつた、其奴を見出した上は袋の鼠、ごうしたッて通すことぢやございません

只だ其の機會を窺がふておりましたが、 藪にも云ふとほり、待てば海路も風とやら、 今夜勝家の使として佐久間の陣中、しかも今戰ひの最中と云ふ場所に出駈ると聞き出だし、天の與えと雀躍りし、 早速丸山、佐野、小山田の三人に申し含めて、夜の暗紛れに四人連れ、本陣から二町餘も距れて居る一本道の雜木林に身を忍ばせ

利「實際左門が柴田に隨身て居ようとは知なかつた、其れと知たら今日まで生存して貰奴でない、しかし此處で會ふと云ふも全たく故主のおん引き合せ、今までも來たらば怨みの數々、頭を踏み碎いてやらねばならぬ

太「左樣〳〵主家の騒動も原因を云へば左門から起つたこと、亡主を始一家一門の怨み、 思ふ存分に致さねば相成らぬ

源「あれ〳〵彼の人馬の音こそ正しく左門、方々御用意あれッ

利「おう云ふにや及ぶ、 左右に別れて、今や來たるを相待ところへ運の盡か稲田左門と家來十五人を引き具して、 松明の火枝折にて、駒に跨り悠

悠とやつてまゐりました、今ま雜木林に通りかゝると、どうも山路の難所で、ヤッと一人宛しか通られません然るにこの難所も二町あまりも往くとまた少は樂になると、家來が案内でトボトボと進む林の中頃道も一等惡いと云ふ難儀の場所で、待ち設けたる利之助、佐野義明の兩名は眞向より、丸山、小山田の兩名は後よりパラ〳〵と顯れ出でゝ大音聲

利「ヤア珍らしや稲田左門、我等汝を狙ふ幾年月、よくも無事で暮せしな、斯く申す我々は、明智日向守光秀の臣にして齋藤利之助光政、丸山太郎秀國、佐野左衛門義明、源「小山田源次の四人なり

利「よく〳〵我主光秀公を信長には毒舌を搔つたな、一家一門の怨み汝にもあること、イデ我々が忠義の刃を受て見よや……名乘りを聞いた左門の驚き、此奴等には叶はぬと

利「それ者共討ち取れと、下知の言葉を掛けながら、駒を乘り戻さんとするを見るより

利「己れ、逃げやうとしても逃さうや、夫れ左門を曳きす

り下せと、飛び廻る勇士の面々、邪魔する雑兵を谷間に蹴込み稲田左門に肉迫し、搦め取んと小山田が進むと左門も最う此れまでと、一刀の鞘を拂つて切り掛るを、エ、面倒なりと利之助手頃の石を宙に差し上げ、馬上の左門に投げかくれば、狙ひ違はず左門の胸板に當ると見えしかば何かはもつて堪りませう、左門は鞍坪より真逆様、アッと叫んで落るところを、丸山太郎が進み寄り、足下に踏へて動かさず

太「齋藤どの、此の上はなんとなさるゝ

利「不義不忠の稲田左門奴、まづ裸体にさしておき遣なさい、不義者に錦は不似合でござる

太「然ば裸体に……

利「左様〳〵、是れから四人で狂ひかゝる左門を捻ぢ伏せ、鎧は勿論、具足下から脱してしまひ、真の褌一ッにして

太「不義者の仕置には松の樹に大の字なりの釘付けにいたさう

利「この釘付けとは面白い、やい歩め、立ぬかと引き摺れ左門は苦しい息の下から

左「成程、私が悪かッた、其れで殺されるは運の盡き、是非もなき事ではあるが、何故一と思ひには殺して呉れぬ武士の情けぢや、助けぬ者なら此の首を刎て呉れ

利「はゝア可笑なことを云ふ奴ぢや、助けぬものなら首を刎とな、まだ助りたい心ぢやな、よし〳〵助てやらふ何も過し背の夢と思へば事は濟、しかし怨みはこのまゝでは晴ぬワイ、其處で四人で一刀宛の怨みを晴すぞ、しかし生命には別條ないから、痛い位ひは辛棒せよと先づ利之助の一刀で、右の腕を打ち落せば、丸山は二の太刀と云つて左の腕をスパリ……左門は兩腕を落されてアッと叫んでのつけに反るを、おう第三の太刀ぢやと佐野義明右の足を切り落す、小山田源次が四の太刀で、左の足を切り落すこれで左門は手も足もないほんの胴体のみとなつて了つた、利之助は落たる松明の火を振り燃し、苦し氣に目ばかりパチ〳〵させて居る左門を足にて蹴返し、腰の矢立を取り出だし、脊に墨黒々と「不忠不義の大罪人、稲田左門の四肢は切斷して刑と

なす」と書き付けまして、又別に白紙に、不忠不義の稲田左門儀、一家一門に代つて刑に處す、胴体を贈る柴田勝家へ、桔梗組の大將、齋藤利之助と認ため、左門の胴体を乘て來た駒をシッかと結ひ付け、手紙を手綱に結ひ置き、其のまゝ四人で駒を引き立て、勝家の陣に引き入れ、暗を幸ひに姿を隱して、かねて申し合して置いた石川五右衛門の隱れ場所、堂木山の墨が谷に途を急いで五右衛門に落ち合ひ、サテ佐久間と中川の合戰の模樣はと聞に、戰ひは佐久間の勝利で、中川は討死したとのことでございます　利「其れでこそ我が思ふ壺にはまると云ふもの いまに猪の武者の佐久間盛政、勝に乘じて深入りするに相違ない其れと云ふので秀吉の出馬となる、其處で吾々の出る幕となつて來る、定だめて今頃は死損ないの柴田勝家、怒つてるに違ひなからふ、何れにしても怨みある左門を討ち取たるは愉快である、一同大ゐに喜びました、サテ五右衛門の、手下の輩は、佐

久間、中川の合戰に臨んで、分捕は山の如くでございます、そこで五右衛門はこの戰爭で五萬兩位ひは儲けるだらふと笑つて居るが、此んな事にかけては、どうして利之助の及ぶところでない、いよ〳〵合戰が大きくなると、北國勢の糧食から、本國から運び出す、軍用金を奪ひ取らねばならぬと、笑ひながら五右衛門が語りまするとべく物語り、利之助は秀吉を刺して桔梗の世となすて、火は禁物でございますから、星明して呑で居る、どうも剛氣なものでございます、餘處ごとゝは云ひながら、秀吉の爲めには、天下の店開きと云ふ大事な戰爭、柴田は秀吉の首級を上げねば此方が首級を送らねばならぬ、一生一代の戰ひ、この戰爭の中に入つて、大仕事をするなんか、隨分大膽な遣方でございます、此方は柴田勝家、家來の左門が胴体のみで歸陣て來た話を聞て、取り調べさしまするに、左門は可哀想に裸体にした

上に無慚にも四肢を切斷ち、背には不忠不義の大罪人、稲田左門云々と書てある、何者の仕業かと思へば、手綱の手紙に桔梗の殘黨齋藤利之助と認めてあるから、驚いたの候らふの怒つたの怒らないのと、去年は去年で、五萬兩といふ大金を騙りにうせたが、予が軍師として股肢と賴む左門をかく慘酷しくも半殺にするとは何んだ、よし此の上は秀吉を討ち拂ひ、桔梗の餘類も枯して呉れんと、烈火の如になつては見たが、肝腎の利之助が眼前に居るではなし、手の下しやうがございません、其れで困つたのは左門の所置で、生て居る奴を此方で殺す譯にも往かずと云ふて養ふて置も面倒だし、妻子の無い奴は仕樣がない、ヨシ〳〵此奴は使命を果さゞるを罪として、仕置するが上分別と家來共に申し付け、大切なる戰場の使命を果さず、名もなき者のために不覺を取りし憎くき左門奴、其のまゝ谷間に蹴込んで仕舞へッ……と云ふことで、家來共も可愛想とは思ひましたが

大將の申し付け、イヤとも言へず、其の夜の中に、慘酷にも左門を幾何丈とも知ぬ谷間に轉がしましたが、惡の報ひとは云ひながら、谷間にも得い落ず、中途の山藤の蔓に引きかゝり宙になつて四五日も居たさうでございます、利之助こそ怨みもあれば切り刻みもいたしましたが、勝家の爲めには股肱の臣、其れを谷間に蹴落すなどゝは、戰國の世の氣が荒いとは云ふものゝあんまり情ない事でございました、其の事を聞傳たえた陣中では、あまり慘酷遣方で、勝家公は恐しくなつた、もうこんな無慈悲な大將の下たに働くのが馬鹿臭いと、雜兵ではあるけれど一人減り二人減り、殆ど三千人ばかりも一日の内に落ち失てしまひました、斯と知たる勝家は、こりや大變と驚きながら、これでは勝つ戰さも負ねばならぬと、軍中の刑罰を輕うして恩賞を厚くすると云ふ觸れ出しで、やッと兵士を引き止めました、然るに佐久間盛政に於きましては、第一戰に於きまして、羽柴

勢の豪傑、鬼と呼るゝ中川清秀を討ち取り大岩山の砦を占領りましたは、此れこそ大手柄で北國勢は勇氣益々奮う有樣、殊に佐久間盛政は、此の勢ひで、賤ケ岳の本陣まで駆け崩さんと逸り切つて居りまする、其處で使者を勝家の陣所に遣はし「おん喜び下されませう、第一戦にいたして中川清秀を討取りました玄蕃盛政は、是れより岩崎山の砦、高山右近太夫を討ち取つて御覽に入れる」と通知いたしました、勝家は大ゐに驚き「夫りや不可ん、深入りすれば味方の損ぢや、秀吉の計略に陥入つては相成らぬ、早々本陣に引き上げて宜からふ、其の旨玄蕃に確と傳えよと、使者を返しましたが、使者の歸ッて語るを聞いて盛政は大不平、「どうも伯父上は老耄の氣味がある、何んぞと云ふと秀吉がどうの、イヤ計略の智謀のと、秀吉が何にが恐いのだらふ、深入りするな〳〵と仰しやるさうだが、深入りするではない、勝て前に進むのである、今此の勝ちに乗じて進まねば、進むときがない、なんと仰せあるとも我れは我れ、勝利を得て御覽に入れると、どうしても勝家の言葉に從がひません、ドシ〳〵兵を繰り出して岩崎山の砦に乗りかけました、サテ羽柴秀吉公には、早や安土をお乗り出しになりまして馬場が瀬と云ふところで御滯陣になつて居られます、注進に依て清秀の討死、大岩山の砦の落ちたを聞れました時は、何んにも言はずに「シテ佐久間はどうした、もう引き上げてしまつたかとのお尋ね、美濃守の使者は勝ち誇ッたる佐久間盛政、既に岩崎山の砦、高山右近太夫の同勢に肉迫せんと繰り出して居ると申し上げました、此の時秀吉莞爾と笑ひ「秀左樣か案じるな味方の勝利ぢや清秀の死は惜むに餘りある、さりながら此の秀吉が柴田一族は云ふに及ばず、神戸瀧川を亡ぼす犠牲となつて呉れた大忠死、予が大恩人ぢや、厚く葬つて遣はさねば相成らぬと、流石に豪傑を惜まれる英雄の涙、清秀も地下で喜んで居るでご

いませう、斯も惜けある名將の爲めには、たれも生命を惜みませう、全軍皆な生存て再たび還らざるの覺悟でございます、殊に中川清秀は、つまり秀吉のため北國勢を深く引き入れ、包んで於いて皆殺しにせんとの策略であつたことが分明つて見ると、一ヶ所の砦を惜いと思ふ者はないのでございます、然るに北國勢の佐久間方は、勝ちに乘じて押や押や、秀吉の本陣まで押し潰せと、エイ〳〵聲して、岩崎山の砦間近く乘り出してまゐりましたが、此の戰ひこそいよ〳〵敵味方の勝負の決するところでございます、それとも知ず乘り込んで來た佐久間盛政、秀吉の策略に陷入つて、討死致すので北國勢の總崩れと相成ります壯快なるお話、殊に利之助が秀吉公の陣中に切り込み、加藤清正と山崎合戰以來再度の勝負と云ふは、一寸一息入れまして次席に於いて辯じませう……。

第十五席

エ、、茲で一寸お斷はり申し上げねばなりません、と云ふのは餘り此の賤ヶ岳の合戰を興に乘つて申し上げて居りますと、肝腎の利之助、太郎、義明等の働きが、お留守になつて、枝葉のみが繁つて幹が隱れるやうにございますから、賤ヶ岳の合戰は眞の概略として、いよ〳〵利之助、太郎、義明の働きを申し上げることに致します、どうか其のおつもりで御愛讀を願ひ上げまする、サテも齋藤利之助、丸山太郎、佐野の義明、小山田源次の四名の勇士は、いよ〳〵賤ヶ岳の合戰も、佐久間盛政の深入りから、最う宜い時機ぢや夫れ乘り出せと、例の秀吉一流の一騎駈け、諸共續けと馬場が瀨の陣屋を駈け出したから股肱の臣たる、加藤清正を眞先きに、福島正則、片桐且元、石田三成、小西行長、堀尾茂助、平野權平、加藤嘉明の面々が、それ遲れ

るなと駒に鞭打ち、眞一文字に賤ヶ岳に乗り出だし、北國勢に向ふから、流石に勝誇つたる佐久間の軍勢も、總崩れになつて居る、然るに秀吉も着陣早々のことでございますから、充分の手配りが出來ないとの事、かくと探知つたる利之助　利「其處でこれからが我々の世界でござる、サテ改めて申すまでもないが四人が四人死地に乘り込むは決して策の得たものではございませぬぞ、其處で佐野どの、小山田氏の御兩所には、此れより石川どのと一旦當地をお引き上げ下され、討ち討るゝは武士の常、萬一吾等兩人武運拙なく、秀吉に討れるやうな事もござらば、何卒石川どのと御幼君、まつた安田作兵衛どのゝ御前途を御見屆け下されい、其の代り秀吉の方は丸山どのと力を協せ、たとへ一と刀たりとも怨まずに置きませぬぞ、サア夜の明けぬ間を幸ひに、此の麓を下られよと、佐野小山田兩人を、京都に追返さうといたしましたが、なか〳〵兩人は承知いたしません

義「コハ異なことを聞くものかな、秀吉を討ち討たるゝも、其は齋藤どの、貴殿でなくばならぬと云ふことはない、しかし幼君のお身の上、且は安田殿の御事は、これ御貴殿でなくば、我々如き思慮分別なき者で仕了せることではござるまい、我々秀吉に近か付き、一刀を報ゆるの役を引き受け御貴殿方こそ京都にお歸りあるこそ至當かと存じまするに、吾々に歸れとは怨みでござる　利「イヤ然う仰しやるも道理ながら、吾れとても死ぬ爲めに切込むのではござらぬ、討死するばかりが能ではない、死は易し生は難し、殊に一日として安き眠りもならぬお互ひの身の上、それに無理から生命を惜むのでなか〳〵困難でござる、其處で失策れば其れまで、宙を飛で逝げて歸るまで、たとへ百萬の軍勢に取り圍まれ、劔の盤槍の襖の中にあるとも、必ず一方の途を開いて歸らねばなりません、幼君のおん爲、まだ〳〵死すべき時機ではあるまいと心得る、サアどうか石川どのと此

處おん引き取り下されたし　幾然らば是非に及ばず、引き取る
でございませう、あゝ條儀なき次第でござる　利早速の御承引
利之助おん禮もうす、さて泉州堺油屋常喜が許に、世を忍びた
まふ若君、且つは住吉浦の漁師善六とお尋ねあれば其處が安田
とのゝお隠れ家、一度御訪ね下さつて此の度の合戰の模樣、殊
に稲田左門を討ち取つたることお話下さい、さすれば少しは安
田どのゝ此處で佐野、小山田の兩人は、石川組が山の如き分捕
品を、京都まで運び出す、荷宰領となつて、京都に引き返すこ
とに相成りました、尤も石川組はチヤンと軍用切手を盗出して
重なる連中が持て居るので、京都まで幾多の關所も何んの譯も
なく、大手振つて通行することが出來ました、さて五右衛門の
働きは、北國勢の軍用金貳萬五千兩を盗み出して居りますが、
この分捕に逃入れ所が、中々興味のあるお話でございます、し

かしなにも惡事の仕方まで、ペラ〳〵お饒舌する必要もございま
せん、そこでこれは唯だ單に分捕したと云ふことにして置き
ませう、サテ佐野、小山田の兩人を、石川組と諸共に、京都に
追ひ返しましたる齋藤利之助、丸山太郎の兩勇士は、是れより
身支度をいたして、秀吉の陣中に乘り込まんと墨ケ谷を發足い
たしました、然るに佐久間玄蕃盛政に於きましては、だん〳〵
と羽柴勢の中に深入りいたし、高山右近太夫、黑田勘兵衛の陣
所まで乘り込みましたが、黑田の家來後藤又兵衛のために切り
崩され、此の砦を乘り取ることが出來ました、サア此の砦が乘
り取ることが出來なくなると、全たく四方皆敵で、つまり包圍
て袋の鼠とならねばならぬ、こりや玄蕃が惡かつた、一旦引き
揚げたが宜かつたと、思ひ當たつた時は最う遲い、全たく柴田
勢とは通路がなくなつて了ひました、やれ殘念と盛政も、一時
は落膽して策もなく、分別もなく、思案に暮れたのでございます

然るに只今秀吉觀音山に着陣したが、それは眞の僅かな兵で、切り崩すにはわけはあるまいと云ふ斥候の注進でございます、諸しこの上へは目的秀吉の陣中に乘り込んで、討ち取つて呉れんと勢を繼め、觀音山に乘り込まんと繰り出しました、然るに秀吉公は着陣早々、まだ同勢も集まらぬ始末で、お側には黒田吉兵衛、美濃部勘左衛門の外百餘名でございます、ところへさして佐久間の軍勢、鬨を作つて麓より、貝鉦の音勇ましくエイエイ聲して登り來る有樣でございます、時は四月二十日の丑滿前、暗を勿怪の幸ひに、總崩れになつたとは云へ、引き纏めたる佐久間勢、五千餘名で押し寄せて來たから堪りません、流石の秀吉も之れに包圍せられては最早や遁れる途はございませんお側に控へし武士共は、たゞ主人を大事と佐久間勢を中途で引き受け、餘程ど戰ふて見ましたが、どうして〳〵百餘名で五千餘名の敵が防がれませう、たゞ此の上は當觀音山を引き揚げる

外ないと、頻りに秀吉へ退陣をお勸め申しますかなれども、秀吉は泰然自若、たゞ心配いたすな、退に及ばぬ、叶はぬと思はば防ぐに及ばぬ、こゝで暫時戰ひの樣子を見物すれば其れで可いのぢや、騷ぐな〳〵と悠々然と、前に敵强があるとも、更に眼中におかない有樣でございます、然るに佐久間盛政は、早や本陣眞近に押寄せたりと例の十八貫目ある鐵棒を、サモ輕々しく馬上に携へ、防ぎにかゝる羽柴勢を追散し、秀吉眞近に駒乘り進め

「やア〳〵羽柴筑前へ見參せん、斯云ふ吾儕こそ佐久間玄蕃盛政なり、イデ尋常に勝負せよ……」と、五六間と云ふ處まで乘り進めてまゐりました、秀吉は大喝一聲

「無禮であら下郎奴ッ……」と、百錬の明鏡かと思はるゝ兩眼でハッタと白眼ば、威光と云ふものは恐ろしいものでございます、流石の玄蕃も秀吉の威力に打たれ、前に一足も進むことが出來ません、殘念なりと身をあさり、尙ほも進まんといたしまする折も折、

加藤、福島、石田、片桐、平野、堀尾、小西の輩が駈けつけました、それと見るより秀吉公「ヤア〳〵彼の下郎奴を討ち取れッとの下知に從がひ應と答えて駈け來るは、これ福島市松正則でございます、黒革縅の大鎧に其の身を固め、五枚鍬の兜を猪首に着なし、二間穂長の槍を引つ提げ、盛政の前に立ち塞がり大音聲に呼はるには

市松「ヤア珍らしや佐久間盛政、福島市松が向うたり、イデ尋常に勝負あれッと突き出す槍の電光石火、

盛政「物々しい勝負呼はり、鐵棒の味喰ひ居れッと、立ち向ふて二三合、合しては居るものゝ、玄蕃も總軍勢の崩れに心引かれて、どうしても充分の働きが出來ません、其のうちに秀吉勢は加はるばかりで、到底支えることが出來ないと思ふたか、殘念ながら福島を捨てゝ引き揚げんと身を退ぞく、福島は遁す者かと無二無三、突き掛ける槍先は、玄蕃も危ふく見えました、處へさして主人を大事と、駈け着けたは、玄蕃が老臣、拜郷五左

衛門と云ふ北國名代の場數者、五左「ヤア〳〵我が君、此奴に關はずとおん引き揚げ遊ばされい拜郷五左衛門、君に代つて福島奴を、槍玉に上げて御覽に供れん

盛政「おう、殘念ながら、五左衛門其の方に任かせ、予は軍勢を纒めるであらふと、駒の頭を立て直ほし、麓の方に引き返す、福島は望む相手を取り逃し、殘念ながら拜郷五左衛門と亘り合ひ、之れを討ち取り先づ七本槍の一番槍の功名をいたしました、此の勇氣をもつて北國勢を一戰に駈け崩さんと、福島は家臣の桂市兵衛、蟹江才藏の兩人を左右に從がへ、北國勢に當りましたが、手にたつ程の勇士にも出逢はず、いよ〳〵深入りいたしました、然るに加藤虎之助、片桐助作、平野權平、小西、石田の輩も、福島に一番槍をされたを殘念に、君の本陣を離れて、雲霞の如き北國勢に切り込んで佐久間勢を始め柴田の軍勢を思ふまゝに切り崩し天明近くに本陣に引き揚げるのでございます、サテ明智の殘黨齋藤利之助

丸山太郎の兩人は、觀音山に秀吉在陣と聞出し、暗の山路を分け登り、秀吉の本陣さしてまゐりましたが、いまだ天運に叶はないのか、道を迷ふ方角違ひに出たから堪りません、これはどうやら道が違つたらしいと氣が着た時分は、早や二十日の夜の月さへ冴る寅の刻過でございます、それからやッと道を轉じて觀音山は本陣近くに出てまゐりましたが、早や夜明けに間もない刻限、左れども月は山の端に入り木下蔭の暗をたよりに、本陣までどうやらこうやら便り着きました、サテ本陣と云ふから例の勇士揃いで萬一を戒しめて居るであらふと、逸る氣をジッと靜めて、後の方へ廻つて見ると、どうやら秀吉の側には此れと云ふ家臣も居ないらしい、サテは此の大戰に總繰出しと思ふたり、時分は宜しと利之の助、太郎の耳に口を寄せ、何にか私語雨勇士、莞爾と打ち笑み一刀の鞘を拂ふて幔幕を、内へ潜ると見えましたが、望む相手の秀吉公、床几にかゝつて今ま休息と

相見えたり、尤もお側には、やつと引き揚げたばかりの堀尾茂助が控へて居るばかり、時は今まなり夫れとばかりに、躍り込んだる利之の助、太郎の兩人御前近かくに駈け込んで大音上利「ヤア〳〵筑前承たまはれ、我れこそ汝に討たれ玉ひし明智日向守光秀の臣にして齋藤利之の助、丸山太郎の兩人が向ふたり、京都大德寺の門前と云ひ、勢州桑名の陣中と云ひ、かさね〳〵の失敗も、汝の運の强かりしが爲め、されども今日こそ逃さぬ故主の怨み、サア其の首渡せと詰めかけたり、あゝ秀吉公のお側には堀尾茂助あるのみにて、夫れすら宵よりの戰ひに、身体疲れへド〳〵になつて居るところへさして、かゝる豪傑二人に切り込まれては、秀吉の生命も風前の燈び、危險此の上へもなき處へ、加藤虎之助が駈け來たり、いよ〳〵利之の助、太郎の大奮戰と云ふお話、一寸一服御免を蒙りまして……。

第十六・廉

秀吉公は着陣早々の大混戰で、お側の勇士は手柄を競ひ、我れ先きに戰場に乘り出し、本陣は名のみで眞の秀吉一人と云ふ位ひの有樣、然るに堀尾茂助は敵の首數多討ち取り、早や天明の程ど近くも相成り、また主人のお身の上も案じられ、やッと引き揚げ息吐く間もございません、北國勢なら兎も角も、桔梗の殘黨齋藤利之の助、丸山太郎の兩人と聞いて驚きました、此奴は油斷の隙に豪ひ奴が來たものと、血に染む槍を取るより早やく利之の助の前に立ち塞がり

英「おう珍らしや齋藤、丸山、この合戰に紛れ込み、主を怨まんとは卑怯千萬、なぜ武士らしく、イヤ齋藤利之の助として堂々旗擧げには及ばぬぞ、桑名の陣と云ひまた今日の振る舞ひ、憎くき働きもう宥されぬ、さア堀尾茂助がかくて有るうちは、御主人に指一本、さゝれるものなら指

して見よ、此の槍先をお見舞申すぞ

太「不要ざる繰言聞く耳持ぬぞ、おゝ邪魔するなら汝から、先に討取り否やでも應でも、筑前の首級を討つのぢや、サア來い來たれと丸山が、大上段に振りながら、切り込む切先き翻りと轉し、突き出す槍も主人を思ふ、茂助が必死の手練の働き、エ、面倒なりと利之の助、同じく切り込んでまゐります、成程と茂助も勇士には相違ない、しかし利之の助、太郎の兩人には叶ひません、ダン〳〵と切り込まれ、身には薄手ながらも數ケ所の疵を受け、次第〳〵に受け太刀となつて後へ退く、この有樣に雜兵共、四五十人が槍を扱いて槍襖を作つて邪魔するので、三面六臂と云ふ利之の助も、太郎もなか〳〵茂助を討ち取ることが出來ません、殊に秀吉公は馬に打ち乘り、茂助が討死すれば逃げ出す用意、しかし大將が本陣を逃げたとあつては、總軍崩れの基ですから、どうしても其の場を退く譯にはまゐりません、其處でたゞ馬上にあつて

それ者共堀尾を討たすな、下郎を討ち取れ恩賞は望み次第ぢや、必ず退くな討ち取れと、采配採つて、下知をなす、ナニ五十や百の雑兵共が、如何に戰ふて見たところで利之助、太郎に叶ひませうや、たゞ茂助の力を倚頼にして居るのみで、とても討ち取ると、云ふことは思ひも寄らず殊に討死は算を亂して、早や陣中に血河屍山の慘狀でございます、此の有樣に秀吉公も、殆ど身を退く場所もなく、大層な御心配でございます、然るに利之助は愚圖〳〵して居る間に、肝心の秀吉を取り逃しては大機と、茂助や雑兵を太郎に任せ圍から切り拔けて大音上

利「ヤア〳〵秀吉、もう此うなれば叶はぬところ運の盡き、速やかに首級を渡すか、但し我が刀の錆となるか、と上段にふり冠り、眞近に進むをハツタと白眼付け

秀「無禮であらふ利之助、汝光秀の志しを繼ぎ我れを狙へと、我れ怨まれる覺えなし、さればこそ一度ならず二度までも助けおきしに恩を思はず、我が本陣を汚す

大罪、宥しはせぬぞ退り居ふと、一喝して陣刀の、柄に手を掛け素破手を下さんとする折柄

虎「ヤア〳〵我君、お手を下さるまでもなし、加藤虎之助清正これにあり、逆臣光秀の臣下素下郎、最早逃れぬ縄へかられと云ふより早やく、大手を廣げて駈け付けたり、清正が來たのでもう大丈夫、流石の秀吉公もホッと一息、此方は齋藤利之助、またもや邪魔が這入つて來たか人もあらふに清正とは驚いた

利「ヤア〳〵丸山、お身は此處を關はずと、此の場を切り拔け我が歸るを待ち候らへ、討死は無用でござるぞ、早く〳〵……と

丸山を落さんとする隙を窺がひ豪氣の清正組かゝる、左はさせじと利之助、太刀を振るへば醜りと轉し、尙も組んと進み寄る、丸山も清正と聞いて思はずも勇氣碎けて助もすれば、茂助に突き立てられんとする有樣、其れと見るより利之助は

利「早く此の場を退き候らへ、太郎どの退き玉へと叫ぶので、太郎も利之助の身の上が案じられぬでは

ないけれど、退け〳〵と云はるゝので、詮方なくも切り開き、

太「然らば齋藤どの、お先きに此の場を……と云ふより早やく身を退ぞくと見えけるが暗に姿を隱したり　西「己れ逃げるとも逃がさうか、返せ、戻せと五六間、追ひ掛けて見たが分りません、殘念ながら茂助も後へ引き返へす、此方は虎之助清正、手捕にせんと組かゝるを、利之助は切つ先き鋭どく切り込むのでなか〳〵組付くことが出來ません、かゝる所に引き揚げて來た福島正則、此の人至つて一徹者で、勝つも負けるも時の運、勝負は一寸の間に片付けぬと氣に入らぬ、其樣な氣の正則だから清正が手捕にせんと右に轉し左に轉し、氣長くやつて居るのが面倒臭くて見て居られぬ　正則「ヤイ清正、此奴何者だ　清正「おう正則か、必ず手を出すなよ、此奴は桔梗の利之助ぢや、生捕て安田の詮議、なア分つたか　正「馬鹿云へ、生捕にしたつて其奴が乃公に任せ、過日押北の莊油屋常喜の數寄屋で取り逃がした曲者だ、乃公に任かせと云ふに道乃公も尼ケ崎で取り逃した木ッ葉野郎だ、生捕にせなければ正「エ、面倒なり、また北國勢も中々退ぬに、こんな奴に手間とつては一大事、此れを見よやと云ふより早く、エッと突き出す手練の槍先き、利之助は身を轉す間が無つたか、左の大股を突き立てられ　利「殘念ッと叫んでバッタリ倒るゝ、福島の郎黨桂市兵衛乘りかゝつて起しも立てず、高手小手に括り上げ　市兵「如何いたしませう　正「縄打つたか、何ぢするもないものだ、我が君を仇と狙ふ不敵の下郎、軍門に引き摺出だし、首打ち落して桔梗の根を枯して了へ　市「承知いたしましたと市兵衛が、引き立てんとするを清正制して　清「ヤイ待て〳〵、市松貴樣は何んだ、横合から飛び込んで、槍を入れるのみならず首を刎るとは何ごとなるぞ　正「イヤ槍を入れたは惡かつた、しかし左樣怒らなくても可いぢやないか、乃公はまた、あんまり

貴様が悠長な勝負をやつて居るから、ツイ〳〵例の持病の肝癪虫が飛びだした譯だから必ず悪く思ふて呉れるな、ところで此奴生しておいたところで安田の在り家を云ふ奴ぢやない、一度ならず二度三度、我君に仇なす下郎、首討ち落すが後日の爲めだ　道左様理由が分れば貴様に呉れてやる、勝手にせい、無惨なるかな利之助、山崎合戰以來、故主の恩に報ひんと、幼君の介抱安田作兵衛がこと、一身に引き受けて晝夜寢もせず、艱難辛苦いかばかり、されど一旦故主に誓ひし身は臥薪嘗膽、たとへ土を嚙つても、豫讓か孤忠の例もあり、秀吉へ怨みの一刀、一度は報ひねば相成らぬと、苦勞したのも水の泡、福島が槍先きに股を刺れて、細にかゝる殘念サ、死を惜むにあらねども冥途黄泉に在します、我が君や且つは又、父上兄上に何んと申し譯のあるべきぞ、しかし云て甲斐なし思ふて益なし、サア切るなり突くなり、勝手にせいと云はぬばかりで、ドント身体を投げ出して、覺悟は殊勝でございます、篤と御覽あつた秀吉公、

秀　惜い奴ぢや、殺すな生おいて此のまゝ京都に引けよ、我れ凱陣の上調べる事もある、縄打ち市兵衛とやら、其方に預ける疵をいたはり予が歸るを待てよ、どうしても秀吉は腹が大きい惜い奴ぢや惜いもの、どうかなして我が幕下に從がはせ、充分の働きがさして見たいと云ふ思召し……其れと知たら利之助もたとへ幕下に從がはずとも、其の恩に感じて仇と狙ふは思ひ止まるであらふが、秀吉は飽までも安田作兵衛を磔にせねばならぬ、其の在家を尋ねるために、自分を飼放しにするのであらふ其の勘計には乘りはせぬ、たとへ恩を着せかけられても我れには光若と云ふ故主の孤子を養育し、桔梗の旗の色上げをせねばならぬと、一心不亂に思ひ込んで居るから、生命を取るな、京都に曳けと云はれても、別に嬉しいこともない　利「おゝこの利之助を京都に引けと云はるゝか、生命を棄てかゝつた仕業、首

打たるゝは覺悟の身、こゝで死ずば京都では、なか〳〵死る乃公ではないぞ、どうだ後日のため首を切ぬか、ヤイ桶屋の悴、卑怯にも不意の横槍、それぢや勇士と云はれまい、其處になると虎之助、流石は鍛冶の子程とある、感心な奴ぢや、あはゝゝは、此の一言に短氣の正則、何條堪へて居りませう、正「な、なんだと、周の粟を食はずと、伯夷叔齊の賢を學ず、身に漆も得せず、薬炭も得のまず、豫讓を習ふて非似忠義三羽烏と吐す腮、雀が聞いて可笑からふ、成程と、乃公は桶屋の悴、其れがどうした引かれ者の小唄とやら、是れでも喰へと携えし、槍の石突で叩き据るを、正「コリヤ〳〵正則、なぜ其の樣な亂暴に及ぶぞ、敵と成り味方となるも宿世の因果、なれども一旦縄にかつて捕はれる身に敵意あるとも、捕へし者は敵意ない筈、降るものは之れを容る、逃る者は打つなとは予が戰ひの軍令ではないか、強ひばかりが武士ぢやない必ずともに粗忽いたすな、

それ市兵衛とやら縄付きを京都に送れ、ハッと答えて桂市兵衛いよ〳〵主人正則に別れ、賤ヶ岳の合戰を後に見て、利之の助を京都に護送いたすことに相成りました、サテ秀吉の本陣を飛び出した丸山太郎、どうしても利之の助の身が案じられ、木の間がくれに身を忍び、最前からの樣子を窺ひ、無念や利之の助が縄にかゝつて引き据られて居るのを見て、もう此の上は絶体絶命死を誓つたる友を殺して、なんで吾れ一人京都に歸られるものぞ、此の上は腕と刀のつゞかん限り、切つて切つて切りまくり齋藤どのを助けるか、枕を並べて討死するか、二ッに一ッと決心し、既に切り込まんといたしましたが、イヤまて暫時、討死無用と云はれたは此處の事、兎も角も京都に歸り、石川どのと相談の上、助け出す手段もがなと、心は殘れど丸山は、利之の助が生命を無事に、京都に護送さるゝを確かめ、先づ大德寺着に相違ない、さすれば之れを盗み出す位ひは石川の手では朝飯前

だ、なにも心配することはない、最う此の上は一時の猶豫もならぬ、恐縮〳〵して見付け出されちや大變と、其のまゝ籠に駈け下り、夜明までにはイヤが應でも此の戰爭の地に離れんと、ドン〳〵と駈け出しました、尤も途中の切手は例の石川から貰つて居るから大丈夫、草鞋天の如く駈け着けた粟田口此の關所は中國の大名、小早川とのがお預り、番所には村山瀬太夫番卒凡そ百五十人、大木戸を打つて嚴重なことでございます、

太「やれ〳〵大津の新關は旨く脱けたが、此處は誰れの關守か知んて、おや〳〵村山瀬太夫、ごれは小早川の預りだな、よし一ッ叩いて遣ふと、ドン〳〵と打ち叩き

太「これは賤ヶ岳御本陣より大德寺に急ぎの使者、福島市松の手の者にて候らふ急ぎ御開門下されませう……切手はあるが、まるで口から出駄ら目でございます、早々お通りあれと、開門すれば都合は宜いが、さうは問屋で卸さない、いよ〳〵丸山の新關破り、粟田口の血の雨と云ふお話、一寸一息入れまして……。

第十七席

元來この關所と申すは、且ては亡右大臣信長公御法會の際、北國柴田一族を押えの爲め、京都禁裏御守衛として草津、大津粟田口の三ケ所に設けられたものでございます、此度柴田征伐に就きましても、秀吉は禁裏守護の職であるから、勅許を受けて出陣いたされたのです、併し其のために京都を其のまゝ放つたらかして戰爭するばかりでは其の職を全ふすることが出來ない、殊に三法師君も京都に御滯留になつて居るので、嚴重の上にも嚴重に警戒せねばなりません、其處で粟田口の關を小早川隆景侯が預かることになりました、其處で隆景侯は御自身は東福寺にあつて萬一を戒しめ、預かりの新關は重臣村上瀬太夫、

番卒百五十人を率ひて之れを固め、迂論な奴と見たら老若男女の差別なく、有無を言はさず引き捕へ、當今ならば軍法會議、其の當時の留守軍奉行に引き渡し、取り調べることに成つて居るのでございます、サテ丸山太郎秀國は、賤ヶ岳の戰地を駈け脱け、京都に急ぐ身も關所のある位ひは承知であるから、衆て石川の手で盗み取つたる切手を持て、先づ草津の關所を通り抜け大津の新關を胡魔化して、この粟田口に差しかゝり、見ると幔幕が小早川家の定紋ですから、此奴は草津、大津の手で通ると六かしい、一ッ大德寺までと大袈裟に出たが宜らふと　太「これは賤ヶ岳御本陣より大德寺に火急のお使ひ、福島市松の手の者に候らふ急ぎ御開門下されませう……と叩くにぞ、門番は聲高に　門番「暫時く控へさつせえ……と待たせて置いて關守村山瀬太夫に此の由を申し上げ、其の差圖を受ける、村山は老功な人なか〳〵分別のある人だから、福島の手で大德寺へ、ウムサテ不思議な思案の上、兎も角くも開門せよと云ふ下知に從がひ、門を取つて御門を開く、此方は待つて居たと云はぬばかり内に駈け込み　太「火急なればこれにて御免と、一禮して駈け出すを村山は呼び止め　村「アイヤ暫時く、たとへ火急の使者にしろ其のまゝには通行は相成ぬ、よし覺へ目出度き福島どのゝお手の方でも、切手があらふ、其れ見た上で……

太「如何にも、火急のことゝて心を奪はれ、失念の段御容赦下されい、切手は此の通り所持仕まつる……と差し出しました　村「なるほど持て居るな、アイヤお使者、拙者近頃眼病にて遠目が利かず、殆んど難澁仕まつる、一寸これにて拝見いたす、其れ誰れかある取り次いで呉れぬか、ハッと答えて番卒の一人、太郎の手の切手を取つて村山に手渡しすると、村山は切手の番號合印割印を檢分めまして　村「イヤ宜く相分つた、其處でお使者の要件は　太「こは心得ぬお聞べかな、切手を所持する拙者を捉へ、使者の要件と

は何んたるお尋ね、一々お返答へ申す限りでござらぬ、御疑念なくば切手お返しの上へ通行おん許し下されませう　村「通行罷り成らぬぞ、夫れ者共不審な奴が網にかゝつた、縄打て〳〵、ハッと答えて番卒ども、御用〳〵とバラ〳〵、太郎を前後左右より取り圍み、縄打ちかけんとするから驚いた　太「切手を持つて大徳寺まで罷り越す福島の郎黨、何に故へあつて御用呼はり、後日のお咎め後悔するな　村「默り居ろッ……最前より承まはるに、大徳寺まで火急のお使ひ、福島市松の手の者と申したぞよ、然るに此の切手を見るに、全たく御本陣の切手に非ずこは討死せし中川清秀陣中の切手たり、さある事も知ぬと思ふか、殊に雑兵の小具足を纏ひながら、其の口上は士分の用る言葉にあらずや、サテは汝ぢは聞及ぶ、秀吉公に槍を向たる桔梗の殘黨齋藤利之の助、イヤ其の手に從ふ丸山太郎秀國よな、予が眼を眩ましたる此の關を守るに、

其れ程ぞの事が分らずに何んとする、サア尋常に名乘りを上げよ、桔梗であらふが、丸山であらふが、返答あるや、どうぢや　丸山、星を指れて丸山太郎　太「おう村山瀬太夫宜く言つた、今まは何をか隠さんや我れこそ桔梗の遺臣丸山太郎に相違ない、かく名乘る上は是非に及ばぬ、たとへ此の場は血河屍山の修羅となしても、通り抜ければ相成らぬ、それとも無事に途を開くか、村山どうぢやと身揺へたり　村「サテこそ〳〵、我が推量に違はず、丸山太郎にありつるか、それ者共打ち取れと、下知に從がふ番卒共、得物をとつて打ちかゝるを　太「エ、もの〳〵しやと丸山は、一刀の鞘を拂つて切拂ひ、進んで來るを二三人バタ〳〵と切り倒せば、夫れ切つたぞ油斷すな、生捕には及ばぬ、討つて取れと、多勢を力に槍、長刀を晃めかし、十重二十重へと追ッ取り圍む、血を見て勇む丸山は、こゝを先途と上段下段、飛鳥の働き目覺しく、見る〳〵うちに十四五人、枕を並

べて切り倒せば、之れを眺た村山瀬太夫　其己れ悟き曲者かな恐れ多くも一天萬乘の大君の御座所を荒す反逆人、イデ村山瀬太夫が天誅の槍先き、受けらるゝなら受けて見よと、長押にかけたる槍押ッ取り、素扱をスいれて突きかくる、年こそ老たれ戰場の場數者、丸山も武術にかけては、桔梗の旗下に於いて三羽烏と呼ばるゝ達人、双方一騎打ちの勝負なり、いよ〳〵目覺し働きが出來るでもございませうが、成程ど村山が云ふ通り、此の新關に血を流すは、禁庭に對し奉まつり恐れ多い次第でございます、また關守の村山を切つて落せば、とりも直さず御府内を騒がすばかりか、朝敵と云はれ、反逆人と云はれても申し開く途がない、こりや此のまゝに逃げるにこした策はないと、其處になると思慮深き丸山なれば、御府内に逃げ込ます、門の外へ逃げ出して了ふ、其處で木戸を閉たから村山の役目も落度がない、落度がないとすれば別に長追ひする用もなく、たゞか

かる曲者、當關所を破らんといたしましたが、之れを支えて取り調へ中、遂に門外に逃げ出だし行衛不明と相成りましたと、奉行まで届けさえすれば其れで事濟でございます、此方は丸山太郎でございます、一二の關は無事に拔けたが粟田口の關で大失敗、やッと其の場は遁れたが、これより京都に入いるのに、もう山越する外に途はない、心は急けど詮方なく、いよ〳〵裏山越と心に決し、ドン〳〵と急いでまゐりましたが、どうも雜兵の姿では町へはいることが出來ません、なんとかして服を着換ぬと誰れに見咎められんにも限らない、これには一番閉口して仕舞、しばしは木の根に腰打ちかけて、兩手を組で思案して居りました、ところが遙かに人の唄う聲が聞えます、サテは柴刈りか、たゞしは木挽か何にもせよ、着物を取り換へてやらふと、聲をたよりに分け登つて見まするに、果して木挽小屋が一ツある、それに二人の木挽が精だして木を挽て居りまする

山で切る木は澤山あれど……思ひ切る氣は更に無いよ……ヨイ〳〵

乙「思ひ切れとは死ねとの事か……死で見せます面當てに……なアおい乃公はこうして金儲けになるが、今度の戰は天下分け目ぢや、何ちらが勝だらふねへ

甲「其りやお前秀吉樣だよどうして〳〵北國の柴田が勝てるものか

乙「其樣だね、其れにしても秀吉樣と云ふは今の事だが、あれで信長樣の草履掴みだつたと云ふが、人の出世程ど分らねへ者はないな

甲「全たくだ、其れと云ふも實は夫れ光秀とのゝ遣方一つで、つまり運が向いて來たものか、なアに本能寺の合戰がなけりやお前、山崎の戰も無へで濟む、すると今まに世は織田さまの者ぢや、そうなると矢張り筑前守は筑前守で、まア一寸した大名と云ふまでサ、ところが山崎合戰で桔梗は亡び、まア〳〵天下は羽柴さまの者になるやうなものさ

乙「ほんとうに運の強い者は左樣もんだよ其のお蔭げで戰爭も知らず、呑氣に仕業が出來て、金儲けがある

と云ふもの、世の中と云ふものは太平に越たことはねへが、たまには戰爭もあるが可いぢやねえか第一下々の者が儲かるからな

甲「儲かるか知ぬが武士の身になると面白くもあるまいよ、なにしろ命懸けだからな、手拇したつて賞があつても討死でもしたが最後、可愛妻子にまで淋しい目をさせねばなるめへ、あ〳〵可嫌なことだ、おや〳〵淋じい目をさすと云や、もう日暮になつたが、宅で嬶や子供が待つて居るだらう、もう明日の事に仕樣ぢやねへか

甲「其れも宜いな、これから歸宅で寢酒でも引ッ掛けて、此の疲れを休めてやらふ

乙「さうだ〳〵と二人の木挽、道具を仕舞い歸る支度をして居る樣子

本「おい〳〵其處な木挽衆、ちと頼みがあるが聞いては呉れまいか

甲「誰れだい、變な聲を出しやがつて、木挽衆もねへもんだ、顔を見せねへか……コレは〳〵お武家樣でございまし奉つる、とんだ失禮を申し上げ奉つり、どうか生命だけはお助けを願ひ上げ奉つり、こ

の通りお詫び奉まつり……：

太「そう奉まつらないでも濟ことや、ちと其の無心にまゐつたのぢや　乙「へい〳〵無心と仰しやいましても、こゝは眞の作事場で、着の身着のまゝ、ほんの裸百貫でございます　太「その着物が貰ひたい……　甲「滅相なこと仰しやいます、御覽の通り襤褸の錦、千手觀音まで御鍍座ましましと云ふへイ〳〵汚いもので、幾らにもなりますめへ　太「はゝゝ此りや予が惡かつた、譯も云はずに、たゞ其の着物を貰ひかゝつたものだから、泥棒イヤ野武士とでも思ふたであらふ予は左樣云ふものぢやない、少し譯あつて戰場から脱て來たものだが、このまゝでは京都に入いれず、實は當惑の折柄、幸いお身達ちの聲がするので、實は此の具足や鎧下と、其のお身達の着物と取り換へて貰ひたい、其のお禮には料金も置いて行くとうぢや取り換へてはくれまいか、無心と云ふたは此の事ぢや　甲「へイ〳〵夫れはまたお安い御用、さあ〳〵お召し下されま

せう……と、一人が繩の帶を解いて裸体になる、太郎も具足をとり鎧下を脱で着換て見たが、氣持の惡いこと〳〵、垢で襟が冷々する、汗臭ひ、虱みも居ると云ふ始末、しかし此れならば大丈夫、まさか誰れが見たッて、丸山と見はすまいと、大刀も莚に包み、木挽の手拭まで貰ひ受け、若干かの料金を置いて、

太「これで武士とは見へまいか　甲「いかにも木挽でございますようお似合申します……　太「太儀であつた……　乙「靜かにお歸り遊ばしませう……：此れから裏山越えていよ〳〵黑谷を越え、南禪寺に着たのはかれ是れ夜中頃でございます、戸を叩いて、

太「開けて呉れ　○「たれだい、用があるなら明日にせい　太「俺れだ〳〵開て來れ　○「俺れぢや分らねへ　太「太の字ぢや　○「太の字だつて誰れだらう　太「丸山ぢや……　○「エ、先生ですか……おや〳〵宜うまア無事に歸られましたな、サア〳〵早くお入いりなさいませ、何もかも粟田口の大變、聞きましたよ、親分も

薬い心配、一寸知してまゐりませう、おや〳〵先生、驚いたね其の扮装にやア……太「はゝゝゝ千手觀音様も居てござる、まアー匹遣はさうかな……それお土産だ　○「先生御冗談ぢやございませんせ、いよ〳〵此れより石川五右衛門、小山田源次に利之助の身の上を物語り、五右衛門の忍術で、利之助を救ひ出すと云ふ、紫野大徳寺の大騒動、丸山太郎の働きは、一寸一服御免を蒙りまして……

第十

八席

木挽姿に身を扮し、立ち歸ツたる丸山太郎　太「御兩所方にお別れ申してから、實は斯様云々でござつたが、大徳寺まで護送となるも今日明日の内、是非とも助け出ださねば相成らぬ、其れに就いては石川との〻御盡力を願はねばなりますまいと、觀音山の騒動を物語る、佐野、小山田、石川も大ゐに驚き　石「其れは大變でござる、しかし大徳寺に到着の上は、助けだすのは譯はない、拙者にお任せ下さい　太「イヤ石川氏に御依頼申せば大丈夫、然らば吾々は姿を扮し、齋藤との〻到着の斥候を致すであらふと、茲で利之助を助け出す手段を工夫し其の夜は伏た、夜が明けるとすぐに支度して斥候に出掛るのでございます、尤も丸山、佐野、小山田も、夫れ〳〵丸腰の町人の姿にて粟田口から大徳寺附近、また小早川隆景候の東福寺へと、各自に參りましたが、最うえらひ評判でございます　○「なアもし、とうです、油斷のならぬ世の中ぢやございませんか、人もあらふに秀吉公の御陣處に忍び入り、切り込んだ奴があると云ふぢやございませんか　○「夫りやお前さん、戰爭のことだから、何時ど、こから切り込んで來るやら、聞者が入つて居るやら、夫りやとうも仕様がねへ、兎も角油斷した方が負になるなア　○「ところがお前さん、其の切り込んだ奴が北國勢だとか、美濃か桑名な